

---

# ドスィヤンクック物語～伝説の大怪鳥( 連載版)

曙大仙最果

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドスイヤンクック物語〜伝説の大怪鳥（連載版）

### 【Nコード】

N9155T

### 【作者名】

曙大仙最果

### 【あらすじ】

ハンティングアクションゲーム・“モンスターハンター”シリーズの世界にて、とある怪鳥イヤンクックの姿をした一匹の巨大な怪物が大暴れする というお話。

：提示していたアンケート的な物を×切しました。

2：“感想欄”から頂いたアンケートの返信は、頂いたキャラクター案を使用する直前に行う予定です（つまりは“一部例外も有り”

” 的な感じですよ。”

【設定資料：総合戦闘力早見表】（平成23年9月4日・追加修正）

【設定資料：総合戦闘力早見表】

：数値化された戦闘力の基準は、八割方が“ネタ”です、真に受けしないで下さい。

【大怪鳥ドスイヤンクック】

戦闘力：990,000

みんな大好き大先生。従来のイヤンクックの十倍程の巨体を持つ、この世のバグ（笑）。出力可能な最大火力は未知数だが、数秒程度の溜めで“ソーレイ”級のレーザー光線状のブレスを放つ事が出来る。

【大佐】

戦闘力：530,000

白いタキシード姿の、お髭が素敵な白髪の老紳士。仕込み刀である黒いステッキに“錬気”を集束して放つ破壊光線・“磁重退碎怒<sup>ジェノサイド</sup>無礼婆”は、某・白い魔王のSLBさえ凌駕する破壊力を秘めている。因みに、“大佐”とは英語で“colonel”という。因みに、彼の口癖である『ぶるああ』とは、彼の“一族”に代々伝えら

れてきた由緒正しき雄叫びである。

【教祖様】

戦闘力：530,000

黄色い服と大きな靴が特徴の、赤いアフロが魅惑的な道化師。自身

“体組織”を錬成陣代わりに術式を組んでおり、機関銃の如く連続して打ち出す“ハンバーガーの様なモノ”は、一発いっぱつが同質量の隕石に匹敵する。信者たちから信仰の力 “神力”を得ており、この神力が尽き果てない限り、彼が本当の意味で死ぬことは無い。

【究極加虐生物】

戦闘力：530,000

四季のフラワーマスター。『妖怪の山相手に単独で戦争が出来る』とも言われているが、仮に妖怪の山の総戦力を用意しても彼女が一方的に無双してしまう為、実質的には戦争にすらならない  
というのが、この作者に於ける彼女の脳内設定。

【風翔姫クシャナ】

戦闘力：300,000

大先生に討ち滅ぼされた“激昂したクシャルダオラ超越種特異個体（覚醒モード）”が、“古龍の大宝玉”を媒介に“東方project”の世界へと新生を果たした存在。銀髪金眼の巨乳美女で、口調が東方不敗で、声色がハマーン様？ 戦闘狂だが、人並みの良心はある模様。御年数億歳で、“えーりん”よりもずっと年上という設定。

【最終鬼畜妹】

戦闘力：1000,000

紅い悪魔の館の妹様。因みに、彼女が持つ“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”は、余りに規格外過ぎる能力である為、この戦闘力の判断材料からは度外視している。

【激昂したクシャルダオラ超越種特異個体（覚醒モード）】

戦闘力：50,000

モンスターハンターの世界に於いて、最強クラスの実力を持つ鋼龍。吐き出す圧縮空気のブレスは、高い速射性と、某・騎士王が所有する宝具の真名解放と同程度の威力を有している。逆巻く風の鎧を纏まつての体当たりは、まるで“超級霸王電影弾”の様である。

【マツスル牙獣（仮称）】

戦闘力：15,000

“紳士（という名の変態）”を自称する、八頭身でマッチョな桃<sup>ンガ</sup>毛獣。大抵の古龍種を拳一つで秒殺可能で、飛行能力を有している相手には“投石”で対応している。因みに、この投石は超音速で、すつ飛んで来る為、軽く掠めた程度でも常識的な生物にとっては致命打と成り得る。

【朱髪碧眼の鉄槌メイド】

戦闘力：8,900

重さ約200キログラムの鉄槌を愛用。華奢な外見にそぐわない怪力を活かした白兵戦が得意で、金獅子程度なら素手で殺れるらし

い。実は地上最強の人間だったりする（：某・老紳士と某・道化師は人外認定）。

【黒龍ミラボレアス】

戦闘力：5,000

大先生にぶっ飛ばされた（笑）個体。大先生の眠りを妨げて物理的にぶっ飛ばされた命知らずだが、“伝説”と謳われているだけあって、他の古龍種とは一線を斯くする高い戦闘能力を持つ。因みに、五体満足で生還している。

【崩竜装備のママさん（全盛期）】

戦闘力：3,700

とある集落で某・孤児院を経営している元・ハンター。愛用武器はガンランスだが、盾を装備しない独自のスタイルでの高機動戦を得意としている。今は病み上がりで療養中。

【老山龍ラオシャンロン】

戦闘力：3,500

大先生に秒殺された個体。従来の老山龍より攻撃的で俊敏性に優れ、凄まじい耐久力を誇る。が、火竜等の飛行能力と遠距離からの攻撃手段を有する大型モンスターの前では無力化する為、この位置付けとなった。

【霸竜装備の女傑（ネイ＝レンクス）】

戦闘力：3,000

人間サイドの主人公的ポジションに位置する女性ハンター。大抵

の大型モンスターを単騎で討伐する事が可能な完璧超人。メイン装備は大剣であるが、実はどんな装備も人並み以上に扱える万能方の狩人。

【轟竜ティガレックス】

戦闘力：1,750

大先生に獲物<sup>ホボ</sup>を横取りされた個体。同種の中でなら間違いなく最強クラス。古龍種にも負けなくらい強い。

【霞龍オオナズチ】

戦闘力：1,500

大先生に踏み潰された個体。多様な特殊能力を有する強力な古龍だが、全長100メートル近い巨大ヤンクツクの前では無力だった。因みに、大型の古龍種の平均的な戦闘力は“1,000”前後である。

【砦蟹シェンガオレン】

戦闘力：1,200

某・女傑に討伐された個体。攻守共に非常に高く、吐き出す“強酸”のブレスも強力だが、動きが鈍重過ぎる故に攻撃が当てられない為、実質的な戦闘力は大型の古龍種に及ばない。

【水竜ガノトトス】

戦闘力：800

大先生によつて捕食された個体。結構な大物だったが、遙か上空から一気に水中まで強襲してきた大先生の餌食となった。



【盾蟹ダイミヨウザザミ】

戦闘力：450

大先生によって捕食された個体。ごく普通の盾蟹で砂漠をうろついていた所を、砂中に潜んでいた大先生に襲われた。

【怪鳥イヤンクック】

戦闘力：200

一般的な怪鳥が持つ戦闘力の平均値。上位・G級といった個体ともなると、この倍以上にまで一気に跳ね上がる。

【モヒカン頭のアイルー】

戦闘力：50

世紀末な装いが特徴的なアイルー。ベテランのハンターと同程度の実力を持つ。これくらい強ければ、立ち回りと状況次第で大型の飛竜もソロ討伐可能。因みに、“モヒカン”は付け毛だったりする。

【新米ハンター】

戦闘力：20

普通の新米ハンターが初期装備で身を固めた際の平均的な戦闘力。心身を鍛え、ある程度の武術も習得している為、一般人よりは断然強い。

【弱体化した中国】

戦闘力：20

とある理由から弱体化した、紅髪が特徴的な華人小娘。某・世紀末なアイルーと比較して半分にも満たない戦闘力だが、これでも常人の倍程度の身体能力を有している。格闘限定の対人戦であれば、某・女傑にも負けはしない。

【現代人（成人男性）】

戦闘力：5

現代の成人男性が、ハンターの初期装備で身を固めた際の平均的な戦闘力。特に体を鍛えている訳でもなく、実戦経験も皆無である為、『一対一で漸くランポスに勝てるかも知れない』といった程度の戦闘力しかない。場合によってはポポにも負ける。

【超・番外編：牙獣紳士列伝】

『常識は投げ捨てるもの』と、改めて思い知らされたニヤ。by・とあるモヒカン頭のアイルー

【超・番外編：牙獣紳士列伝】

「 ヒヤッハーツ！！ 汚物は消毒ニヤーツ！！」

「『『『ヒヤッハーツ！！！！』』』」

ガーグアと呼ばれる、二足歩行の巨大な鳥に跨って爆走するモヒカン頭のアイルーを筆頭にして。

同じくガーグアに跨った如何にも柄の悪そうなアイルー達が、叫びながら消臭玉をばらまいていく。

目標は、太った猿の様な姿をした桃色の毛並みを持つ“コンガ”と呼ばれるモンスターの群れである。

《ウホッ！？ ウホウホウホッ！！！？》

《ウツホウホホッ！！？　ウホッ！！》

《ウホッ！？》

《ウ　ウツホ、ウホウホ　ッ》

《《《《ウ、ウホホ~~~~ツ！！！？》》》》

悲鳴を上げて、逃げ惑うコンガたち。

彼らコンガたちは、密林や沼地に群生している“キノコ”類を好んで喰い漁り、外敵への攻撃手段として強烈な悪臭を伴う“放屁”を用いる。

その為、現地民から“害獣”と見做され、駆除の依頼がギルドに寄せられることがあるのだ。

今回も　まあ、駆除の一環　だと思っ。

「「「「「ヒヤッハーツ！！！！」「」「」「」

多分（汗）。

\*\*\*\*\*

『なあ、ここ最近のアイルードも、少し調子に乗り過ぎていると思わないか？』

とある密林の奥地にある自然の広場、その中心で円卓を組んで話し合うコンガたちの中の一匹が、そう言った。

『ふむ、その意見には同意するが、それで一体どうすると言うのだ？ 悔しいが、あのアイルードも今の我々の戦力ではまるで歯が立たないぞ』

『そうだな、奴ら自体も相当な強肩を持つ手練だが、何より厄介なのは、奴らが手懐けているガーグアたちだ』

『あのガーグアたち、通常のガーグアより三倍速いからな。我々の足では、どう足掻いても追いつけない』

『それだけではないぞ。以前、物陰に隠れて見た事があるのだが、あのガーグア、俊敏性だけなら“迅竜”より上だ。なにせ実際に、その迅竜の執拗な攻撃さえ容易くあしらっていたからな』

『なんだとッ!?!』

各々話し合い、そして改めて思い知らされた戦力差に、絶句する一同。

『ふ、ふふふつ、ふふふふはははははははははははは　ッ！』  
だが、一匹だけ高らかに笑う者がいた。

『何がおかしい?』

そんな彼に懐疑的な視線を向けながら、一匹のコンガが訪ねる。

そして、“彼”は宣言する。

『勝てる要素が無いなら、作ればいい！　まずは  
“これ”を見るッ！』

『　　ッ!?　それは　ッ!』

彼が自身の背後から取り出した“それ”を見て、この場に居合わせた誰もが息を呑んだ。

『“これ”を使えば、我々の勝利は決して揺るがない  
日、奴らに対し逆襲しようではないか!』　　明

言いながら、彼はさも愉快そうに牙を剥いて、黒い笑みを浮かべてみせた。

\*\*\*\*\*

「 ヒヤッハーツ！！ 汚物は消毒ニヤーツ！！」

「「「「ヒヤッハーツ！！！！」「」」」

後日、再び爆走するガーグアに跨ったモヒカン頭のアイルーとその仲間達は、叫びながら、コンガの群れに向けて消臭玉をばらまいていた。

しかし、今回のコンガたちは一匹たりとも逃げようとはせず、寧ろどっしりと身構えている様であった。

《ウホホウホツ！！！！》 訳：そこまでだツ！！！！》

そして、コンガの群れの一匹が何やら吠えると、その腕に羽交い締めになっている“あるモノ”をアイルーたちに見せ付ける。

「ニヤ ツ！？」

あつた。  
それは、外見年齢10歳くらいの“幼い少女”であった。

薄紫色のワンピースから大胆に覗かせている白い肌は新雪の様に汚れを知らず、スラリと伸びた長い四肢は如何にも繊細そうで、軽

く撫でただけでも折れてしまうのではと思わせた。

セミロングにしたブロンドヘアは砂金を散りばめでもしたかの様にキラキラと輝いており、その顔立ちは、正しく“美少女”と呼ぶに相応しいほど整っている。

そんな彼女の白い肌と相俟ってか、赤く小さな唇が殊更にぷつくりと瑞々しく強調されていた。

しかし、その長い睫まぶたに彩られた瞼は堅く閉じられており、彼女の意識が無いだろう事も見て取れた。

「ウホウホホウホホウウウホホウホ、ウホウホウホホウホウホホッ！ ウホホウホ、ウホウホウホウホウホウホウ、ウツホーウホウホウホウホホウホウホッ！？」（訳：この小娘の身を案じるのであれば、今すぐ武器を捨てるッ！ さもなくば、この小娘の小綺麗な顔に、一生モノの傷が付く事になるぞッ！？）》

少女の顔に鋭い爪を向けながら、例のコンガがまくし立てる。

それに対して、アイルーたちはというと。

「コンガ？」「コンガ？」

コンガが何を言っているのか理解出来ずに、全員が小首を傾げていた。

そもそも、彼らコンガが扱う言語（？）が、アイルーたちに通じ



する筈もなかったのだ。

異文化コミュニケーションって、難しいなあ。

「 待てゐッ！！！！！！！」

しかし、そのコンガが扱う言語を理解し、“待った”を掛ける凜々しい声が辺りに響いた。

声が聞こえてきた方を見ると そこには、腕を組ながら高台に立つ、見事な逆三角形を描いたマツスルボディーを持つ八等身の人影が一つ。

「美少女を拐かし、その身を盾に利用する ヒト、それを

“外道”と言う！！」

《ウホホ、ウホウホホッ！？（ 訳：貴様、何者だッ！？）》

「貴様に名乗る名前は無いッ！！！！！！」

自説を語り、例のコンガから誰彼を問われ、その問いを切っ捨て捨てる人影。

と言っか、この人影の方、コンガの言葉が分かるのだろうか？

「ておあああッ！！！！」

そして、人影が叫びながら高台からジャンプし、地上へと降り立ち。

その姿を目の当たりにした誰もが、絶句させらる事となった。

3メートル近くもある筋骨隆々とした鋼の肉体と、股間にはためく白い禪ふんどし、通称・“ファミ通漢布”。

遅しく盛り上がった大胸筋がピクピク動き、腹筋は見事に割れている。

四肢は野太く、まるで大木の様だ。

そして、全身を覆う“桃色の体毛”。

これが、“着ている”のではなく、“生えている”のだ。地肌  
に、直に。

骨格やら体型が明らかにおかしい点を度外視すれば、その姿はまさしく『コンガ』のそれと酷似していた。

と言うか、理性的な表情をしているものの、首から上が普通にコンガだった。

後肢のみで直立し、背筋をピツと伸ばし、胸に七

つの傷跡があったりすると、何かからして、何かを激しく間違っている気がしなくもないが。

「さあ、お前たちに幼女の素晴らしさを叩き込んでやるう！」

大胸筋をやたらとピクピクさせながら握り拳を掲げて、何やら宣言する“コンガのようなもの”。

斯くして、“惨劇”の幕開けが此処に成った。

\*\*\*\*\*

真っ先に狙われたのは、金髪の少女を盾にアイルーたちを脅していた、一匹の狡猾なコンガであった。

ナギツ、という音が聴こえてきたと思った瞬間、マッスル牙獣の姿が、皆の視界から文字通り“消えた”。

そして。

「星となれッ！！！！！！」

鉄拳制裁、打ち上げる様にして叩き込まれたボディーブロー。

皆が気付いた時には、既に狡猾なコンガが殴り飛ばされており、そのまま空の彼方へと消えていった。

キラーン、という擬音と共に、お空に輝くお星さまが一つ増える。

空の向こうで、狡猾なコンガがニヒルな笑みを浮かべてサムズアップしている様な気がした。

空の向こうを眺めて、思わず呆然としてしまうアイルーたちとコンガたち。

「ふつくしい、まるで天使の様だ」

そして聞こえてくる、余りに場違いな台詞。

声が聞こえてきた方を見ると　そこには、少女を左腕に抱きかかえ、その小さな頭を空いた右手で如何にも愛しそうに撫でるマッスル牙獣の姿があった。

「子供特有の、ふんわりと柔らかい髪の毛、もっちりプニプニのお肌に、微かに香るミルクの様な甘いにおい　そのどれもが、私の庇護欲を掻き立てる」

言いながら、空を仰ぎ見るマッスル牙獣。

その表情は愉悦に緩みきっており、何処か満ち足りている様にも

見えた。

しかし。

「さて、こんなにも愛らしく美しい幼女を、君達は余りに下らない争いに巻き込んでくれた訳だが、何か言い遣しておく事はあるかね？」

次の瞬間には、顔面全体にビキビキと血管を浮き上がらせて、悪鬼羅刹を彷彿させる苛烈な形相へと変貌していた。

口調は丁寧であるが、言葉の端々からも敵意を題している事が見て取れる。

ナギツ、という音と共に、マッスル牙獣が再び消えた。

「答えは、聞いてない!!」

《ウグホオツ!!!!?》

ポ!!!! という爆音を伴って放たれた、マッスル牙獣のミドルキック。

それが、一匹のコンガの胸にクリーンヒットし、そのまま地平線の彼方まで真っ直ぐぶっ飛ばし。

「そおいッ!!」

《《ゴッホ!!?》》

続けざまに繰り出された尻尾の一撃が、直ぐ側にいた二匹のコンガを纏めて薙ぎ払い。

「ぶる ああッ !!!!!!!」

《《《ツ!!!!?》》》

そして、吐き出された炎のブレスが引き起こした大爆発によって、残りの数匹を纏めて吹き飛ばしてしまった。

「「「「「」」」」」」

攻勢に出てから、僅か十数秒。

未だ目を覚まさない少女を腕に抱えつつ、瞬間移動じみた速度で動き回り、あっと言う間にコンガの群れを殲滅してしまった。

「悪は滅びた」

意味がわからない。

ただ。

「次は 不甲斐ない猫どもを肅正させて頂こうか！」

絶体絶命のピンチである事だけは、強制的に理解させられた。

数秒後、このアイルーたちは、それぞれがコンガの群れと同様の末路を辿る事となった。

\*\*\*\*\*

「 何処に居るでありますかああッ、お嬢様ああああああああああッ！！！！？」

ドドドドドドドド！！と、土埃を上げて密林の中を爆走しながら叫ぶ少女が一人。因みに、スタンド能力は何ら関与していない。

ピヨコンと立ったアホ毛が目立つ朱髪を肩に掛かる程度の長さで切り揃え、ややつり上がった目には碧い瞳が輝いて、いや、輝くどころかハイライトが全く無い。寧ろ、濁りまくっている。

身長は160センチ前半くらいで、全体的に線の細いモデル体型をしているが、胸は慎ましく、白と黒を基調としたスカートの丈が短いエプロンドレス 所謂“メイド服”を着ている。

服装だけを見れば、それだけで彼女が侍女職に就く身の上である

と思わせられるだろうが、しかし、そう決め付けるには躊躇われた。

何故なら、彼女の決して大きくはない肩に、自身の背丈と同程度はあるだろう巨大な“鉄槌”が担がれているからである。

目測で少なくとも200キログラム以上あるだろう鉄塊。

そんな物を担いで、足場が安定しない密林を時速60キロメートル以上もの速度で疾走していく人外じみた身体能力を持った少女が、ただのメイドである筈がないのだ。

「はっ、殺気？」

残念ながら違う。

しかし、言いながら足を止め、空を見上げた彼女の感は、案外捨てた物ではなかったらしい。

《　　ウホオオ　　ツ！！！！？》

何と、こちらに向かって“コンガ”が降ってきていたのだ。

“晴れ時々コンガ”、“メイドも走ればコンガに当たる”。

目を凝らして、よく見てみると、後続にも数匹のコンガが彼女に向かって飛んで来ているではないか。



取り敢えず、肩に担いだ己の“得物”を思い切り振りかぶり。

「  
邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔ああああああ  
ッ！！！！」

鉄槌乱舞、縦横無尽に鉄槌をフルスイングしまくる。

本来なら“双剣”を用いて練り出すべき“乱舞”であるが、このキチガイ冥土は重量級の武具で再現してみせた。

その細腕 彼女と年代の、世間一般的な婦女子の平均値を若干下回る細い体の何処に、そんな馬鹿力があるのか小一時間ほど問いただしたいところである。

まあ、それはさておき。

《うわらば》

《えひゃい》

《ちにゃー！》

《ひでぶっ！》

《あべし！》

《アーーーーッ！》

《ウボアー》

《ぬわーっっ！！》

ドカツ、グシャ、バキツ、ベコン、ボゴツ、メキヨ、ゴシカアン、  
クシカツ　　と、立て続けに響く打撃音。

メイドによる鉄槌の乱舞は、彼女に向かって飛んできたコンガ数  
匹を打ち漏らすこと無く全て撃墜してみせた。

皆、個性的な断末魔をありがとう。

尚、彼らコンガたちは全治3ヶ月程度の重傷を負  
いはしたものの死にはせず、何とか一命を取り留められた事をこ  
こに表記しておく。

きつと、ギャグ補正でも働いていたのだろう。

「ふう」

短い溜め息を吐き、ドスンッ！！と鉄槌を地面に下ろす。

それから、『良い仕事をした』とでも言わんばかりに、かいても  
いない汗を腕で拭う仕草をする怪力メイド。

その清々しい表情からは、如何にもスッキリした感が滲み出てい  
た。

まあ、相変わらずナチュラルな感じでレ　プ目になっているのだ

が、これが彼女のデフォなのだろうか？

「むう？ むむむむむむむ、むゝ！？」

突如として唸りながら鼻をスンスンとヒクつかせて、辺りをキョロキョロ見回し始めた撲殺メイド。何か異臭でも感じ取ったのだろうか？

今この辺りには、彼女が手に持つ素敵な鈍器でピチュラれたコンガたちから漂う“錆びた鉄”的なニオイくらいしかしないと想像のだが。

と、不意にある一点を見つめて、メイドは呟く。

「向こうから、幼女のおいがする」

何でやねん。

「このにおい、間違いない」！

何が“間違いない”のか、僕にはわからないよ。

「これは お嬢様のおい ……！！！！」

犬か、お前は！？

「（お嬢様の）犬だッ！！！！」

威張って言うなッ！　そもそも地の文に反応するんじゃない！！

「今直ぐ馳せ参じるでありますッ、それどころかご無事でいて下さいまし、お・ぜ・う・さ・まああああああああッ  
！！！！！！！！」

鉄槌を肩に担ぎ、絶叫しながら再び爆走しだした犬メイド（非・犬耳&尻尾）。

途中、進路を阻む木々やら岩等は、手に持った鉄槌で粉碎しながら強引に突き進んでいく。

そんな彼女の後ろ姿が、通りすがりの狩人に目撃され、後日、密林に出没した新種のモンスターとして調査対象となるのだが

それを当事者が知ること、終ぞ無かつたという。

\*\*\*\*\*

「~~~~~む」

遅い筋肉の鎧を持つ八頭身のコンガ（とは思えない牙獣種っぽい何か）  
仮称・“マッスル牙獣”は、少しばかり困った

状況下に置かれて、どうするべきか悩んでいた。

『ヒヤッハー』と叫びながら暴れ回っていた“桃毛獣撲滅部隊（仮）”に対し、金髪的美少女の身柄を盾に脅迫していた“同族の群れ”。

彼らから美少女の身柄を奪還し、桃毛獣撲滅部隊（仮）と同族の群れの両者を喧嘩両成敗と言わんばかりに鉄拳制裁した迄は良かったのだが、実際にはその後の対応こそが重要かつ困難であったからだ。

「やはり、暫くは目を覚ましてくれそうにないか」

マッスル牙獣の逞し過ぎる腕の中で、今も眠り続けている美少女。

彼女が着ている服から、僅かながらも“捕獲用麻醉玉”に含まれている麻醉成分特有の臭いがした事から察するに、捕獲用麻醉玉によって“強制的”に眠らされていたのだらうと、マッスル牙獣は当たりを付けた。

“捕獲用麻醉玉”とは、多くのハンターに支給される頻度が高いアイテムの一つである。

その名の通り、モンスターを『捕獲する為に』使われるこのアイテムは強烈な麻醉作用があり、ある程度まで体力を消耗させてさえいれば、全長20メートルを越す様な大型モンスターでさえ昏倒させる代物である。

人外の領域に片足どころか全身突っ込んでいる様な 例  
えば、古龍種の猛毒さえ自前の免疫力で克服してしまう非常識なポ  
テンシャルを持っている極々一部のハンター（笑）に対しては何の  
効果も及ぼさない不思議アイテムであるが、“常人”に対してなら  
充分な麻酔効果が見込めるのだ。

「さて、どうしたものか」

スヤスヤと寝息を立てている美少女の可愛らしい寝顔を網膜に焼  
き付けつつ、マッスル牙獣は思案する。

彼は、“桃毛獣<sup>コンガ</sup>”である。

ババコンガ一歩手前の巨躯と、八頭身のマッスルボディー、そ  
して、人語を解する高度な知能を持ち合わせている“ちよつとユー  
モア”な個体ではあるが、それでも彼が“モンスター”である事に  
違いはないのだ。

そんな彼が、正面から堂々と人里に近付こうものなら、それだけ  
で騒ぎになりかねない と言うか、過去に幾度か人里に侵  
入を試みた事があるのだが、その都度、何らかの混乱を招いていた  
りする。

そう考えると、マッスル牙獣が直に美少女を人里まで送り届ける  
事が得策とは言い難いだろう。

「まあ別に良いか、騒ぎになるくらい」

サラツと言ってのけるマッスル牙獣。

退かぬ、懲りぬ、省みぬ！！

とても言えば、聞こえは良いかも知れないが、要約すると『進んで、同じ失敗を繰り返し、そして反省しない』と言っているのと同義である。

「はっ、殺気？」

ふと、何処かで聞いた様な台詞を口走るマッスル牙獣。

彼が明後日の方向に視線を向けてみると。

「フウ、フウ」

そこには、何やら肩を上下させて呼吸を整えている朱毛の素敵なメイドさんが。

「クワッ」

否、禍々しい“修羅”が居た。

肩に掛かる程度の長さで切り揃えられた朱い髪を振り乱しながら上げた顔は、美しくも能面の様に無表情だ。





咆哮するメイド。

同時に、彼女は人間とは思えない速さで駆け出し、そのまま数瞬でマッスル牙獣に肉薄した。

そして。

「貴様に朝日は拝ませねえッ！！！！」

言いながら、彼女はそのか細い指先で握り締めた鉄槌を大きく振りかぶった。

この朱毛のメイドとの開戦前、マッスル牙獣は思った。

『これって、選択肢なくね？』と。

\*\*\*\*\*

とある密林の某所で遭遇した、（お嬢様の）犬を自称する“メイドさん（へんたい）”と、幼女をこの上なく愛する“マッスル牙獣<sup>へんたい</sup>”。

この二人　と言うか、一人と一匹（？）によって練り広げられる事となった聖戦（笑）は、開幕直後から苛烈を極めていた。

一方は、敬愛親愛友愛恋愛溺愛最愛なるお嬢様を奪還するべく  
それと“ついで”に、お嬢様に汚らわしい手で触れた害獣を駆除する為に。

もう一方は、まあ、単純に生存本能に従って、割と本気で對抗している。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
オラオラオラ」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無  
駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無  
駄無駄無駄」

ドドドド　ツツ！！！！！！！！

と、連続して鳴り響く打撃音。

因みに、新手のスタンド使いが現れた訳ではない。

怨敵を粉碎するべく幾度も振るわれるメイドの鉄槌と、それ迎撃していくカタチで防いでいくマツスル牙獣の鉄拳。

両者が正面からぶつかり合う度に衝撃波が発生し、周囲一帯の大

気を震わせていく。

「オラアッ！！！！！」

「無駄アッ！！！！！」

ドゴオオオンツッ！！！！！！！！！！と響く重々しい打撃音。

一際強烈な一撃がぶつかり合い、その衝撃で互いに後方へと吹き飛ばされ、両者の間に距離が開いた。

と、思った次の瞬間には、既にマッスル牙獣の眼前まで接近していたメイドが、その手に持つ鉄槌を横薙ぎに振るっていた。

「ぬおあつとお！！？」

頭蓋を粉碎せんと真横から迫り来る鉄槌を、直撃する寸での所で上体を仰け反らせて緊急回避。

横切る鉄の塊が、マッスル牙獣の鼻先を掠めていった。

「ちっ」

あからさまに舌打ちするメイドさん。

必中必滅の威を込めた一撃を避けられた事が、相当不服らしい。

(なにあのメイドこわい)

完全に“殺すこと”に徹底している。

ある程度まで熟練した兵法者なら、誰もが少なからず持っている“遊び心”といった物が一切無い。

更に相手は、ただ強いだけでなく“女の子” しかも、かなりの美少女だ。

まさか怪我をさせる訳にもいかない為、始末に負えない。

付け加えて、こちらは片腕が塞がっている状態で対応しなくてはいけないのだ、結構ギリギリである。

「んッ」

不意に、マッスル牙獣の左腕に抱きかかえられて眠っている美少女  
薄紫色のワンピースを着た金髪の幼い少女が身じろぎした。

「ッ！？」

ザ・ワールド、時は止まる。

壊れた蛇口みたいに殺気を噴き出しながら鉄槌を振り回していたメイドも、襲い来るメイドの攻撃に対応するべく構えていたマッス

ル牙獣もピタリと動きを止めた。

「んう、ん？」

小さな頭を上げて、寝ぼけ眼のまま周囲を見渡す少女。

自分の置かれた状況を把握出来ていない様だ。

そんな彼女の様子を、一人と一匹は黙って見守っている。

そして。

「うにゅ？」

結局、現状を理解出来なかった少女は、コテンと小首を傾げた。

まあ、目が覚めたらマッチョでピンクなゴリラに抱きかかえられていて、自分の従者が鉄槌片手に臨戦態勢に入っていたなどというカオスな状況を起き抜けに理解しろ、と言う方が無理があるかも知れない。

「ッがはぁッ！！？」

吐血する変態二匹。

美少女の萌えくるわしい(?)仕草による不意打ちは、神経をゴリゴリ削る戦いで荒んでいた彼らには致命的だったらしい。

メイドはその場に膝から崩れ落ち、マッスル牙獣は『我が生涯に一片の悔い無し』と言わんばかりに立ち往生した。

斯くして、密林で繰り広げられていた変態二匹による激戦は、たった一人の幼い少女によって強制的に終結させられたのだった。

\*\*\*\*\*

「だから、ふたり(?)ともケンカやんかしちゃダメなんだからね、わかったかな!？」

目を覚ますや否や、その場に居たメイドとマッスル牙獣から事の顛末を聞き出し、その内容に激怒した金髪幼女。

二人(?)をその場に正座させて、それから彼女が説教をし始めてから、既に小一時間ほど経過していた。

「はい、お嬢様。心に留めておくであります  
ハアハア  
(ノノノノ)」

愛しのお嬢様に説教されて、鼻から流れる赤い忠誠心をハンカチで抑えながら、何かハアハアしている駄メイド。

駄メイド曰わく、『頑張って大人っぽく振る舞いながら、ぷりぷり怒っている様子にグツとくる』らしい。

正直、何を言っているのか意味がわからない  
宇宙語だ  
ろうか？

(何故、私まで説教されねばいかなのだろうか、理不尽だ)

一方、マッスル牙獣は真つ当な事を考えていた。

まあ、幼女を助けた矢先にメイドから襲撃され、そして何時の間にもやら説教されているこの状況は、確かに“理不尽”と言えよう。

「わ・かつ・た・か・な　!？」

「い　イエス・ユア・ハインス！」

ズイツと前屈みになって、マッスル牙獣を睨み付ける幼女。

返事をしなかった為、無視されたと思われたのだろう。

(幼女に睨まれるとは、これはこれで有りかも知れんなあ

ハアハア (ノノノノ)

そして前言撤回、やはりコイツも変だった。

《キユ~~~~》

それから突如として、可愛らしい鳴き声が少女のお腹から聴こえてきた。

「 あ ( / / / ) 」

赤面する少女。

彼女は捕獲用麻醉玉によって眠らされていた為、もう二日近く何も口にしていないのだ。

空腹にもなれば、腹の虫が催促してくるのも至極当然と言えよう。

「お嬢様、一度キャンプに戻られてみては如何でありましょうか？ お嬢様の健康状態を考え、今度の事件で消耗した体力こたひの回復を図るべきと愚案するであります」

スツと立ち上がり、何事もなかったかのように対応する完全で瀟洒なメイド（偽）。

態度こそまともであるが、しかし鼻血を噴き出しながらでは残念ながら全然決まっていない。

「あ、うん、そうだね。さすがに疲れちゃったし、そろそろ戻るか」



「了解、ここからキャンブまでは距離が離れている故、僭越ながら私がお嬢様をキャンブまで運ばせて頂くであります。運び方は、“おんぶ”と“抱っこ”と“肩車”のどれが良いでありましようか？」

因みに、お勧めは“肩車”であります」

先程までの駄目っぷりは何処へやら、柔らかい笑みを浮かべてスラスラと受け答えしていくメイドさん。相変わらず目は濁っているが。

鼻血も漸く止まったのか、ここに来てやっと“らしく”見える。

何故それを常に維持できない？

（お嬢様の“お股”が、私の首筋に、想像しただけでたまらないであります

ハアハア（ノノノノ）

訂正、やはり駄メイドは、何処まで逝っても“駄メイド”でしかなかった様だ。

「えーと、ちょっと待ってて、やり残したことがあるから」

そう言うと、未だに正座し続けていたマッスル牙獣の直ぐ側まで近付いていく幼女。

「？ 何か用かね、マドモアゼル」

「うん、まだ“お礼”を言ってなかったから  
ありがとうございました」

だから、

ペコリと頭を下げながら、彼女は礼を述べた。

「あなたのおかげで、たすかりました。今はこんなものしかお渡しできませんが、どうかお礼の品として受けとってください」

言いながら自分の首から下げていた“ペンダント”を外して、それをマッスル牙獣に差し出す。

赤い宝石で装飾が成された、純金のペンダントだ。

「これは」

受け取った“それ”を懷疑そうに見つめながら、マッスル牙獣は疑問を漏らした。

「ッ！？ お嬢様、それは

」

「いいの、他にもいっぱいあるし、それに、わたしにはあなたが居るから」

“それ”がどういった物なのかを知っているらしいメイドが口を挟もうとするも、他でもない自らが使えている主に遮られる。

「お嬢様。はい、わかったであります」

暗に『お前が居れば他は要らない』と言われて嬉しく思うが、それで誤魔化されるほど抜けてはいない。

が、しかし、主の決定に従者が異を唱えるなど以ての外だ。

仕方なく、無理矢理にでも納得して押し黙った。

「それじゃあ、“またね”」

そして、最後に『“さよなら”はキライだから、言わないよ』と。

そう笑みを残して、金髪の幼い少女は従者と共に、その場から立ち去っていった。

\*\*\*\*\*

「『またね』、か」

久しく掛けられる事が無かった言葉を反芻して噛み締める。

思えば、誰かからお礼を言われたのも、恩師が最期に残した言葉

以来 実に十数年ぶりである。

恩師の教えに半ば盲信的に従い、危機に陥った人間の女の子を何人も救ってきたが。

「悪くない、な」

言いながら徐に立ち上がり、マッスル牙獣もまた、密林の奥へと消えて行くのだった。

その顔には、心底嬉しそうな笑みが浮かんでいたとっぴ。

END

【超・番外編：牙獣紳士列伝その弐くわよう、よつよいく】

あの“桃毛コンガ獣の格好をしたおつきなおじさん”と  
“忍者っぽい白髪コンガの男性”は、いったい何だったのでしょうか？  
by・亜麻色の長い髪を持つ新米ハンターの少女

【超・番外編：牙獣紳士列伝その弐くわよう、よつよいく】

それは、ある日の正午、とある大きな洋館のテラスにて所謂ティータイムの最中に交わされた主従の会話であった。

「　　ところで、お嬢様　」

そう切り出したのは、ピヨコンと立ったアホ毛が目立つ朱髪を肩  
辺りで切り揃えた碧眼の少女だった。

年齢は十代半ば程度だろうか、顔立ちは矯正で、白と黒を基調  
としたエプロンドレス　　所謂“メイド服”と呼ばれる物を  
着ている。

「ん、何かな？」

対し、朱髪の少女から“お嬢様”と呼ばれた幼い少女は、おやつ  
のショートケーキをパクつくのを一時中断して、そのセミロングに  
した金髪を揺らしながら振り向き、短く聞き返した

華奢な体に着飾ったドレスは鮮やかな薄紫色をしており、簡素な  
造りながらも洗練された意匠から相当高価な品である事が伺える。

「先日、お嬢様が手放した“形見のペンダント”の件について、今  
更ながら改めて進言させて頂きたいのでありますが」

「あの“桃毛獣コンガの格好したおつきくて変なおじさん”にあげたや  
つのこと？」

「はい、仰います通り、あの“桃毛獣にコスプレしたキモいオッサ  
ン”に礼としてお渡しした品の事であります」

ポーカーフェイスを崩す事なく淡々と述べる朱髪の少女  
と、その内容に愛らしい顔をしかめる金髪の少女。

「 “また”、その話なの？」

短く溜め息を吐きながら言う。

ここ数日の間、このやり取りが日に一度は繰り返されているのだ。

いい加減、辟易してくる。

「あのペンダントは、お嬢様のご両親の数少ない貴重な形見の一つであります。今からでも回収し」

「くどい」よ

「わたしは“あれ”を手放したの、もう“わたしのモノ”じゃないの。だから、わざわざ余計な手間を掛けてまで回収する必要なんて、これっぽっちも無いわ」

『それが例え自分の“両親おやの形見”であれ、ね』  
と、そう最後に付け足して、金髪の少女は整然とした笑みを作る。

それから彼女は、おやつおやつのショートケーキをパクつく作業を再開した。

「」  
「」  
対し、朱髪の従者は、ただ黙する事しか出来なかった。

彼女は知っているのだ。

自分が使えている、この幼き主君が、2年前に死別した両親の事から未だに立ち直れていないのだと。

当然だ、世間ではその聡明な頭脳と優れた政治的手腕から“神童”などと持て囃されている彼女であるが、それ以前に、やはり“子供”なのだ。

今年で漸く十の誕生日を迎える文字通りまだまだ甘えたい盛りの真っ只中にある彼女が、寂しさから枕を濡らす事もざらではない。

早朝、寢室から起きてきた彼女が目元を赤く腫らしているのを見かける度に、胸が締め付けられる様な思いに苛まれる。

(我ながら、無力でありますな)

元・暗殺者アサシンの自分は、裏家業から足を洗ってから未だ日が浅い。

表裏問わず大抵の仕事はそつなくこなせるが、所謂ヒトの“心”といったモノに関しては極端に疎い　　というか暗殺を本業としていた為、感情等の類は、寧ろ以前までは押し殺していたくらいである。

故に、どう接すれば、親愛なるお嬢様のお慰めになれるのか、まだ良くわからないのだ。

お嬢様への“愛”だけは、日々モリモリと雪だるま式に肥大化していつているのだが　　如何せん、“それ”を活かせるだけの知識が足りていない。

( “師”よ、私は、どうすればお嬢様にお力添えする事が出来るでありますか )

思い浮かべるのは、かつて組織に命ぜられるがままに動く人形同然だった自分が、今の様に少しでも人間らしく変われる“きっかけ



”を与えてくれた、暗殺者の今は亡き先輩。

組織でもトップクラスの暗殺技能を持ちながらも、その優しすぎる性格故に誰よりも暗殺者に向いていなかった“彼”なら

自分ではなく、あのお人好しな似非忍者が生き残ってお嬢様の従者となっていたなら、或いは、今よりもお嬢様を幸せにする事が出来たのではないだろうか？

( ないもの強請りは、無意味でありますな )

取り敢えず、今更考えたところでどうにもならない“IF”<sup>もしも</sup>の話  
を、朱髪の従者は自らの“甘え”と共に捨て置く。

ふと空を仰ぎ見れば、そこには件のお人好しのト  
レードマークとも言える“白髪”と良く似た色の小さな雲が、一つ  
だけぽつんと浮かんでいた。

\*\*\*\*\*

一方その頃、とある荒野の某所にて。

「 先ずは“こいつ”を見てくれ、こいつを見て、どう  
思っ…」

全高3メートル近い八頭身のマツスルボディと桃色の毛並みを持つゴリラ 某・お嬢様曰わく『桃毛獣コンガの格好したおつきくて変なおじさん』こと一匹の桃毛獣が、その大きく逞しい掌の上に乗せた“ある物”を、目の前にいる逆立てた“白髪”が印象的な男に見せてみた。

「 すごく、おおきいです 」

対し、白髪の男 全身黒尽くめの、所謂“忍者”っぽい格好をした身長170センチ半ば程の青年は、自分の目の前に差し出された“ある物”を見て、至ってシンプルな感嘆の言葉を洩らした。

彼が“おおきい”と評した、その“ある物”とは 純金のペンダントの装飾に用いられている、“赤い宝石”の事である。

それは、ペンダントの中心部を飾る3カラット程の物が一つと、その周りを彩る1カラット程の物が六つの、計七つもの大粒の宝石が用いられていた。

「 お前さん、“これ”を一体どこで手に入れてきたんだよ 」

『 “これ”一つを然るべき所に売っ払っただけで、下手すりゃ国一つを丸ごと買えるぜ?』と、白髪の似非忍者は半ば呆れながら言った。

「まあ、所謂“不老長寿の妙薬”そのものだからなあ」

やや疲れた様子で、そう呟くゴリラ。

この“赤い宝石”  
実は宝石などではなく、某国で“守<sup>まも</sup>神<sup>りがみ</sup>”として奉られているらしい“日龍<sup>ひりゅう</sup>”と呼ばれている古龍の個体の体内で精製されると言われている結晶体で、これを人間が服用すれば、1グラムで1000年は若さを保てるとされている真正正銘の“不老長寿の妙薬”なのだ。

本来なら、国の守神である日龍に使える“巫女”たちのみ授けられる国宝らしいが  
日龍とその巫女たちの気紛れで、極々稀に一般の市場に宝石として紛れ込む事があるという。

因みに、“1カラット≒200ミリグラム”で、“1グラム≒1000ミリグラム”である。

件のペンダントに用いられている宝石は、3カラットの物が一つと、1カラットの物が六つ。

詰まりは、単純計算で“1800年分”の不老長寿の妙薬が手元にある事になる。

「で、その素敵なお薬を、お前さんはどうするんだ？」

「うむ、欲望の赴くままに使うなら  
私好みの美少女に飲ませて、俗に言う“エターナルロリータ”なるものを爆誕さ

せたいところであるが」

残念ながら、それは不可能である。

この不老長寿の妙薬の効能は、あくまでも“不老”であって、決して“成長”を妨げるものではない。

体の発育は寧ろ促進されるらしく、女性が服用すれば忽ち“モデル体型”になれるのだとか。

付け加えるなら、副作用として“若返り”やら“生命力・免疫力の増強”等その他諸々の素敵特典が満載らしいが、なに、気にすることはない。川、ー、、（

「それなんて“バストレポリューション胸革命”？」

「まさしく“ラストファンタズム最強の幻想”ッ、ロリ巨乳も夢ではない！」

意気投合して互いの手をガシツと取り合い、熱烈な握手を交わす変態二匹。

そして。

「思い立ったが吉日ッ、先ずは獲物ロリを探しに“街”へ逝こうか！！  
友よ、今が駆け抜ける時　！！！！！」

「応ッ！！！！！」

変態二匹は、宣言通り最寄りの“街”へ向かって爆走して逝った。

\*\*\*\*\*

「シラ脳漿を、ぶちまけるッ！！！！」

その狩人の叫びと共に、“密林”の某所で鋼鉄製のガンランスが火を噴いた。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
と鳴り響く炸裂音。

同時に咲き乱れる爆炎の花は、この密林を縄張りになっていた凶暴な鳥竜種 イヤンガルルガ 黒紫色の頑強な鱗と甲殻を持つ、“黒狼鳥”と呼ばれる鳥の様な姿をした大型モンスターの頭部を、ゴツソリと吹き飛ばしてみせた。

断末魔の悲鳴を上げる間も無く絶命する黒狼鳥。

ズシイイイインッ！！！！ と重々しい音を起して、黒狼鳥の全長10メートル程もある巨体が大地に沈んだ。

「よしつ、任務完了みっしよん・ごんぶりーと つー!!」

言いながら、自身の倍近い大きさの鋼鉄製のガンランスを構えた狩人 鋼鉄製のプレートを貼り付けた鞣し革の軽鎧で身を固めた、推定年齢10歳前後の少女が小さくガッツポーズをした。

緩やかなウェーブを描く亜麻色の長い髪の毛を持つこの少女の名前は、“アイラ・メヴァ”。

今年で十歳になったばかりの最年少ハンターにして、狩歴・2ヶ月程のルーキーでありながら、既に十数頭もの大型モンスターをソコ討伐してきたエリートである。

「うにゅー!?!」

ふと身の危険を察知して、アイラはその場から後方へと勢い良く飛び退いた。

その、直後。

《  
!!》  
ツツ!!!!!!!!

先程まで自分が居た場所を、滑空してきた黒紫色の巨大な物体が凄まじい速度で通り過ぎていった。

「っ! 黒狼鳥、もう一匹いたんですねッ」

その“黒紫色の巨大な物体”の姿を視認して、アイラが呟く。

ギルドに寄せられていた目撃情報では、確かに1匹だけだった筈なのだが、どうやら実際には“2匹”いたらしい。

《 ツ！！！！！！ 》

黒狼鳥の開かれた口腔から放たれる、炎のプレス攻撃。

「わっと ！？」

それをアイラは、横に飛び退いて何の危なげもなく避けてみせたが、しかし。

ズドオオオオオオオンツ！！！！！！

「うぼあーツ！！！！？」

プレス攻撃が“何者か”に命中し炸裂したらしい爆発音と共に、男性の物と思われる悲鳴が聴こえてきた。

その悲鳴が聴こえてきた方へ振り向いて見ると、そこに  
は、“桃毛獣コンガの格好をした3メートル近い体躯を持つおじさん”が、  
何か丸焦げなって倒れ伏していた。

「  
」  
《  
》

思いがけない第三者の出現に、アイラだけでなく黒狼鳥までもが体を硬直させて押し黙る。

「  
おいッ、大丈夫か相棒ッ!？」

そして、何か忍者っぽい白髪の男の人が物陰から現れ、丸焦げのおじさんの側まで駆け付けてきた。

「ぐふつ、不覚、可憐な“よう、よ”が何か頑張っている姿に萌えていたら、まさか黒狼鳥に燃やされようとはッ」

「ヤ無茶しやがって、自分好みの“よう、よ”を見掛けたからって、寄り道なんかするからこんな事にッ」

何か意味不明な事を言う丸焦げのおじさん  
と、無駄に大袈裟な嘘泣きをしながら、これまた何か意味不明な事を宣っている似非忍者。

なにあれキモい。



「駄菓子菓子ッ、我が生涯に、一片の悔い無し　ッ！！！！！」

倒れ伏したまま握り拳を掲げて、おじさんが何か叫びだした。

うん、キモい。

「そして復讐のゴリアテパニッシャーッ！！！！！！！！！！」

《　　ッ！？！？！？！？！？！？！？！》

ドゴシャッ！！！！！！　と響き渡る打撃音。

音源の方へ振り返ると、そこには先程まで倒れ伏していた笹のおじさんが何時の間にか黒狼鳥の直ぐ目の前に移動していて、その黒狼鳥を文字通り叩き潰していた。

「え」

なにそれこわい。

っていつか今、あのおじさん瞬間移動した！？

驚愕の余り、私は思わず口をポカンと開けてしまった。

「隙アリッ！！！！！！」

「んぐッ！！！！！！？」

そして、似非忍者によって、“何か”を口の中に放り込まれ  
それを半ば反射的に、ゴクンツと飲み込んでしまった。

「任務完了！」  
「ミッシェル・コンプレクター」

「オーイエーツ！！」

目の前には、何やら嬉しそうにハイタッチしている変態二匹。

何かよくわからないけど、すごいムカつくッ。

そう思った次の瞬間 自分の中で、“堪忍袋の緒”  
的な何かが、バツンツ！！！！ と派手に弾け飛ぶ音が聴こえてき  
た様な気がした。

そして。

「はらわす腑を、ぶちまける ツツ！！！！！！！！！！」

この日、わたしは、生まれて初めて、ガンランス  
最強の一撃である“竜撃砲”を人に向けて使用してしまいました。

反省はしてる けど、後悔はしない。

UNU

【鋼龍外伝：東方風翔姫・“起”】

先に言っておきますけど、私の名前は“中国”でもなければ、“紅 美鈴（くれない みすず）”でもないですからね。by・某・華人小娘

【鋼龍外伝：東方風翔姫・“起”】

その日、気が付いた時には既に、儂は暗闇の中に居た。

『ここは何処だ、儂は誰だ』

体が、思う様に動かせない。

まるで、全身を何かに押さえ付けられているかのように。

『儂は何故、此処に居る』

記憶の混乱。

現状に至る迄の記憶が、綺麗に欠落している。

『 否、違う、儂は、まだ此処に居るだけだ。儂は、まだ、この世界に生まれて間もない 』

ふと、理解した。

何となく“そう”感じただけなのだが、それが”正しい”と本能が告げているのだ。

が、それを理性が否定した。

生まれて間もないなら、この”知識”は何だというのか。

新生児が有するには、不釣り合いに過ぎる能力だ。

意味が分からない。

「 儂 八 誰 ダ ツ ……!! 」

そう叫んだ次の瞬間、暗闇の世界に亀裂が走り、砕け、崩れ落ちそして、その先から溢れ出た強烈な光によって視界を塗り潰された。

「 …… ツー!? 眩し ツ 」

暗闇に慣れ、広がりきっていた瞳孔が光の刺激を受けた事によって一気に収縮する。

暫くして、漸く光の刺激に慣れてきた目に映ったのは。

\*\*\*\*\*

「ふむ、これはまた、随分と懐かしい“夢”を見たものだな」

言いながら目を覚まし、体を起こして軽く伸びをする。

とある雪原の深部に位置する巨大な岩山　それを横からくり抜いて作った洞窟の奥に居を構え、獣の毛皮の上を寝床にしている“彼女”が夢に見たのは、自分が“この世界”に生まれた日のこと。

(ふふ　っ、儂も“あれ”には驚かされたものよ)

当時の情景を思い出し、つい苦笑してしまう。

この世界で彼女が初めて目にしたのは、変貌した自身の肉体だった。

全身を覆っていた重厚な鋼の鱗は全て失われ、その代わりにあったのは如何にも脆弱そうな真っ白い地肌だった。

大木のように太く逞しかった四肢はモヤシのように細くなり、かつて大空を翔た自慢の翼は面影すら残さず綺麗さっぱり無くなってしまっていたのだ、後ついでに角や尻尾も無くなっていた。

他には爪や牙（歯）が何とも頼りない物になり果てていたり、身の丈が十数分の一にまで縮んでいたり、そもそも骨格自体が全くの別物になっていたり　　と言いか、もはや全とつかえ状態だった。

（　まあ、このカラダも“雌型”だったのが、せめてもの救いだっただが　）

後に紆余曲折を経て様々な知識を身に付け、そうして自分の置かれた状況を正確に把握するまで、実に十年余りもの歳月を要した。

（　　“転生”、『死後、別のモノに生まれ変わる』などという、人間どもの俗説を、まさか、この儂が身を以て実体験する事になるうとは夢にも思わなんだわ　）

当初は不満だらけだった今のカラダも、慣れてしまえば実に便利な物だったのだ。

体が縮んでいる分だけ燃費が素晴らしく良くなり、筋力は以前と同等かそれ以上、前足（腕）が長く駆動範囲が広いお陰で痒い所には容易に手が届く。

そして、何よりも“能力”<sup>ちから</sup>を使った事が一番の朗報だった。

“大気を操る程度の能力”。

地上の何処にでもある“それ”を、文字通り己が手足の如く自由自在に操作する事を可能とする能力。

腕の一薙ぎで巻き起こす突風は空に浮かぶ雲を吹き飛ばし、冷気を帯びた息吹きは大海をも凍てつかせ粉碎する。

激昂すれば天災規模の暴風雨を呼び、天を裂く咆哮は数多の竜巻となる。

その殲滅力は伝承として語られる程に凄まじく、“大気”という地上を住処<sup>すみか</sup>とする者であれば常に触れている物を操る為、速攻性も極めて高い。

大気圏内に於ける直接的な戦闘力なら、間違いなく最強の部類に位置する“能力”と言えるだろう。

と、以前どこかで逢った“スキマ妖怪”なる神出鬼没の胡散臭い小娘に教わった。

(儼に“小娘”呼ばわりされて喜ぶ変な奴だったが、今頃は何をしているのやら)



まあ、それよりも、今の自分の力が、宿敵である“奴”に対し何処まで通用するか、それを試してみたいものであるが、しかし。

(惜しむらくは、この世界に“奴”が居ない事だな)

何せ、ここは自分が元居た世界とは異なる世界、所謂“異世界”なのだ。

異世界を渡り歩く術など、自分は持ち合わせていない。

会えもしない宿敵とは戦える筈が無く、それ故、“奴”相手に今の自分の実力を試せる訳もないのだ。

(あの胡散臭い小娘(スキマ妖怪)には世界を渡り歩く術があるらしいが、“あれ”に借りを作るのは危険《ぎゅるるるるるるるるるるるる》)

突如として割り込んできた“腹の虫”が空腹を告げる“音”に、彼女は思わず体を硬直させた。

“金色”に輝く切れ長の目をパチクリさせて、それから自分の腹に手を当てる。

「儂の腹から、ではないな」

眠りに就く前に十分な食事を摂っていた為、そう空腹ではない。

少なくとも、腹の虫が催促してくる程ではない。

(では何故？)

思わず小首を傾げる。

そして。

《ぎゅるるるるるるるるるるるるるるるるる》

再び洞窟の中に響き渡る“音”。

反響して分かりづらいが、どうやら発生源は洞窟の出入り口付近らしい。

「腹を空かした獣でも迷い込んで来たか？」

言いながら寢床から立ち上がる。

それから彼女は、取り敢えず“音”の発生源と思われる洞窟の出入り口へと、割と余裕そうな足取りで、ゆっくり向かっていった。

\*\*\*\*\*

一方その頃、洞窟の出入り口付近にて。

「 うふ、ふふふふふふふ 」

腰辺りまで伸ばした鮮やかな紅い髪の毛が印象的な、外見年齢十代半ば程の長身の少女が一人、ちよつと危ない笑みを浮かべながら雪塗れで力無く横たわっていた。

“龍”の一字が刻まれた星形の装飾が付いた帽子を被り、若草色のチャイナドレスに身を包んだその格好は、地平線の向こう側まで雪原が続くこの地を渡り歩くには、どう考えても全く適していない、主に防寒対策的な意味で。

しかも現在、外は20メートル先も見渡せない程に素晴らしく吹雪いており、とても軽装で歩き回れる様な状態ではない。

この少女の様に“夏服”と言っても通りそうな薄着で出歩けば、常人なら一時間足らずで数回は凍死出来ることだろう。

「 さむい、ねむい、おなか空いたよ~~~~~ 」

しかし、少女は生きていた。

半袖で、太股辺りまでスリットが入ったスカートで、夏靴で、もはや自殺志願者とは思えない様な、いつそ見ている側まで凍えてしまいそうになる格好で一週間近く雪原をさまよい続けて尚、こ

の少女は生きていた。

流す涙さえ数秒で凍り付く程の過酷な環境下におかれて、それでも少女は生きていたのだ。

「あ、でもちょっと気持ち良くなってきたかも」

まあ、既に結構ギリギリの様ではあるが。

《ぎゅるるるるるるるるるるるるるるるる》

そして盛大に鳴り響く、少女の空腹を告げる音。

「おなか空いた」

雪塗れで呟いたその一言が、悲壮感をより一層引き立てている。

思えば、自分は何故こんな冷たくて硬い地面の上に行き倒れていなくてはならないのだろうか。

(何か爆発して空高く打ち上げられて、それから気付いた時には雪原のド真ん中に着の身着のまま放り出されていて)

正直、意味が分からない。

だがしかし、一つだけハッキリと言える事があった。

「不幸だ」

霞む視界の先で、妙に歪んだ刃を持つ大鎌を構えた死神の少女が  
手招きを　　せずに、『こっち来るな中国』と叫んでいる。

(ごめん、それ無理)

寒いし眠いしお腹空いたし、もうゴールしちゃってもいいですよ  
ね？ と、そう心中でまくし立てながら、少女はついに意識を手放  
した。

「後、私の名前は“中国”じゃない、ですっ」

最後の最後に、そう言いながら。

\*\*\*\*\*

ところ変わって、某・紅い悪魔の館にて。

「なあ、咲夜、そう言えば最近、うちの中国　いや、“  
門番”を見掛けないのだけど、何かあったのか？」

ここ最近、見掛けなくなった門番の安否が気になり始めた館の永遠に幼い当主は、取り敢えず完全に瀟洒なメイド長に聞いてみる事にした。

「中ご 失礼、“門番”でしたら、先日行われた妹様とフラワーマスタアの“弾幕ごっこ(という名の殺し合い)”に巻き込まれて以来、消息不明となっております」

淡々と述べる銀髪のメイド長。

返ってきた答えの決して穏やかではない内容に、顔をしかめる当主。

「それは大丈夫なのか？」

「門番の代役でしたら、妖精メイドたちの中から優秀な者を抜粋させて頂きましたので、特に問題は無いかと」

「いや、そっちじゃなくて」

「？」

見当違いの返答に軽くツツコミを入れるも、『お前は何を言っているんだ？』とでも言いたげな視線で返された。

思わず溜め息が零れる。

( 帰ってきたら、もう少しだけ優しく接してあげようかしら )

何だか今日は、何時もより他者ひとに優しくなれる一日になりそうな気がした。

\*\*\*\*\*

とある雪原の深部に位置する巨大な岩山に作られた洞窟  
その奥にある、大型の肉食獣の毛皮を幾つも重ねて作られた寝床  
の上にて。

特徴的な紅い髪を持つ長身の少女が一人、にやけながら何か無駄  
に幸せそうな寝言を呟いていた。

「えへへ、さくやさあん、そんなとこ触っちゃ らめえ、です  
よう zzzz ( / / / / )」

余程良い夢を見ているのだろうか、少女から“女”へと成長・  
昇華する過程の極短い期間にのみ魅せる絶妙な美しさを保っている  
その矯正な顔が、今はだらしなく緩みきっている。

まあ、これはこれで見る人によってはそそられる物があるのだろ  
うが、さて。

「ありえ？」

ふと違和を感じ取り、意識が覚醒する、呂律が回っていないのは御愛嬌。

この紅髪の少女が感じた違和、それは 自分の顔に押し付けられている“二つの塊”に対する物だった。

その“二つの塊”は、それぞれがメロンサイズで、この地を覆う新雪の様に白く、それでいて適度に温かく、そして何より柔らかい。

手に掴めば指先にしっとり吸い付く“それ”は、厳選された絹糸を素材にした最高品質の織物に良く似た滑らかさを備えており、まるで玉の様に輝いていた。

ヒト、それを“乳”という。

そして、メロンサイズの“それ”は、俗に“巨乳”と讃えられる物体であった。

某国で勇名を馳せた偉人・ヒリガル・サイトーン氏が、“バストレポリューション”と賞賛したという事で有名な、アレである。

「あれえ？」



何だ “これ” は。

某・紅い悪魔の館に於いて、首位を争える程度の戦闘力（胸囲）を誇る自分をも遙かに凌ぐ二つのメロンを前に、思わず戦慄する。

冷や汗が止まらない。

こんな核弾頭みたいに物騒な戦略兵器、あの“PAD長”の二つ名で広く知られている咲夜さんの胸に付いていて良い代物じゃない。

咲夜さんの乳は、こう 何というか、手のひらサイズで慎ましい品のある良い乳だ。

品のある乳 詰まりは“品乳”、断じて貧乳などではない。

（まあ、“現物”を見たことなんて、一度も無いんですけどね）

しかし、それでは今、自分の直ぐ目の前にある、この“戦略兵器”は一体何んだ？

まさか、自分の咲夜さんに対する巨乳願望が、“夢”というカタチで発露したとも言っのだろうか？

そんな、莫迦な。

「えーと」

取り敢えず、視線を上に移してみる。

先ず目に付いたのは、自分が気に掛けている少女の物とは、また違った色合いを持つ銀髪だった。

それは一本いっぽんが金属質の光沢を持ち、まるで極限まで鍛え上げられた鋼糸の様な、洗練された艶やかさを湛えている。

次に、その銀髪の間から覗かせている顔を確認してみた。

シャープな曲線を描く顔の輪郭、小さく薄い唇、筋の通った形の良い鼻、瞼が閉じられている為に瞳の色は分からないが、その代わりに長い睫が美しく強調されている。

知らない美人さんの顔が、そこにあった。

思考停止。

取り敢えず、現状を整理して再確認してみる。

普段通り紅魔館で門番の仕事をしていたら、何か爆発した（最終鬼畜妹vs究極加虐生物の戦闘に巻き込まれ、空高く吹っ飛ばされた）。

それから気が付いた時には、見渡す限りが銀世界の広大な雪原に

一人、着の身着のまま放り出されていた。

以降、凡そ一週間近くもの間、飲まず食わずの不眠不休で雪原を一人さまよい続け、偶然見付けた洞窟の入り口辺りで遂に力尽きた。

そして、次に目を覚ましたら、何か知らない美人さんに抱き枕にされていた。

しかも。

(このひとツ、もしかしくなくても“全裸”じゃないですかッ(ノノノ)!!!?)

そう、“全裸”である、決してゼンガーではないし、殺助なんて関係ない。

元ネタがわからない？ ググれば良いと思うよ。

何はともあれ、この美人さん、寝間着どころか下着すら身に着けていないようなのだ。

背中に両腕を回され、足を絡められていて、全身で抱え込む様なカタチで密着されている為、互いの肌と肌が触れ合っている感触がこれ以上無いくらい生々しく感じとれる。

まあ、そのお陰でかなり温いのだが。

( ン ? あれ、何で“肌と肌が触れ合っている感触

”なんて分かるんだろう、私の方は服を着ている筈、なのに（

Q：なんで“肌と肌が触れ合っている感触”が分かるんでしょうか？

A：そんなお前も“素っ裸”だからだぜっ（by・普通の魔法使い）

（ああ、なるほど、それなら納得）

Q：出来るのかしら？（by・楽園の巫女）

A：いいえ出来ません、だって女の子だもん。

「  
」

色々と吟味しながら、紅髪の少女は自分の置かれた状況を漸く把握した。

そして、それから凡そ数秒後。

花も恥じらう乙女（笑）の魂の叫びが、割と広い洞窟内に反響しながら盛大に響き渡った。

\*\*\*\*\*

「さて、まずは自己紹介といこうか、僕は、この雪原を縄張りに持つ“クシャナ”と名乗っておる者だ」

白地に色とりどりの刺繍が施された民族衣装を着た銀髪の女性

クシャナは、火の勢いが弱くなった焚き火に薪をくべながら簡潔に名乗った。

「あ、はい、私は“紅 美鈴（ほん めいりん）”といいます」

対し、紅髪の少女・紅 美鈴も素直に名乗る。

因みに、彼女は未だに“素っ裸”であり、今は掛け布団代わりの毛皮にくるまっている。

彼女が着ていた服は、この洞窟に辿り着くまでの間に雪で濡れてしまっている為、それが乾くまで着用出来ないのだ。

「うむ、では“めーりん”よ、早速質問だが、お前は何故あんな薄着でこの極寒の地に迷い込んだのだ？ 凍死寸前だった事を省みるに、僕の様に寒さに耐久性がある訳でもあるまいに」

そう、クシャナに発見された当初、紅美鈴はガチで凍死寸前だったのだ。

幸い、凍傷にはなっていなかった為、体の末端部分が腐れ落ちる

などといったスプラッターな事態には陥らなかったものの、それでも全身が酷い霜焼け状態になっていた。

付け加えて、体力の消耗も激しく、自力で体温の維持さえままならない衰弱した状態だったのだ。

後数分でも発見が遅れていたら、本当に死んでいたかも知れない。

「えーと、ですね、それが私自身にもよく分からなくて」

取り敢えず、自分が体験したこれまでの経緯を簡単に纏めて説明する。

極東の島国の“幻想郷”と呼ばれる秘境にある紅い悪魔の館で門番の仕事をしていたところ、いきなり凄まじい爆発に巻き込まれて意識を失った事。

次に気が付いた時には雪原のド真ん中に一人放り出されていて、それから一週間近くもさまよい続けていた事。

そして。

「偶然見付けた、この洞窟の出入り口で気絶し、今に至る」という訳か」

「はい」

「うーむ」

小首を傾げて、唸るクシヤナ。

正直、話が荒唐無稽過ぎて意味がわからない。

紅美鈴の話によると、彼女は極東の島国からこの極寒の大地にまで吹き飛ばされてきたものと思われる  
が、そんな大爆発に巻き込まれて“ほぼ無傷”という点が解せなかった。

「あつ、“それ”は私も気になっていたんですよ」

初夏に差し掛かったばかりの極東の島国から、常夏ならぬ“常冬”の大陸まで、ヒト一人を、音速でも結構な時間が掛かるだろう距離まで吹き飛ばす様な大々爆発である。

そんな爆発に巻き込まれたなら、人間は勿論、名のある大妖怪や神でさえ問答無用で死ねるだろう、常識的に考えて。

「まあ良い、それより今は、“これからどうするか”を考えるべきだろうからな。めーりんよ、お前には元居た場所まで帰る当てはあるのか？」

「ッ、それは」

言われ、思わず言葉を濁す。

目的地までの道のりが陸続きであれば何とかなっただかも知れない

のだが、それも海を渡るとなると一気に難易度が高くなるのだ。

と言うか、“人外”の自分が現代社会に紛れる事自体が困難を極める。

（ 幻想郷と外界を隔てている“結界”の影響で“本体”と隔絶されているからか、“能力”も満足に扱えないし、困りましたね ）

顎に手をあてがい、考え込む。

今の自分は、本体からの“力”の供給が一切無い状態なのだ。

自分は独立した一個の生命体だから力を失っても自然消滅する様な事は無いが、その代わり本体からの“力”の供給を失った今の様な状態では全体的な能力が人間程度にまで一気に落ち込む事となる。

（ 我ながら難儀なカラダですねえ、改善出来れば一番いいんですけど ）

世の中には“限界”という物があるのだ、こればかりはどうにもならないので、早々に諦める。

もう、溜め息しか出ない。

「 その様子だと、当ては無い様だな 」





話が好転したと思った矢先、気の抜ける様な情けない“音”が響き渡った。

堪らず赤面する紅美鈴。

空気を読まずに食事を催促してきた腹の虫が、今はどうしようも無く恨めしい。

この数瞬後、両手で腹を抱えながら地べたを転げ回るクシャナの笑い声が洞窟内に木霊した。

\*\*\*\*\*

ところ変わって、某・紅い悪魔の館にて。

「ねえ、咲夜、このところ“美鈴”を見掛けないのだけど、どこに行ったか知らない？」

ここ最近、見掛けなくなった門番の所在が気になり始めた悪魔の妹は、取り敢えず完全に瀟洒なメイド長に聞いてみる事にした。

「“美鈴”？ ああ、“中国”のことですか。彼女でしたら、先

日、妹様が行われた風見幽香との“弾幕ごっこ”という名の殺し合い）”に巻き込まれて以来、消息不明となっております」

淡々と述べるメイド長。

「えええッ!!? それって、大丈夫なのッ!?                    って言うか、あの時、私のレーヴァテインと幽香のマスタースパークの撃ち合いに巻き込まれたのって、やっぱり美鈴だったんだ」

返ってきた答えの決して穏やかではない内容に大声上げる妹様。

ついでに割と聞き捨てならない事を口走った様だが                    なに、気にすることはない。

「中国が管理していた紅魔館の花畑の件でしたら、暫くの間、“四季のフラワーマスター”が直々に面倒を見てくれるそうですから、特に問題は無いかと」

「え、いや、そっちじゃなくて」

「？」

見当違いの返答に軽くツツコミを入れるも、『お前は何を言っているんだ?』とでも言いたげな視線で返された。

短く溜め息を吐いて、それから明後日の方向を仰ぎ見る。

(帰ってきたら、“肩たたき”でもしてあげようかな)

お胸が大きいヒトは“肩が凝り易い”っていうし、普段から私のことを構ってもらってるんだから、それくらいしてあげてもバチは当たらないよね　　と思いつつ、未だ帰らぬ紅魔館の門番の安否を気遣うのだった。

\*\*\*\*\*

皆さん、はじめまして、私の名前は、紅　美鈴（ほん　めいりん）といます。

“紅　美鈴（ほん　めいりん）”といます。

諄い様ですけど、大切な事なので二回言いました。

紅　美鈴（くれない　みずず）でもなければ、紅　美鈴（ほん　めいりん）でもありませんし、中国なんていう名前でもありません。

コホンっ、私は現在、紆余曲折を経て、とある雪原

後に“南極大陸”と知る事となった、極寒の地の某所に位置する岩山の洞窟にお住まいの銀髪金眼の巨乳美女・“クシャナ”さんのお世話になっています。

クシヤナさんからご馳走になった最初のごはんのメニューは、クシヤナさん秘蔵の“冷凍マンモスのステーキ”と、“皇帝ペンギンの卵酒”でした。

おでれーた。

（私も、それなりに長いこと生きてきたつもりでしたけど、マンモスの肉やペンギンの卵なんて初めて食べましたよ）

『空腹は最高のスパイス』とは良く言われていますがそれを抜きにして省みても、どっちもスゴく美味しかったです。

本当に、ご馳走さまでした。

食後、この日は、そのまま就寝する事になりました。

一刻も早く幻想郷への帰還を果たしたい私は、クシヤナさんに今直ぐ目的地まで送り届けて貰えないかと急かしたのですけど。

『その“げんそーきよー”とやらに送り届けた矢先に衰弱死されては寝覚めが悪いわ、先ずは自分の体力が回復するまで大人しくしておれ莫迦者ッ！！』

と、叱責を受けてしまいました。

言葉は厳しい物でしたが、私の健康状態を気遣ってくれているのだという事も分かったので黙って従いました。

私が何か問題を起こした時は、咲夜さんの場合なら言葉より先にナイフを投げ飛ばしてきますからね。

それと比べると、怒鳴られる事くらい、どつってこと無いです。

まあ、相手が真剣に怒ってくれていることが分かる為、怒られる側の罪悪感が半端じゃないんですけど。

と、まあ そうこうしている内に、クシヤナさんのお世話になる事になった日から、凡そ一週間が過ぎ去った頃。

「

早朝の、雲一つ無い快晴の雪原にて。

私こと紅 美鈴は、無言で両手を広げ、それから深々と息を吸い  
そして。

「 復活ッ！！」

叫んだ。

「紅 美鈴、復活ッ！！ 紅 美鈴、復活ッ！！ 紅 美鈴、  
復活ッ！！！」

連呼しだした。

「紅 美鈴、復活ッッ！！ 紅 美鈴、復活ッッ！！ 紅 美鈴、復活ッッ！！ 喧しいわ、この莫迦者があ！！！！！！」か痛うッ！！！！  
「？」

そして、クシヤナさんに拳骨された。

ゴッソーン！！ と響く鈍い音。

視界に散る火花。

「すごく、痛いです」  
痛む箇所を両手で押さえて、軽くうづくまりながら言う。

「“痛い”のは寧ろお前の奇行そのものだ」  
しかし、クシヤナさんから返ってきた言葉は、実に辛酸な物だった。

心も、痛いです。

「まあ、それは捨て置いて ついに、お前を元居た場所  
まで送る日がやって来たなあ」

「はい、今日まで良くして下さいまして、本当に有難う御座いました」

ええ、本当に 今日でクシヤナさんとは、お別れなんだと思うと、心が、痛いですよ。

「なに、所詮は無駄に長生きしておる好々爺じじいぢやならぬ“好々婆”じいばあの気紛れよ、年若い小娘が気にする程の物ではないわ」

「いえ、受けた“恩”には報いるが世の礼儀 ならばこそ、それを果たす時まで決して忘れる訳には参りません」

尤も、仮に“恩返し”を成そうとも、貴女と過ごした夢の様な一週間を忘れる事は無いでしょう。

そう、例えるなら 風邪等の病を患って寝込んだ我が子を献身的に介護する“母親”の様な貴女の背中が、私には、とても心地良かった。

「ふつ、物好きな奴よ、お前の好きにするが良い では参るか、“東方”へ――！」

はい、参りましょう、クシヤナさん！

\*\*\*\*\*



クシャナが持つ異能・“大気を操る程度の能力”

それは、大気そのものを文字通り“自由自在”に操る事を可能とする能力である。

圧縮して打ち出せば鉄塊をも砕く砲弾となり、身に纏い付かせれば頑強な鎧となり、応用次第では嵐を呼び起こし、天災規模の竜巻だって引き起こせるのだ。

そして、この能力を以てすれば、“超音速”で空を飛ぶ事など造作もない。

しかし、物質が音速を超える速度で移動すると、風圧が文字通り“見えない壁”となって襲い掛かってくる。

これによって発生する負荷は凄まじく、人体程度なら空気との摩擦熱で瞬時に燃え尽きてしまうだろう、決して生身で耐えられる様な物ではない。

だが、しかし　もしも、その負荷の大元である“風圧”の影響を無くす事が出来るとしたら？

クシャナが持つ能力は、そんな“もしも”を実現する事が出来るのだ。

風圧とは、言ってしまうえば“空気の流動”によって発生する圧力である。

空気とは大気そのものであり、そして、それが大気である以上、“大気を操る程度の能力”を持つクシャナの支配下にあるのだ。

即ち

「ハハハ、烏天狗より、はやーい」

うん、何というか、もう、空笑いしか出ない。

想像してみたい、高度数千メートルもの上空を、音速の十数倍という冗談みたいな速度で、しかも“生身”で、すっ飛んで逝く、と言う状況を。

ぶっちゃけて言うと、かなり怖い。

自力でやるならまだしも、誰かの背に負ぶさっているという体勢で、音速なんて超えていい物ではないという事が良く分かりました。

「なあ、めーりんよ」

「あ、はい、何でしょうか？」

不意に声を掛けられ、聞き返し。

「 すまんな、先に謝っておくぞ 」

「 え？ 」

何故か謝られ、その意図が読めず、思わず疑問の声を漏らす。

困惑する私に苦笑しながら、彼女は続けて言う。

「 場合によっては、お前を“げんそーきょー”とやらに送り届けられなくなるかもしれん 」

『 どうやら、“厄介な奴”に目を付けられたらしいでな 』

そう言いながら、クシヤナさんが空中で静止した、その直後。

「 あらあら嫌ですわ、これでも私わたくし、世間では“絶世の美少女”で通っていますのに、それを“厄介”だなんて、少しばかり辛口過ぎませんか？ 」

そんな事を整然と言う、“声”が聞こえてきた。

聞き覚えのある声だ。

知っている物より若干の幼さが入り混じっている様に思えるが、この言葉の端々から滲みでもしているかの様な“胡散臭さ”には、覚えがある。

そして案の定、見覚えのある巨大な“空間の裂け目”が、目の前に出現した。

両端にリボンが括られている空間の裂け目、その向こう側の異空間からは、無数の“眼”が此方を見つめてきている。

そんな不気味な異空間の中から姿を現したのは。

\*\*\*\*\*

一方その頃、地平線の向こう側まで硝子状に固まった地面に被われた平坦な大地 “聖戦跡地”と呼ばれる地にて。

とある少女が、余りにも強大過ぎる“難敵”相手に、独り奮闘していた。

少女が身に纏うのは、“激昂したクシヤルダオラ超越種特異個体”と呼ばれる最強クラスの怪物から剥ぎ取った最高の素材を以て作られた鋼鉄の拘束服 或いはドレスにも見える異質な意匠の全身鏡。  
モンスター  
フルプレートアーマー

その手に持つのは、前途の素材と同一の物をふんだんに用いて作られた最新鋭のヘヴィボウガン 放った通常弾Lv.1が、鋼籠の“風翔弾”となるといって、規格外の性能を誇る怪物兵器。  
モンスターウェポン



「きゃあああッ!?!」

“奴”の口腔から放たれた炎のプレス

通称・“ナバーム焼夷弾プレス”

”によって引き起こされた大爆発の余波に巻き込まれ、紙切れの如く吹き飛ばされる“ゆかりん”。

この“余波”のエフェクトにはダメージ判定が無い為、未だに“ゆかりん”は無傷ではあるが　　これによって生じる“隙”は決して無視出来るものではない。

“キーボード”を叩く白魚の様に繊細な指先に、嫌な汗が滲む。

そして、やはりこの致命的な隙を“奴”が見逃す筈も無く。

《　クワアアアアアアアアアアアア　　ッ》

「ッ!?!　やば　　」

“奴”の大きく息を吸う動作を見て、思わず声を上げる“ゆかりん”。

マズいのだ、“あれ”は。

“あの一撃”への対処法は、回避意外に存在しない、何故なら、あの一撃のダメージ判定は連続して発生するからである。



「うがぁー！ーッ！ー！？ また“三死”したああああああああッ！ー！ー！」

薄暗い部屋に一人、ナイトキャップの様な帽子を被った金髪ロングの少女（“少女”？ うん、まあギリギリ）が、パソコンの前で頭を抱えながら盛大に悲鳴を上げた。

彼女が身に纏っているのは、フリルがあしらわれた鮮やかな紫色のドレス。ではなく、地味な紫紺のジャージであった。

彼女の名は、“八雲 紫（やくも ゆかり）”。

人々に“忘れ去られた”者達が最後の拠り所とする、“幻想郷”と呼ばれている楽園を治める管理者である。

「うゝゝゝゝゝ、何よ、この無理ゲー、こんなのだうやってクリアしろって言うのよう」

畳の上をゴロゴロと転げ回りながら、八雲 紫はブーたれた。

ここ一ヶ月もの間、彼女は一人自室に引きこもり、ハンティングアクションゲーム・“モンスターハンター フロンティア オンライン” 通称“MHF”なるオンラインゲームにのめり込んでいたのだ。

“妖怪”である彼女は、自分の体が人間より遥かに頑丈に出来ているのをいい事に、不眠不休でひたすらにゲームを進行させて逝った。



結果、僅か半月で、ゲーム史上最強と謳われていた“激昂したクシャルダオラ超越種特異個体”という怪物を討伐する迄に至ったのだが。

「強過ぎるでしょう、“大先生”ッ」

その最強の先にあつた、更なる“壁”にぶち当たったのは、今から丁度一週間前のこと。

それは、選ばれた強者のみが受けられる“特殊クエスト”だった。

クエスト名は、“伝説の大怪鳥”。

クエストのクリア条件は、制限時間20分もの間、聖戦跡地と呼ばれる広大なフィールド上を暴れ回る巨大イャンクックの猛攻から“生き延びる”こと。

奴 “大怪鳥ドスイャンクック”を初めて見た時は、思わず吹き出した。

従来のイャンクックと比較して、凡そ十倍もの巨体を有する怪物である、驚かない方がおかしいだろう。

次に、全ての攻撃が一撃必殺級の威力があると言うことに顔が引きつった。

踏みつけられると即死、くちばしでつつかれても即死、プレス攻

撃に当たったら確実に即死。

特に酷いのがブレス攻撃で、予備動作に多少の差違はあれども大きく分けて三種類あり、その全てが防御不能攻撃である為、始末に終えない。

先ず、一つは“クックフレア”と呼ばれる、着弾点で大爆発を起こす巨大な炎のブレス。

このブレスの最も厄介な点は、爆発の余波によって広範囲に発生する“龍風圧”である。

これを食らうと、大怪鳥が次に繰り出す攻撃への回避行動が1テンポ遅れる為、非常に危険なのだ。実際に、つい先程も“これ”のせいで殺られた訳だし。

次に、“クックスマッシャー”と呼ばれる、黒いレーザー光線状のブレス。

これの特性を簡潔に説明するなら、ピンポイントでターゲットを狙い撃つ無限射程のレーザー光線である。

見た目は、“水竜ガノトトスの水ブレス・龍属性バージョン”とあったところか。

これはピンポイント攻撃である為、プレイヤーが動いている限り当たる事は無いと言ってもいい。が、逆に言えば止まったらピンポイントで瞬殺される。

そして最後に、“クックブレイカー”と呼ばれる超極大の破壊光

線。

凡そ十秒（正確には9.9秒）の溜め時間を要する広範囲攻撃で、効果範囲は、大怪鳥のくちばしを起点にした前方160 圏内すべ  
て。

因みに、この攻撃はエリアを超えてすっ飛んで来る為、キャンプ場に何時までも引きこもっていると問答無用で殺られるので最も注意が必要な攻撃なのだ。

オーバーキルにも程がある、やってらんねえ。

「紫様、お時間を頂いても宜しいでしょうか？」

「ひゃいッ!？」

突然、背後から話し掛けられ、思わず声を上げる八雲 紫。

後ろを振り返って見ると、そこには、白を基調としたローブに身を包み、金髪をショートボブにした、狐耳と九本の大きな尻尾が特徴的な少女が立っていた。

彼女の名は、“八雲 藍（やくも らん）”。

九つの尾を持つ狐の妖獣であり、八雲 紫の使いつパシリ みたいな、式神である。

「今、何やら失礼な物言いをされた様な気もしますが、まあ、それは捨て置くとして　　紫様、先日行われた“フランドール”スカーレット”と“風見 幽香”の弾幕ごっこによって発生した被害についての事で、その、少々“面倒”な事態になりました」

さも困った様な顔をして言い淀む八雲 藍。

「勿体ぶらずに早く言いなさいな」

そんな己の従者の様子を懷疑そうに見つめながら、八雲 紫は先を促し、そして　　。

「“紅 美鈴”が、件の弾幕ごっこに巻き込まれて消息不明となりました」

瞬間、ビシリと擬音を立てて、八雲 紫は全身を硬直させた。

この数秒後、八雲 紫の盛大な悲鳴がとある武家屋敷に木霊する事となった。

END



【目撃情報その01：発見、大怪鳥（ドスイヤンクック）】

私が“奴”を初めて見たのは、ギルドからの任務を完遂するべく山岳地帯の深部に単身乗り込んだ時の事だった。  
by・覇竜装備の女傑

【目撃情報その01：発見、ドスイヤンクック大怪鳥】

山岳地帯の深部                      その一角に確認された巨大な洞窟に、  
得体の知れない巨大生物が住み着いているという目撃情報がギルドに入ってきたのは、今から丁度一週間前。

その日、私は大岩の影に身を隠して、もう既に目視可能な距離にある件の洞窟の様子を、遠目に観察していた。

「                      いよいよ、だな                      」

私がギルドより承った任務    その内容は、洞窟に住み着いた“巨大生物”に関する目撃情報の確認である。

情報によれば、その巨大生物の全長は100メートル近くもあり、

全高に至っては“少なくとも”20メートル以上あるという。

その話を初めて聞いた時は、驚くより先に『なんだ、そのバケモノは』と内心あきれたものだ。

聞くところによると、近隣の集落在住の若い少女から齎された信憑性の薄い目撃情報らしいが。

しかし、決して無視出来ない情報でもある。

その情報が本当なら、規格外の巨体を持つ事で有名な古龍種・“老山龍”をも上回る怪物である。

仮に、そいつが人間の生活圏にでも迷い込んだなら、それだけで大惨事になりかねない。

早急に調査を進め、何時来るとも知れない災厄に備えておく必要があるだろう。

「ん？」

ふと、見慣れたモンスターの姿が視界の端に映る。

桃色の甲殻と、巨大なくちばし、そして、襟巻き状の大きな耳が特徴的な飛竜。

新米ハンターが、最初の大型モンスター討伐の目標とする事が多

い事から、“先生”とも呼ばれる鳥竜種  
ツク”が、そこにいた。

”怪鳥イヤンク

(なんだ、ただのイヤンクツクか)

と、真っ先に思い浮かんだのは、そんな気の抜けた感想だった。

イヤンクツクは、大型モンスターの中でも比較的弱い部類に入る飛竜である。

そもそも、イヤンクツクは鳥の様な外見通り、ミミズや昆虫を主食としている為、此方から近付いて刺激しない限りは、そう危険ではない。

先にも説明した通り、新米ハンターでも十分に狩猟可能なモンスターだ。

そして、ハンターの中でも優秀な者だけが所属する事が許される“ギルドナイト”  
その中でも更に“最強”と謳われている自分の実力を以てすれば、イヤンクツク程度なら単独で秒殺出来るだろう。

文字通り、何の障害にもならない。

「ふむ？」

が、しかし、あのイヤンクツクには何か得体の知れない違和を感じる。



それこそ、致命的な。

思考の海の底へ沈むこと数秒。

そして。

「は？」

その違和感の“正体”に、私は気付いた、気付いてしまった。

あのイヤンクツク、何か滅茶苦茶“デカくね”？

(いやいやいやいやッ!! あれは流石にあり得んだろうよ、何だあの馬鹿デカイイヤンクツクは!?)

全長約100メートル、全高は25メートルくらいあるだろうか。

遠方からの目測ではあるが、それで大体合っているだろう。

丁度、件の巨大生物と同じくらいの大きさである。

しかし、有り得ない。

従来のイヤンクツクの全高は、3メートルにも満たない。全長も

10メートルと無かった筈だ。

それなのに、目の前の存在は、ざっと見て少なくとも普通の個体の10倍もの大きさがある。

「何て、非常識なッ」

正直言つて、未だに信じられない。

一体、何処の世界に老山龍よりデカイイャンクックがいるというのだろうか。キングサイズどころの話ではない。

陳腐な表現だが、“ゴッドサイズ”と言つてもいいくらいだ。

突然変異で体が異常に小さい個体が確認される事は極稀ごくまれにあるらしいが。

あんな馬鹿げた巨体を有する迄に至つたなんて話は聞いた事がない。

というか、あつても困る。

《クエツ?》

不意に、巨大イャンクックが何かに気付いた様に鳴き声を上げて明後日の方向に目を見やる。

「ッ!？」

ビシリッと、体が硬直する。

イヤンクツクの聴覚は、他の竜種のそれより遙かに優れている。それが時には弱点にもなるが、索敵能力に秀でている事に変わりはない。

( 気付かれた か? )

冷や汗が頬を伝う。

あんなふざけたサイズのイヤンクツクを相手に一人で立ち向かうなど、正直いつて勘弁願いたい。

戦って勝てない事は無いだろうし、逃げる事も不可能ではないと思うが、その何れを選択しようとも間違はなく“命がけ”になるだろう。

自分の命を何の打算も無く質しちに出せる程、私は綺麗な生き方に拘ってはいないのだ。

そういう暑苦しい生き方は、若い衆に任せたい。もう若くないのだよ、私は。未だに独身だがな、畜生ッ。

「む」

ふと、気付く。

あのイヤンクックに近付いていく巨大な  
あとのイヤンクックより二周り以上も小さい“影”を一つ見付けて、  
思わず声が漏れた。  
と言っても、

(なるほど、奴(巨大イヤンクック)は“あれ”に反応したのか)  
私と、巨大イヤンクックの視線を一身に受けている“影”。

そいつは、空の向こうから凄まじい速度で滑る様に飛来してきた。

“鋼龍クシャルダオラ”。

銀色の鈍い輝きを放つ金属質の甲殻で覆われた体躯と、前肢と後肢の間に皮膜状の大きな翼を持つ、“風翔龍”の別称で有名な、風を操る古龍種だ。

《ギユアアアアアアッ！！！！》

自分の攻撃の射程内に“標的”を捉えたその瞬間、先手必勝とでも言わんばかりに、クシャルダオラが口から“ブレス”を放った。

岩盤をも粉碎する、圧縮された空気のブレス  
“風翔弾”。

それは、仮に真正面から受け止めようものなら、大型モンスターでさえ一撃で致命的なダメージを負わせられる必殺の息吹。

当たりどころが悪ければ、そのまま即死させられかねない程の代物だ。

しかし。

《クワアアアアア》

それは、あくまでも“大型”モンスターであればの話である。

クシャルダオラが攻撃を仕掛けた相手は、“大型”という単語の前に“超”の一文字が付く様な巨大生物。

いや、既に“生物”という枠組みに収まるのかも  
疑わしい“怪物”なのだ。

《クワッ！！！！》

直後 ドンッ！！！！ という爆発音が山岳地帯の一角に木霊した。

けたたましい鳴き声と共に開かれた巨大イャンクック大きなくちばしから飛び出した、直径にして凡そ5メートルはあるだろう灼熱

のつぶて。

その“巨大過ぎる炎のプレス”が、クシャルダオラが放った風翔弾と接触すると同時に起爆し、その爆風を以て全てを吹き飛ばしてしまったのだ。

そう、自らに迫ってきていた風翔弾だけでなく、クシャルダオラや、プレスの着弾点周辺に生い茂っていた樹木も、“全て”。

「なあッ！！？」

驚愕で叫ぶ。

イヤンクツクのプレスは、“高熱を帯びた液体を吐き出す”といったものだ。決して“炎のプレス”なんてものは吐き出さない。

あれでは怪鳥ではなく、“黒狼鳥”の様ではないか。

尤も、火力は桁違いであるが。

《ギユ、グウッ》

“満身創痍”といったような、全身の甲殻がひび割れたボロボロの姿で、クシャルダオラが大地に力無く倒れ伏している。

爆風によつて吹き飛ばされ、そのまま地面に全身を強かに打ち付けられたのだ。

如何に強靱な生命力を誇る古龍種と言えども、大樽爆弾1000個分にも相当するだろう大々爆発に巻き込まれては、ひとたまりもなかつたらしい。

仮に直撃でもしていたなら、古龍骨の一片も残さず完全焼滅していたかも知れない。

( バケモノめ ッ )

心中で毒吐く。

あのクシャルダオラの全長は、目測で少なくとも二十メートル以上はあるだろう“キングサイズ”の成体である。

熟練のハンターやギルドナイトが小隊を組んで挑んだとしても、相当手こずらされる大物と言えよう。

或いは、人間側が全滅させられる可能性だつてある。

そんな大物が、たったの一撃で、実にあっさりと無力化されてしまったのだ、もう驚きを通り越して、呆れるしかない。

つい先程まで、あの巨大イャンクックを相手に一人で戦つても“

勝てなくはない”などと考えていた自分が、余りに馬鹿らしい。

可笑し過ぎて、盛大に吹き出してしまいそうだ。

“勝てない”。

“あれ”は、もうイャンクックなどではない。

そもそもサイズからして可笑しいが、それ以上に、あの圧倒的な火力はただ“デカいから”という理由だけでは説明出来ない。

が、幸か不幸か、奴は“イャンクック”である。

従来のイャンクックはミミズや昆虫等を主食としており、“火竜”や“轟竜”といった肉食の凶暴な飛竜種と比べれば、比較的大人しい部類の大型モンスターだ。

こちらから余計な手出しさえしなければ、少なくとも襲われる事はあるまい。

しかし。

( それでも、奴が危険である事に変わりない、か )

奴は、嘗て私が一人で討伐した“覇竜”以上の巨体を持ち、古龍種の成体を一撃で下す大火力を有し、更には従来のイャンクックと同様に飛行能力を備えている事だろう。



気付かれて追い掛けられようものなら、間違いなく追い付かれる。

だから、なるべく音を起てない様に、忍び足で。

周囲を警戒しながら、それでも決して遅くはない速度で、一気に駆け抜けた。

そうして、無事にギルドへ帰還した私は、賜っていた任務の果てに目撃した事をありのままにの上層部に進言した。

そして、件の巨大生物と思われるイヤンクックは、後に“ドスイヤンクック”と呼ばれる事となった。

つづく

【目撃情報その02：“大”先生、襲来】

オオナスチ  
霞龍オオナスチに襲われた時は「もうだめた」って思ったけど、あのすつごく大きなイヤンクックが来て、あたいを助けてくれたんだ。by・水色の髪の少女

【目撃情報その02：“大”先生、襲来】

我が輩はイヤンクックである。名前はあるが、まだ秘密だ。

何故なら、その方が格好良いから。

しかし、先刻は随分と驚かされた。

まさか、埒ひらにしている洞窟から外へ寝ぼけ眼のまま出て、一分もせんに鋼龍オオナスチが襲い掛かってくるとは流石に思わなんだわ。

いきなり風翔弾などをぶっ放してくるものだから、つい加減を忘れて割と本気のプレスで迎撃してしまったではないか。

まあ、死にはしなかった様だし、その後もトドメは刺さずに捨て

置いてやったのだから有り難く思うと良い。自然界ではあり得ざる情けに感謝せよ。

と、そろそろ胃袋が飯を寄越せと催促してきた事だし、狩りに赴くとしよう、お腹がクークー空きました。

我はただのイヤンクックではなく、“誇りあるイヤンクック”である。

下賤な雑種どもの様に、ミミズやら虫けらなぞ口にせぬ。

我が舌を満足させられるは、地上の覇者たる霊長種が認めた至高の食材のみよ。

昨日は蟹<sup>タイミョウサザミ</sup>、その前は魚<sup>ガノトス</sup>を喰らったから、今日は肉にするか。

さて、何の肉が良いか。

そうだ、“ポポ”にしよう。

\*\*\*\*\*

それは、山岳地帯の近隣に点在している幾つかの集落の内の一つで起きた珍事件だった。

事の発端は、小さな孤児院を一人で経営している女性が疲労で倒れてしまったことから始まった。

寝込んでしまった母親代わりの女性。

どうすればいいのか分からず、オロオロと右往左往している他の孤児たち。

そんな彼らの様子を見て、とある少女は考える。

「おいしい食べものをたくさんとってくれば、みんな喜ぶし、おあさんもきつと元気になる。うんっ、あたいたら天才ね！」

それが、孤児院に住む子供たちの年長者の一人である少女が出した答えだった。

まず、昼食用にパンを一切れと水筒をポーチに詰め、更に、採取した茸きのこや果実等の入れ物として使う空っぽの瓶や袋が入ったリュックを背負う。

それから自室に一枚の書き置きを残し、物置から拝借してきた剥ぎ取りや採取等に使われる大きめのナイフを一振り腰から下げて、少女は孤児院を後にした。

最後に、セミショートにした水色の髪に大きなリボンボンを何時もより強く結び、青い瞳に真っ直ぐな意志を宿して。

\*\*\*\*\*

黄色いリボンで緑色の髪をサイドポニーにした少女が一人、今にも泣き出しそうな顔になって走っていた。

わざわざ外界から来たらしい医師と話し合っていた集落の大人たちの会話を、偶然に聞いてしまったのだ。

曰わく、孤児院のお母さんの容態が想定していたものよりずっと悪く、一刻も早く治療しなくてはならないのだが、それには相当な大金が必要なのだという。

(どっしりよう　ッ)

お母さんが大変なのに、自分にはどうすれば良いか分からない。

だから、自分より色んなことを知っている頼もしい親友である少女の元へ助けを求めて急いで走った。

しかし、その少女がいる善の部屋には、誰もいなかった。

ただ、その代わりに一枚の“書き置き”が机の上に無造作に置かれていた。

書き置きには、『おいしいもの、さがしに、もりにいってくる。たくさんとってくるから、たのしみにしててね』と、そう書いてあった。

\*\*\*\*\*

丁度その頃、件の親友である少女は、水色の髪を飾る大きなリボンを揺らしながら鼻歌混じりで森の中を散策していた。

「あたいつたら最高ねっ！」

彼女が背負っているリュックの中には、実に様々な食材で溢れかえっていた。

木苺やリンゴといった果実に、胡桃<sup>くるみ</sup>等の木の实、特産キノコや厳選キノコだけでなく、胡椒や唐辛子等の香辛料や薬草の類まで採取できたのは幸運だったと言えよう。

持ってきた瓶や袋はどれも満杯で、リュックの重さは、少女にとって相当な負担となっている。しかし、その重さの分だけ孤児院の皆が喜んでくれるのだと思うと、寧ろ心地良くさえある。

早朝から集落を出て、森へは昼頃に到着し、それから今までずっと森の中を一人散策していた努力の賜物だった。

(みんな、喜んでくれるかなあ？)

皆の喜ぶ顔や、自分の母親代わりの女性が元気を取り戻す様子を想像し、少女はニヤニヤと喜色を浮かべる。

空を見上げると、既に日が傾き始めていた。集落に帰る頃には、すっかり夜となっていることだろう。

少女が今いる森から集落までは、相当な距離がある。それを踏破するのは大人の足でも重労働に値するのだが　　しかし、少女はさして苦にしていけない様であった。

少女の今は亡き両親は、共に高名なハンターだったのだ。

常人より優れたスタミナを誇っていた彼らの血を色濃く受け継いでいる少女もまた、同年代の少年少女のそれを遥かに上回る体力を持っているのである。

「それじゃあ、そろそろ　　ッ!!!??」

『帰ろう』と、そう言おうとして、少女は自らの続く言葉を無理矢理に押さえ込み、近くの木陰に身を隠した。

そうしなければ、何か致命的な、取り返しの付かない事態に陥

りそんな気がしたのだ。

はたして、“それ”は正しかった。

木陰から僅かに顔を覗かせて、己の直感に従い、ある一点  
雑草が点々と生えている獣道を凝視する。

そして、少女が“それ”の存在に気付くのに、そう時間は掛から  
なかった。

その“何もいない”筈の地面が、まるで“見えない何か”に上か  
ら押し潰されでもしているかの様に、ほんの僅かに沈んでいるのだ。

( ツ！？ 何か“いる”！！ )

少女は知らない。

その“何か”が、熟練の狩人が装備を万全に整えても容易には退  
けられない存在であるという事を。

しかし、その知らない筈の驚異を、少女は敏感に感じ取っていた。

やがて、“それ”は幽鬼の様に、スウツと森の中  
に姿を現した。

全長20メートル近い体躯。



左右が別々に動く大きな目と、巻き付く様な独特の形状をした尻尾。

大地を踏み締める四肢は決して長くはないが太く、背には一對の翼が生えている。

全身を覆う分厚い皮膚は紫色で、後頭部はコブラのそれに酷似した形をしており、額からは一本の鋭い角が真っ直ぐ伸びていた。

“霞龍オオナズチ”。

自分の体を周囲の景色と同化させられる能力を有している事から非常に目撃例が少なく、更には“猛毒”の霧を操るカメレオンの様な姿をした“古龍種”である。

「ッ！！！！？」

声を出さずに、しかし少女は確かに悲鳴を上げた。

生存本能が訴え掛けている。

“あれ”は、危険だ。

見付かったら、きっと自分は殺されてしまう。

だからだろうか、意識せずとも、カラダの方が自然と声を押し殺してくれたのだ。

《キュウウウウウ、ウツ ？》

不思議と響く妙なアクセントが効いた鳴き声を上げながら、オオナズチの大きな目が、ギョロギョロと左右別々に忙しなく動きだす。

まるで、何かを探しているかのような動きだ。

(ひっ !?)

生命の危険と生理的な嫌悪感を同時に感じて、少女は心中で短く悲鳴を上げた。

嫌でも“わかった”。本能的に、理解してしまったのだ。

“あれ”は獲物を探していて、他でもない自分こそが、その“獲物”なのだということ。

(に、にげなきゃ、でも )

今この場で動いたなら確実に“見付かってしまう”という事も、少女は理解していた。

ここは、“我慢比べ”だ。

少女が先に動いて、見付かってしまうか。

それとも、霞龍が獲物を諦めてこの場から立ち去っていくか。

(だいじょうぶ。 “かくれんぼ”なら、あたいだって得意なんだから ッ)

これも、少女が持つ天性の才能なのだろう。

今、この瞬間、少女の気配は確かに消えていた。

彼女の側にハンターがいたなら、その才覚の片鱗に管を巻いていただろう。

“気配遮断”という技能だけで評価したなら、この時点で少女は“狩人”として完成されていたのだから。

だが、現実は余りに無慈悲だった。

《キュ、キュ、キュアアアアアアッ!!!!!!》

突如としてオオナズチが再び奇妙な鳴き声を上げながら、背に持つ皮膜状の翼を羽ばたかせる。

その巨大が僅かばかり宙に浮かび、それと同時に、霞状の“何か”を全身から勢い良く噴き出し、周囲一帯を包み込んだ。

「ッ!? ゴホ、ゴホ ッ」

その“何か”を僅かながらも吸い込んでしまい、咳き込む少女。

次の瞬間には、口の中いっぱい“鉄の味”が広がっていた。

(え？)

口を抑えていた掌を見やると、それは少女自身の血で赤く染まっていた。

(今の霧、もしかして“毒”？)

少女の見解通り、あの霧状の何かとはオオナズチが持つ“毒”だったのだ。

“致死量”には程遠いものの、それは容赦なく少女の体力を削ぎ落としていく。

そして何より 隠れている獲物(少女)をいぶりだし、その位置を特定するには充分だった。

「あ  
」

交差する少女と霞龍の視線。

オオナズチと目が合い、少女は思わず短く声を漏らして、その場

にへたり込んでしまった。

（ごめん、みんな。あたい、もうダメみたい）

オオナズチが直ぐ目の前に居て、自分は毒にやられていて満足に体を動かせない。

幸いにも“げどく草”は、リュックの中にあるが、そんなものを取り出して使う隙など無いだろう。

どう考えても、“詰んでいる”。

この状態で生還出来たなら、それはもう立派な“奇跡”だろう。

《キュウウウウウ、ウツ！》

横薙ぎに振るわれたオオナズチの長く伸びた舌が周囲のか細い木々を根元から刈り取りながら、少女に向かって襲い掛かる。

そして、ズドンッ！！！！ という重々しい衝撃

と共に、肉が潰れ骨が砕ける生々しい音が、森の中に木霊した。

\*\*\*\*\*

痛みは無かった。

苦しむ間もなく無く一瞬で即死したのだから、それが当然と言えよう。

寧ろ、“幸運”だったのかも知れない。

襲い来る筈だった苦痛さえ消し飛ばす圧倒的な暴力は、時に救済と同義の終焉を導き出すのだから。

そして少女は 自分の直ぐ目の前で踏み潰され、実にあっさり“死”を迎えた“霞龍オオナズチ”の末路を見て、呆然としていた。

つい先程まで、自分という獲物を追い詰めていた筈の捕食者<sup>オオナズチ</sup>が、現在進行形で“何か巨大な生物の脚”によって文字通りぐりぐりと蹂躪されているのだ。意味がわからない。

というか、どう見てもオオナズチは既に死んでいるというのに、あの大きな脚は未だに踏みにじる力を緩めようとしなない。

グチャリ、ボキッ、ブツンツ、ゴキリ、バキッ といっ

た具合に、生理的に受け付けられそうに無い嫌な音が絶え間なく続いており、それと平行してみるみるうちにオオナズチが何か芸術的なカタチへと変形していく。

「うわぁ  
」

吐き気を催す凄惨な光景から目を逸らす様に、眼前で未だに霞龍をふみふみしている大きな脚に沿って視線を上に移してみる。

すると、そこには皆の様に聳<sup>そび</sup>える黒い巨影が鎮座していた。

見目鮮やかな桃色の甲殻に覆われた巨体。

襟巻き状の特徴的な形をした大きな耳と、頭を構成する面積の大半を占めた立派なくちばし。

はたして“それ”は、この世界の住人なら誰もが知っているときえ言える知名度を誇る飛竜 竜盤目・鳥脚亜目・鳥竜下目・耳鳥竜上科クツク科の大型モンスターである“怪鳥イャンクック”と、同一の姿をしていた。

「？  
」

なにあれ？

その余りに不可解な存在を容認出来ず、少女はコテンと首を傾げながら疑問符を浮かべた。

それから瞼を閉じて丁寧に揉み解し、改めて“それ”の姿を確認してみる。

が、やはりイヤクックにしか見えなかった。

「  
」

しかし、縮尺が明らかに可笑しい。

具体的には、以前、街の訓練所で見掛けた剥製の十倍くらいデカい。

そのサイズが余りに現実離れし過ぎていて、どうリアクションを取れば良いのか分からなかった。

（ ああ、毒のせいで、あたいの目がおかしくなったのか ）

そう思い至り、リュックから“げどく草”を取り出して自分の口の中に放り込む。

そして、ムシヤムシヤと咀嚼。

口の中いっぱい広がるげどく草の強烈な苦味を、水筒に残っていた水で一気に流し込む。

（ うん、ちょっと楽になったかな ）

少なくとも、今以上に毒の症状が悪化する事は無いだろう。



げどく草が効いて良かったと、そう胸を撫で下ろしながら短く息を吐いた。

そして、目の前にいる“それ”に再び視線を向けてみる。

「  
」

だが、やはりと言つべきか、そこに居たのは、どこからどう見てもイヤンクツクにしか見えない“巨大な何か”だった。

《クエ?》

少女の奇行を観察していたイヤンクツク(?)が、不思議そうに首を傾げながら短く鳴き声を上げる。

それから程なくして、精神的にも肉体的にも疲弊していた少女は、遂に意識を手放した。

\*\*\*\*\*

夕暮れ時のとある集落にある孤児院、その玄関先で、一人対一匹

による激戦が繰り広げられていた。

「駄目ですニヤ、ママさん！ あの子が心配なのは分かりますけど、今は大人しくベッドの上で安静にしているべきですニヤ！」

真っ白な全身鎧

“崩竜”と呼ばれる巨大な飛竜種の甲殻を素材にして作られた防具で身を固めた女性が玄関から外へ飛び出して行こうとし、そんな彼女を引き止めようと足元にしがみついたゴルドの毛並みを持つ一匹のアイルーが叫んだ。

「離しなさい ツ！！ うちの子がいなくなって大変なのに、黙って寝ていられる訳ないでしょう、この駄猫 「黙って眠れい！！」がふうーッ!？」

隙ありと言わんばかりに、女性の鳩尾みぞおちに炸裂する猫パンチ。

衝撃が内部に浸透する様に叩き込まれたそれは、崩竜の重厚な甲殻で作られた鎧越しであるにも関わらず女性を悶絶させてみせた。

「まったく、ただでさえ病気でポロポロだというのに、あの子を探しに行こうだなんて無謀過ぎますニヤ！」

そして、何事も無かったかの様に説教をし始める鬼畜猫。

「  
」

返事がない、ただの屍の様だ。

だが、それでも構わず猫は続ける。

「そもそも、あの子の採集技能は、そこいらにいる平凡なハンターよりずっと上ですニヤ。心配せずとも今日の夜には帰って来る筈ですニヤ。だからママさんは、それまで部屋で大人しくしているべきですニヤ」

「だって、心配なんだもん」

「キモい じゃなくて、気持ちは分からないでもないけど、それでもママさんはもっと自分を大切にすべきですニヤ。病気の治療費だって、せつかく集落の皆さんがどうか工面しよう頑張ってくれているのに、肝心のママさんが先にどうにかならせたらそれも全部台無しになってしまいますニヤ」

矢継ぎ早に言葉を紡いでいく腹黒猫。

年甲斐もなく(といっても彼女はまだ“ギリギリ”二十代であるが)唇を尖らせて『くだもん』などと宣う女性に対し、本音が少し漏れてしまった事を気にしてはいけない。

「それに、あの子の事は、つい先ほど僕の知り合いの“世紀末なおトモアイル”たちに迎えに行つて貰うようお願いしたから、ママさんが出る幕は無いですニヤ。だから、ママさんは早く部屋に戻つて安静にしたいですニヤ」

「うう」

反論出来ず、思わず唸る。

そもその原因は、病などに屈してしまった自分にあり、そして何よりも、このアイルーが言ったことはどれも事実だ。

自分の今の体力では、ハードワークは難しい。

“あの子”が持つ狩人としての優れた才能があれば、大抵の危機は難なく回避出来るだろう。

集落の皆の好意も、決して無碍していいものではない。

（でも）

だからと言って、それで納得しろと言われても、自分には無理だ。

血の繋がりは無くとも、あの子はわたしの娘なのだ。

自分の子供が危ない目にあっているかも知れないのに、どうして黙っていられるというのか。

「やっぱり、わたし　兄貴iiiiiiiiiiiッ!!」

女性が決意表明しようとしたその時、彼女の言葉に割り込む形で猛々しい漢（いん）の叫び声が遠方から響いてきた。

出鼻を挫かれ、沈黙する女性　　彼女の目尻に少しばかり  
涙が浮かんでいる様に見えるのは、きつと気のせいだろう。

まあ、それはさて置き、声の主は、ガーグアの首の付け根辺りに跨った、頭をモヒカンにした銀青寅の毛並みを持つ一匹のアイルーだった。

「何ですか騒々しい、今は取り込み中ですニヤ。要件があるなら手短にお願ひしますニヤ」

孤児院の門前までやって来たモヒカン頭のアイルーを軽く睨め付けながら、そう促す金ぴかアイルー。

言葉は丁寧だが、語気も態度も偉そうである。

対して、モヒカン頭のアイルーはガーグアから地面に降り立つと、背筋をピツと伸ばして敬礼した。

世紀末な見た目に反して、こちらは意外と礼儀正しいようだ。

「はい！ 馬鹿デカイ“イヤンクック”が一匹、この集落の広場に飛来してきやしたニヤ！」

そして彼は、言われた通り手短に、そう報告するのだった。

\*\*\*\*\*

「 グウレイトオ、サイズだけは大きいぜ 」

誰かのそんな呟きに、この場に居合わせた者達の誰もが肯定した事だろう。

山岳地帯に点在している何の変哲もない集落の一つ。その広場に君臨する“それ”の姿を見てしまえば、誰もが思う筈だ。

『何だ、あの馬鹿デカイイャンクックは』と。

全長90メートル余り、全高は25メートルに届くかどうかといった所か、首を持ち上げれば40メートルを越すだろう。

丁度、老山龍より一回り大きいくらいの体格だ。

足の大きさは目測で6メートル以上もあり、あれに踏み付けられようものなら大抵の生物は圧死する意外に道は無い、大型モンスターでも内臓に致命的なダメージを負うことになるだろう。

そんな、いつそ怪物じみた巨体を持つイャンクックが広場に降り立ってから、既に三分ほど経過しているのだが、奴は未だに何の動きも見せていなかった。

《クエ ？》

しかし、そんな沈黙も、たった今、あの巨大イャンクックが上げ

た小さな鳴き声によって唐突に終わりを迎えた。

巨大イヤンクツクの動向を監視するべく、広場の端にある物陰にそれぞれ隠れていた者達一同の緊張感が一気に高まる。

そして、地面すれすれの位置まで突っ伏し。

《グエエエエッ》

そんな呻き声を上げながら、巨大イヤンクツクは、若干唾液にまみれた“何か”を丁寧に吐き出した。

その吐き出された“何か”を見て、誰もが驚愕させられる事となる。

なんと、あのイヤンクツクから吐き出されたのは、セミシヨートにした水色の髪に大きなリボンを結んだ、外見年齢十歳前後の幼い少女だったのだ。

「んっ、う？」

軽く身じろぎし、それからムクリと上体だけ起き上がらせると、その少女は辺りをキョロキョロと見回し始める。

そして、巨大イヤンクツクの顔面が直ぐ側にある事に気付くと、ビシリッと体を硬直させた。





見る、古龍種がまるで潰れたカエルの様だ。

「うわぁ」

そんな状態の霞龍を見せられて、少女は顔をひきつらせて思わず口元に手をやる。

モンスターから素材を剥ぎ取る作業を幾度か目にしてきた少女から見ても、けっこう刺激的だった。

しかし、それでも割と丁寧にふみふみされていたのだろう、不思議な事に、霞龍の亡骸はペタンコになっている点を除いて、割と綺麗な状態を保っていた。まあ、骨や内臓といった“中身”は、きつと悲惨な事になっているだろうと思われるが。

《クワツ》

徐に、空を仰ぎ見る様に首を伸ばす。

それから後ろに数歩下がると、巨大イャンクックは、その場でバツサバツサと羽ばたき始めた。

「あ」

巨大イャンクックの意図に気付いて、少女が声を上げた時には、既に、あの巨体は宙に浮いていた。

反射的に手を伸ばして引き止めようとしてしまったのは、少女が巨大イヤンクックに気を許していた証なのかも知れない。

夕焼け空の向こうへ飛び去っていくイヤンクック

。

その背中は、とても大きかった。

じじく

【目撃情報その03：伝説の行方】

仮に“奴”と戦ってみて勝てるかって？ 馬鹿かね、君は。あんなモノ、勝てる訳が無いだろう。by・とある弓が得意な双剣使いの男性

【目撃情報その03：伝説の行方】

我が輩はイヤンクックである。

最近、我が人間達から“大怪鳥”などと呼ばれているらしい事を、我が自慢の地獄耳で知ったが、なに、気にすることはない。

切欠は多分に、先日、霞龍に襲われていた少女を助けた件である。  
う。

あれには、本当に苦勞させられた。

『女の子には優しくなさい』という母上の言葉に従い、霞龍を仕留めた迄は良かったのだが、その後少しして、折角助けてやった少女が、その場で気絶しおったのだ、解せぬ。

とはいえ、その場に放置しては他の肉食獣の餌食になりかねん。

故に人里まで運んでやろうと思ったのだが、我には物理的に手が無かった、「手羽」はあるがな。

我が嘴くちばしでくわえこむには、少女の体が余りに小さ過ぎた故、仕方無しに口内に含む様にして運んでみたが、上手く行って良かった。

ぶつちやけ、間違えて丸呑みにしてしまう可能性があったのだ。

人喰いは我が主義に反する故、御免被りたい。

まあ、仮に誤飲しても直ぐに吐き出せるが。

と、それより今日は天気も良い事だし、久しぶりに狩りなどせず一日中寝て過ごすのでしょうか。

近頃、狩りに精を出し過ぎて、あちこち飛び回っていた故、少々疲れてが溜まっておる事だしな。

では、おやすみ zzz。

\*\*\*\*\*

最近、“大怪鳥ドスイヤンクツク”なるモンスター  
の噂話がハンター達の間でまことしやかに囁かれている。

曰わく、そいつは通常のイヤンクツクの十倍デカい体躯を持ち、  
見た目通りのパワーと、その巨体を物ともしない俊敏性  
そして、古龍種さえ一撃で仕留める大火力を以て、世界各地で暴れ  
まわっているのだという。

通常のイヤンクツクと同様に飛行能力を有している為、その行動  
範囲は極めて広く、しかも、どんなに過酷な環境下であれ所構わ  
ず出没する為、その目撃情報は決して少なくないらしい。

大型の魚竜種の首根っこをくわえて湖面から飛び出してきたとい  
う話もあれば、砂漠を悠々と歩いてきた盾蟹を砂中から襲撃したと  
いう話もあるし、雪山を縄張りに行っているティガレックスから獲物  
のポポを強奪したなどというイヤンクツクとは思えない目撃情報ま  
であつたりする。

というか、神出鬼没にも程があるだろう。

中でも一番有名なのは、『森で採集していた少女が霞龍に襲われ  
ていた所を、その霞龍を瞬殺して少女の命を救った』と  
という童話じみた目撃情報だろうか。

まあ、モンスターが人間の命を救った例は過去にも幾つかあるが、  
どれも信憑性に欠けるものばかりである。

が、この話だけは違った。

後日、例のドスイヤンクックが仕留めたと思われる霞龍から剥ぎ取ったらしい素材が、街の市場で大々的に出回っていたのだ。

その霞龍の素材はどれも傷が少ない良質な物ばかりで、相当な高値で取引されていた。霞龍の素材はハンターの武具としてだけでなく、王侯貴族の服飾にも扱われる高級品なのだ。

噂の大怪鳥はプチつと瞬殺してみせたらしいが、霞龍オオナズチは列記とした“古龍種”である。

古龍種の生命力は総じて高く、仕留めるまでには相当な時間と労力が費やされる。

そして、長時間ハンターの攻撃に晒されれば、その分だけ剥ぎ取れる素材が当然ながら傷むのだ。

よって、古龍種から剥ぎ取れる“王侯貴族の服飾に使える素材”は、そう多くは無い。

実用性や機能性を重視するハンター達からして見れば、素材に少々の傷が入っていようと気にならないし何の問題にもならないのだが、それを王侯貴族は敬遠する。

例えどれだけ着心地が良かろうとも、傷が目立つ皮で出来た服飾

品を彼ら王侯貴族が身に着ける訳にはいかないからである。

元来、王侯貴族とは贅沢好きであるが、それ以上に見栄っ張りなのだ。

だからこそ、無傷の素材は高く売れる。

元々個体数が少ない上に、討伐どころか撃退する事さえ困難を極める相手である。

その素材の価値は、末端価格であろうと並みの飛竜種や牙獣種のそれとは比べるべくも無い。

件の少女と、その保護者の懐には相当な大金が入り込んだ事だろう。羨ましい限りである。

「そこのところ、君たちはどう思うかね？」

“双龍神【黒天白夜】”と呼ばれる黒と白の双剣を腰から下げ、赤い外套を着込んだ褐色の男が言う。

「あ？別にいいんじゃないかねえか？人間さまに迷惑かけてる訳でもねえみてえだし」

「ふん、そんな与太話など捨て置いて、さっさと飯を食え、雑種ども。我は早く狩りを楽しみたいのだ」

対して、“竜騎槍ゲイボルグG”と呼ばれる巨槍を背負った青いボディーアーマーの男が適当に答え、金びかの鎧 “金火竜”と呼ばれる飛竜種の素材から作られた防具で全身を固めた男が急かした。

とある街の酒場に集まった男三人。

彼らは、何れも一騎当千の実力を持つ“G級ハンター”と呼ばれる凄腕の狩人である。

「おう、そう言えばよ、次のクエストで俺たちが秘密裏に討伐する事になった“黒龍”ってのは、一体どんな奴なんだ？ お前、戦った事あんだろ？」

“こんがり肉G”にかぶりつきながら、青いボディーアーマーの男が聞く。

「“規格外”という言葉が当てはまるバケモノといったところか。動きは鈍重だが、一撃の重さがどれも半端ではない。付け加えて全身の肉質が固く、大抵の攻撃は弾かれると考えた方がいいだろう」

過去に奇跡的な偶然から対峙した、“伝説”との戦いを思い出しながら言う。

黒龍の特徴や習性、攻撃手段と、それらへの有効な対処法まで、事細かに、しかしながら手短かに、赤い外套の男は説明していった。



「へえ、そいつは上等じゃねえか、今から腕がなるぜ」

「ハッ、所詮は羽の生えた蜥蜴とかげであろう。我が財を以て悉く叩き潰してくれるわ！」

まだ見ぬ強敵との戦いに心を躍らせ、歯を剥き出しにして好戦的な笑みを浮かべる青いボディーアーマーの男。

と、余裕の姿勢を崩さない金ぴか。

前者は兎も角、後者は一癖も二癖もある性格をしているが、実力は確かだ。

味方につけばこれほど頼もしい男は、そう居ない。

「ふっ、では頼りにさせて貰おう。目的地までの竜車は既に手配済みだ。“これ”を片付けたら、直ぐにでもこの街を発つとしてよ」

頼もしい二人の狩友ともに対し、目の前のテーブルに並べられた料理の数々を指差しながら。

赤い外套の彼もまた、自信に満ちたニヒルな笑みで返すのだった。

\*\*\*\*\*

そして、「それは」、三人が竜車で目的地まで移動していた道中にやってきた。

何の変哲もない、ただっ広いだけの平原が続いている街道のド真ん中　そこに、突如として“巨大な何か”が降ってきたのだ。

ズドオオオオンッ！！！！　という轟音と共に凄まじい衝撃が大地に走り、それなりに離れた位置にある筈の竜車を激しく揺らす。

「く　ッ!?!」

「何だ、何だーッ!?!」

「ええい、何事だ!?　この我が眠<sup>おれ</sup>っているというのに、騒々しい　ッ!?!」

突然の出来事に、それぞれが獲物を構えながら、男三人が竜車から飛び出して行く。

そして、そんな彼らの疑問に応えたのは、竜車を操る一匹のアイルーだった。

「た、大変ですニヤ、旦那さん方!!!　街道のド真ん中に、“奴”

が突然　ッ！！」

言いながらアイルーが指差した向こう  
う街道のド真ん中に、その姿があった。

土埃が濛々と舞

全体的にほつそりとした印象の巨大な体躯を覆う、やや紫がかつた黒い甲殻。

皮膚上の大きな翼と、大蛇の様にのた打つ長い尾。

後肢のみで直立し、頭部から四本の角を生やした伝説の古龍。

“黒龍ミラボレアス”が、そこに居た。

「ッ！？　おい、もしかしくなくても、あいつは例の“黒龍”じゃねえのか！？」

「ああ、間違いない。だが何故、奴がこんな街道に」

「おのれえ、<sup>とかげ</sup>蜥蜴風情が我の<sup>おれ</sup>眠りを妨げおつて、今この場で血祭りに上げてくれるわッ！！」

青いのと赤いのが何やら話しているのを無視して、己の武器

アイルーの姿を模した黄金の槌“金ねこクラッシャー”を構え、突撃していく金ぴか。

「ッ！？　待ちたまえ！！　不用意に近付いたら

」

金ぴか呼び止めようと、赤い外套の男が叫ぶ  
の言葉が最後まで続く事は無かった。 が、そ

ドゴオオオンッ！！！！ という爆音が周囲一帯に轟き、彼の叫び声を掻き消してしまったからだ。

《 ツ！？ 　　　　ッ！！！？ 》

爆風に煽られ、男三人の直ぐ目の前で見事な放物線を描いてコミカルに回転しながら吹っ飛んでいく黒龍の巨体。

そんな現実離れた光景を目の当たりにして、男三人は驚愕に体を硬直させた。

「ん？ 何だ、ありゃ ！？」

最初に、“それ”に気付いたのは、青いボディーアーマーの男だった。

彼が仰ぎ見る空の向こうから、“何か巨大な物体”が、こちらに向かって凄まじい速度で飛んで来ているのだ。

《 クワッ ！！！！！！ 》

そんな鳴き声と共に、その“何か巨大な物体”から、じつじつと

燃え盛る巨大な火球が飛来してきた。

先程の爆風によって吹き飛ばされ、未だ地に伏していた“黒龍”に向かつて。

《 ツ、 ヽツ!!? 》

それに気付き、黒龍は甲高い悲鳴を上げながら、その場から思い切り羽ばたいて緊急回避 空へ逃れて直撃を免れた。

しかし、大地に炸裂した火球によって発生した爆風に揉まれ、黒龍は結局、再び吹き飛ばされていった。

そして、遂にあの“何か巨大な物体”が、虚空の彼方より舞い降りる。

その姿を視認して 声が出なかった。

突然の出来事に混乱していたのだろうか。

いや、そうじゃなかった。

ただ目の前の“先生”に。

その余りに見覚えのあり過ぎる、桃色の甲殻で覆われた体躯に。



【目撃情報その04：守護神（ガーディアン）】

苛烈にして流麗、そして何より猛々しい、雄大な守護者の背中がそこに在りましたニヤ。by・とあるギルドの赤服を着た金猫

【目撃情報その04：守護神<sup>ガーディアン</sup>・前編】

夢を見た。

『ころころ、落ちていて食べなさい！ そんなに慌てなくても、ごはんは逃げたりなんかしないわよ！』

懐かしい夢だ。

『すごいすごいっ！ あなた、いつの間に飛べる様になったの！？ やるじゃない、流石、わたしの自慢の子ね。親として鼻が高いわー！』

本当に、懐かしい。

『きゃっ!?!? あはっ、あはははははははっ! こらっ、くすぐりたいから止めなさって! もう、甘えん坊さんね 安  
心なさい。わたしは、ずっと側にいてあげるから ね?』

本当に。

『ごめん、約束、守れなくなっちゃったね』

。

『ほら、わたしの事なんかほっといて、早く行きなさい  
大丈夫、あなたなら、もうひとりでも生きていけるから。だから  
生きて、生き抜いて、そして』

幸せになりなさい、お母さんとの約束よ?

\*\*\*\*\*

「 噂の大怪鳥、“黒龍”を撃退する」か」

赤字で大きく“極秘”と記された報告書の記述を見ながら、その



女性は『何を今更』とでも言いたげに報告書をクシャクシャに丸めて、くすかこ肩籠に投げ捨てた。

その女性

無地の黒いインナー姿でベッドに腰掛けている彼女は、老若男女問わず誰もが見惚れてしまうだろう非常に美しい容姿をしていた。

180センチに届く長身と、スラリと伸びたしなやかそうな四肢。突き出たヒップに、キュツと引き締まったウエスト、そして大き過ぎずかといって小さ過ぎもしない形の整ったバスト。

顔立ちは、可愛い というよりは“美しい・格好いい”といった印象だろうか。

腰辺りまで伸ばした蒼白の美髪、そして、切れ長の双眸に揺らめくディープリューの瞳と相俟って、殊更に“クールビューティー”という言葉が当てはまっている。

「大体の実力差は把握していたつもりだが、こうして改めて確かな形で見せ付けられると、色々と“くる”ものがあるな」

ふう、と短く溜め息を吐きつつベッドから立ち上がり、壁に立て掛けてある武具に手を伸ばす。

それらは、ここ数年もの間、彼女が愛用してきた最高クラスの性能を誇る自慢の武具たちである。

“覇竜”の別称を持つ原始的な飛竜種の素材で作られた“それ”

は、俗に“アカム装備”と呼ばれるモノだ。

それも、従来の覇竜より強力な  
“変種”と指定されていた  
个体から剥ぎ取った素材を用いた至高の逸品たちである。

「やはり、“これ”では勝負にもならんのだろっつな」

しかし、そんな逸品でさえ、“奴”相手には何の役にも立たない  
だろっつ。

奴のプレス 着弾地点から広範囲に渡って吹き飛ばす焼  
夷弾バムの様な灼熱の息吹きの前では、重装備など寧ろ足枷にしかなら  
ない。

「はあ~~~~~」

覇竜の黒い甲殻で作られた兜を両手に掴みながら、再び、しか  
し今度は大きく溜め息を吐く。

ギルドナイト最強のハンターと謳われている彼女は、このところ、  
恋い焦がれる様に溜め息ばかり吐いていた。

事の発端は、およそ一月前に見付けてしまった巨大イャンクック  
通称“ドスイヤンクック”にあった。

驚くことに奴は、代表的な古龍種である鋼龍クシャルダオラを、  
たったの一撃で下してしまったのだ。

（ “ あれ” は、凄まじかったな ）

思い出しただけで、カラダが震える。

彼の大怪鳥に見せ付けられた圧倒的な火力と、その場に居合わせ  
たからこそ感じ取れた強者ならではの存在感                      その力強さ  
に、彼女は一瞬で骨抜きにされてしまったのだ。

（ うゝッ、戦ってみた い    ツ！！ ）

バトルマニア  
戦闘狂的な意味で 。

嘗て相対した何者よりも強大な怪物。

余りにも遠過ぎる世界にいる好敵手。

そんなモノを見付けてしまったからには、もう、うずうずして、  
いてもたってもいられない。

戦ってみた い 。でも、仮に今の自分が戦ったとしても、結果は  
火をみるより明らかだ。そこに僅かな勝ちの目も無い。そんな戦い  
とも呼べない戦いに赴くなど、愚の骨頂である。焼き肉定食 間違  
えた、弱肉強食の狩人生活に於いて、狩猟先での敗北はイコールで  
“ 死 ” を意味するのだ。まだ二十代（結構ギリギリ）の若い身空で  
自分から死にたいとは思わないし、そもそも男性経験どころか異性

の手を握った事すら無いのに死ぬとか嫌過ぎる。というか鬱だ、寧ろ死にたくなくて来た。いや、嘘だけど。ああ、でも仮に交際するのなら、やっぱり年下がイイかな、カワイイ系の。家事万能で優しく、でも、いざという時は頼りがいがある、それでいて少し強引な一面もあつたりなんかしちゃつたりしまして。

若干ながらも頬を紅潮させ、霸竜の黒い甲殻で出来た兜を胸に抱き締めながら、妙齡の女性が自室で一人、体をくねらせている。

第三者が見れば、すわ何事かと叫びたくなる奇天烈な光景であるが。

「大変ですニヤ、教官殿!!」

「何事ですか？」

しかし、突然の訪問者には、普段どおりの凛々しい態度で応対してみせる。

先程までの痴態はどこへやら、そこには完璧な麗人の姿があつた。

「現在、この街に“砦蟹シエンガオレン”が接近中。およそ二時間後に防衛ラインに突入する、との報告が観測所の者達からありましたニヤ!!!」

訪問者                   羽根飾りの付いた赤い帽子を深々と被り、ギルドナイトの制服を着こなしたゴールドの毛並みを持つアイルーは、まくし立てる様にして街の危機を報告した。

\*\*\*\*\*

“ 砦蟹シエンガオレン”。

殻を含めての全長は凡そ23メートル、全高に至っては30メートルを超え、10メートル余りもの長大な鋏を有する巨大な甲殻種。老山龍の頭蓋骨を宿に背負い、くすんだ蒼灰色の分厚い外殻に覆われた体躯を持つ高仙人。

縄張り意識が強く、縄張りを徘徊する先々で障害物や縄張りを侵す者を排除しようとする傾向がある、ある種の天災の様な存在である。

そして、その“天災”に立ち向かう者が、ここにひとり

溪谷に挟まれた大地に大剣を突き立て、仁王立ちして待ち構える。



そして遂に、“狩り”が始まった。

\*\*\*\*\*

「破ッ！！！！！」

《　　ツ！！？　　ツ、　　ッ！！！！？　　》

大剣を一閃。

狩人によつて振り抜かれた先制の一撃は、岩蟹の四本ある長大な脚の一本　　その外殻を砕いてみせた。

予想だにしなかった痛手を受けた衝撃に思わず体勢を崩し、その場に倒れ込む。

ズシイインッ！！！！　　という、如何にもな地響きが重々しく轟いた。

「次は、更にデカいのをぶち込んでやろう　　ッ！」

叫びながら、バックステップで距離を取りつつ、岩蟹の背後へと回り込む。

追撃はしない。ただひたすらに隙を伺い、渾身の一撃を叩き込む

ヒット&アウェイを貫く戦闘スタイルこそが、自分のやり方だからだ。

所詮、狩人も人間でしかない。如何に頑強な鎧ハシタで身を固めようとも、その内側は常人と大差ないのだ。

大型モンスターの攻撃をまともに喰らえば、その衝撃だけで昏倒させられかねないし、当たりどころが悪ければ即死する事だってある。

極々稀に、数十メートルもの落差がある崖から生身で飛び降りても無傷でいられる狩人も居たりするが、そんな人外じみた耐久力を持つ輩は、この世にほんの一握りしかない。

まあ、彼女も、その“人外”にカテゴリーされてしかるべき存在の一人であるが、だからといって、過信は出来ない。

故に、モンスターのどんなに小さな予備動作であろうと、見過ごしてはならないのだ。

《 ツ！！！！！！ 》

甲殻種特有の何とも表現し難い鳴き声と、関節を動かすギチギチという音が鳴り響く。

地面もろとも狩人を吹き飛ばそうと、砦蟹の長大な鋏が横薙ぎに払われたが、そこに彼女の姿は無かった。

それもその筈、砦蟹が鋏を振り被った頃には、その場から既に狩



人は離脱していたのだから。

そして。

「隙だらけだ」

大剣による遠心力を最大限に利用した渾身の一撃が、砦蟹へと吸い込まれでもするかの様にして勢い良く叩き込まれる。

ガコオンツ!!!! という小気味よい音を立てて、砦蟹が背負っている老山龍の頭蓋骨 砦蟹の柔らかい腹部を守る“宿”の下半分が、盛大に損壊した。

《 ツ、 〉 ツ!? ツ!? ツ!!!?》

甲高い悲鳴を上げて、砦蟹は全身を仰け反らせる。

クッション剤も無しに腹部へ直接被せている以上、宿を攻撃された衝撃が、ある程度は内部へと伝わってしまうのだ。

老山龍の頭蓋骨の下半分を豪快に砕いてしまう様な一撃である、衝撃は幾分か分散されているものと思われるが、それでも砦蟹が受けたダメージは半端な物ではないだろう。

ダメージに比例して、砦蟹が見せる隙も大きくなっていく。

が、それでも一撃当てたら距離を置く。

彼のハンターは、自らのスタンスを不必要に崩さない。

《 ツ！！！！！！！ 》

砦蟹が背負う老山龍の巨大な頭蓋骨から、強酸性の砲弾の如きブレスが吐き出された。

が、当然ながら、そこに“的”は既にもいない。

そして、次の一撃は、最初に碎かれた“脚”へと叩き込まれ。

バキイイツ！！！！！！ という音と共に、砦蟹の脚を先端からへし折ってみせた。

\*\*\*\*\*

とある街の最終防衛ライン 溪谷に挟まれた、ただっ広い大地にて繰り広げられた、“狩人VS砦蟹”の一騎打ち。

その果てに倒れ伏した砦蟹シエンガオレンの“亡骸”の惨状は、

それ自体が“狩人”の力量を雄弁に物語っていた。

四本ある長大な脚のうち左側の二本が先端からへし折られ、最も強固である筈の鉄に至っては、双方共に根元からバツサリと断ち切られている。

背負っていた老山龍の頭蓋骨は執拗に狙われたのか砕かれて原型を留めておらず、胴体のド真ん中には致命の決定打となったであろう大剣による渾身の一撃が縦一文字に深々と刻み込まれていた。

そして。

「か、はッ!!!?」

岩壁を単騎で下した狩人は、溪谷の岩壁へと全身を強かに打ち付けられていた。

最初に感じられたのは、背後から襲い掛かってきた強烈な衝撃だった。

それから、ほぼ垂直に岩壁まで300メートル近くも飛ばされ、全身が僅かばかりめり込んでしまうほど強かに叩き付けられたのだ。

霸竜の素材から作られた耐久性に富んだ黒鎧で全身を固めていなければ、今頃はミンチになっていた事だろう。

( 油断、したッ )

現状に対し、『何故』とは思わない。

答えが余りにシンプル過ぎて、考える迄も無いだからだ。

察するに自分は、この場に居合わせた“第三者”によって襲撃されたのだろう、と。

《ギユアアアアアアッ！！！！》

そして、薄れゆく意識の中で狩人の耳に聴こえてきた、“咆哮”

その“主”こそが、第三者の正体であった。

前肢と後肢の間に皮膜状の大きな翼を有し、くすんだ赤色に錆び付いた甲殻で全身が覆われた全長20メートル余りの体躯を持つ古龍種。

俗に、“錆びたクシャルダオラ”と呼ばれる鋼龍の個体が、そこにいた。

\*\*\*\*\*

今から凡そ一月前、“彼”は生涯で初の敗北を期した。

彼が“奴”と遭遇したのは、自分の新たな縄張り  
にしようと巡回していた新天地での出来事だった。

最初に奴を見かけた時は、自分の“直ぐ目の前”に雑魚が姿を現  
した という程度の認識しか持っていなかった。

だからこそ、羽虫を払いのける様な軽い気持ちで、しかしなが  
ら自分が出せる全力を以て排除しようと、彼は奴に攻撃を仕掛けた  
のだ。

理由は単純だ。

いずれは自分の物となる土地に悠然と佇む奴の存在が、気に食わ  
なかったから。

ただ、それだけの事だった。

そして、彼が放った全力の一撃は奴を打ち砕く。

ことなく、逆に奴が放った圧倒的な“暴力”の前  
に微風そよかぜの如く打ち消されてしまった。

その事に驚愕で目を剥くも、次の瞬間には強烈な爆風に巻き込ま  
れ、全身を覆う“鋼の鎧”を見るも無惨に砕かれる事となったのだ。

全くの想定外だった。

その不測の事態と、全身を襲う激痛。

この二つの負荷に思考は塗り潰される。錯乱状態に陥った頭が思い浮かべるのは純粹な疑問のみで、その答えを彼に齎す事はいずれも無かった。

否、<sup>いや</sup>彼が求めていた答は、<sup>こたえ</sup>先方から自ずと近付いて来た。

ズシイン、ズシイン！！と、一投足ごとに大地を揺るがす程の、老山龍に匹敵するか 或いはそれ以上の巨軀。

全身を包む桃色の甲殻に、下顎がしゃくれた大きな<sup>くちばし</sup>嘴と、襟巻き状の特徴的な形をした耳。

鳥竜種の大型モンスターとして広く知られる飛竜・怪鳥イャンクックの姿をした“巨大な何か”が、彼の直ぐ側に佇んでいた。

（ 成る程。儂は、“コイツ”に打ち負かされたのか ）

この時、彼は初めて己の“距離感”が狂っていた事を悟り、その直後には自らの“死”を覚悟した。

彼は今も首だけを持ち上げて相手を睨み付けてはいるが、それだけだ。

彼は既に満身創痍で、自分を負かした相手を睨み付ける程度しか



故に、彼を喰らうことは出来ないだろう。

しかし、自分は野生に生きる多くの種の上に立つ存在だ。

それを下した証として、その屍を縄張りに飾り付ければ、“見せしめ”くらいには使える筈である。

屍を晒されるのは糺じまへではあるが、こればかりは今更だ。運が無かったのだと諦めるより他はあるまい。

それから彼は、ひとしきり笑った後、遂に余力を使い果たして意識を失い。

そして、生かされた。

\*\*\*\*\*

それから凡そ一ヶ月後、あの巨大な怪鳥に生かされた“彼”は日増しに猛り狂っていった。

奴は、敗北し地に伏した彼を見逃しただけでなく、自らの縄張りをも譲歩したのだ。

屈辱的だった。



“空の王”と名高き雄火竜たちでさえ恐れを抱いて近付かない、風の支配者、その矜持きょうじを踏みにじられた気分だった。

ふと、自身の体を見やると、そこには赤く錆び付いて尚、全身の甲殻に走る“罅割れた痕跡”がはっきりと見て取れた。

この一ヶ月間、“脱皮”をする時期が近付くにつれて錆び付き始めた金属質の皮が刺さり、その痛みが更なる猛りを募らせた。

体の傷は、確かに癒えたが、心に負わされた傷は癒えず、寧ろ日増しに化膿でもするかのように悪化し、今では憤怒で頭がおかしくなりそうだ。

だから、探していた。

一ヶ月前の、あの日、自分を打ち負かした“奴”に再戦を挑むべく、世界中を飛び回ってまで探し続けていた。

（見付からんッ）

だが、なかなか見付けられない。

その場に奴が居た痕跡は幾つか見付けられたが。

しかし、肝心の奴自身が見付けられない。

『何処だ、何処に居るッ!!!? 出て来い、バケモノ!!!』

出て来て、この儂と勝負しろおおおおおッ！！！！！！』

怒りが最高潮に達し、吠える。

そして、その時。

ふと視界の端に、人間達が住まう“街”が映った。

この時の彼は、既に、おかしくなっていたのだろう。

もう相手が何であれ構わないと、今は、ただ沸々と湧き上がる破壊衝動の赴くままに暴れたいと、そう思ったのだ。

“金色”の双眸が、憤怒の色に燃え盛る。

そして、彼 “錆びたクシャルダオラ” は、糧を得る為でも縄張りを守る為でもなく。

ただ“破壊する為”だけに、街を目指して飛翔した。

\*\*\*\*\*

「 射撃部隊ッ、段幕薄いぞ、何やってんの！！？」

ヘビーボウガンを構える衛士達に激を飛ばす指揮官の声が響く。

そんな街中に一人、セミショートにした水色の髪を持つ少女が、如何にも必死そうな表情を浮かべて走り回っていた。

突如として襲来した古龍種による被害を免れるべく駆け込んだ避難所に、自分の親友の姿が無かったからだ。

これに焦った彼女は、たまらず一人で避難所を飛び出してきたのだが。

(どこにいるの！?)

辺りをキョロキョロと見回しながら、ひた走る。

おそらくだが、あの子は避難する途中で何らかのトラブルに巻き込まれ、動くに動けない状況に陥ってしまったに違いない。

彼女自身が怪我をしたとかは無さそうだが、あの子は若干気弱な印象があるものの、その本質はお人好しで面倒見のいい“良く出来た”女の子だ。

避難所へ向かう道中で誰か困っている人でも見付けてしまったなら、彼女の性格を考えると放っておけないだろう。

そして。

「！? はあ、こんなことだろうとは思ってたけ

ど  
」

その姿を遂に見付けて、思わずボヤク。

“そこ”には、小さな子供を負ぶさりながら、避難所へ向かつて街の広場を歩く親友                      サイドテールにした緑色の髪が特徴的な、見覚えのある少女の姿があったのだ。

案の定、と言ったところだろうか。

自らの見解が見事な迄に的中していた事に溜め息を漏らしつつも、水色の髪の少女は安堵した。

が、その直後、彼女は体を硬直させられる事となった。

《ギユアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！》

先ず最初に、鋼龍の咆哮が聴こえてきた。

それから見たのは、高空から打ち下ろす様にして竜巻のプレス

“風翔波”を放つ鋼龍の姿。

そして、鋼龍が放った風翔波の先には、子供を背負って歩く親友の姿が。

「 ツ！！？ 逃げてええええッ！！！！」

叫ぶ。

逆巻く大気を視認出来る程に圧縮された竜巻のプレスだ。

その破壊力は、岩盤さえ容易に粉碎するだろう。

そんな物に生身の人間が巻き込まれれば、どうなるかは想像に難くない。

岩を砕く衝撃波と、それに伴う急激な気圧の変化による内臓へのダメージ。

間違いなく、“死ぬ”。

(あ)

そして、水色の髪の少女は、本人も知らぬうちに悟っていた。

もう、“手遅れだ”と。

鋼龍が放った竜巻のプレスは、その余波だけでも広範囲に渡って吹き飛ばす。

今更逃げても、遅過ぎるのだ。





距離までやってきた。

先刻、皆蟹が襲来してきた方角とは真逆に位置する街の正門、その向こう側から、何か“巨大な生物”らしき物体が、今も尚、地響きを轟かせながら近付いてきている。

真正面故、全長は分からない。

が、その全高は少なく見積もっても20メートルを裕に超えている。

大地を踏み締める後肢は力強く、折り畳まれた両翼を広げれば、それはまさしく巨大な壁となるだろう。

歩く度にゆらゆらと揺れる尻尾は、そう長くはないが、それでも大抵の障害を薙ぎ倒すには充分過ぎる強靱な鞭となるに違いない。

首は長く、その先に続く頭部の大半が“立派なくちばし”で構成されており、特徴的な形をした大きな耳は襟巻き状に広がっている。

その姿は、この世界に生きる大多数の者たちが良く知っている“とある存在”と酷似していた。

しかし、今更ながらも、やはり縮尺がおかしい、どう考えてもおかしい。

だが、“それ”は間違いなく、そこに実在していたのだ。





対する大怪鳥は、その一声を以て鋼龍の迎撃を試みる。

大きく開かれた嘴くちばしから放たれたのは、闇色に瞬く一筋の閃光だった。

それは、体内に蓄積された不純物の結石　　俗に“大竜玉”と呼ばれる物より更に巨大かつ高密度な結晶体から抽出した“龍属性”のエネルギーを収束し、口腔より一息に打ち出すレーザー光線である。

この“一点突破”を題材にした一撃は、当たれば老山龍の分厚い甲殻であろうと問答無用で紙の様に貫いてみせるだろう。

そう、『当たれば』の話である。

《ギユガア　ツー!!》

大怪鳥から放たれたレーザー光線を見もせず、鋼龍は半身を反らす事によって回避してみせた。

が、ほんの僅かばかり掠めたレーザー光線に左後肢を焼かれ、反射的に短く呻く。

大怪鳥から放たれるレーザー光線は、超音速を遙かに上回るふざけた速度で一直線にすっ飛んでくる。

如何に優れた反応速度や俊敏性を持っていようと、“見てから”

では回避が間に合わない。

故に、己の“感”に頼る以外の対処法が無いのだ。

そして、大怪鳥のレーザー光線は一度撃ち終わると、次弾装填には数瞬のインターバルを要するらしい。

その“数瞬”を突いて、鋼龍が反撃を仕掛ける。

《ギ ユ ア ア ヅ !!!!!!》

螺旋を描く空気の層が視認出来る程に圧縮された鋼龍のプレス、“風翔弾”。

以前、この鋼龍が大怪鳥に向けて放った物より遥かに強烈な今なら岩盤どころか鉄塊でさえ粉碎し得るだろう必殺の息吹き。

それが、怨敵を葬らんと的に迫っていき。

《クエ 》

ズドオオオオン!!!! という炸裂音を立てて、大怪鳥に見事命中した。

大怪鳥に直撃した際、辺りに拡散した衝撃波に吹き飛ばされた土

砂によって、広範囲に渡って土煙が立ち上る。

それを更に、大きく広げた翼から発生した風圧を以て吹き飛ばしながら、“無傷”の大怪鳥が姿を現した。

《ギ ッ！！？》

己が全力の一撃を真正面から受けて尚、健在の大怪鳥に驚き、鋼龍が目を剥く。

そして、大怪鳥の嘴くちばしからほとばしる闇色の閃光が、バチバチとスパークを起こしながら溢れ。

《クエ ！？》

しかし、今回ばかりは、大怪鳥のレーザー光線が放たれる事はなかった。

レーザー光線の斜線軸上に、“街”がある事に気付いたのだ。

ふと、大怪鳥の脳裏に、遠い昔に誰かと交わした些細な“約束”が蘇る。

『余所さまの物を、無闇に壊しちゃダメだからね』





さて、一体、何人が“その事”に気付いているだろうか。

ブレスの応酬から始まった二匹の戦い、それは、大怪鳥に対し鋼龍が初めて体当たりを仕掛けた辺りから確認される様になった。

「あのイヤンクック、やはり、自分からブレスに当たりに行っているニヤ」

街の広場の外を一望出来る砦の上から見える戦いを眺めながら

ギルドナイトの赤い制服を着こなしたゴルドの毛並みを持つアイルーが、自分の見解をボソリと呟いた。

そう、彼(?)の言う通り、あの大怪鳥は、鋼龍が牽制に乱れ撃つブレスに、自ら当たりに行っている様に見受けられるのだ。

勿論、全てのブレスを受け止めている訳ではなく、時には避けてみせる事だってある。

しかし、見当違いの方向へ飛んでいく鋼龍のブレスを、わざわざ自分のブレスで撃ち落とす事もあるのだ。

一見、無意味にしか見えない不可解な行動であるが、何故そんな事をしているのか迄はわからなかった。

「 街を、庇ってる？ 」

自分の隣に立つ少女が呟いた、そんな言葉を聞くまでは。

「ニヤ ！？ いや、しかし」

彼女の言葉を聞いて即座に否定しようとするも、『有り得ない』  
とは言えなかった。

とある事情から街の広場に居た所を、衛兵たちが  
保護したらしい三名の民間人の内の一人である、簡素なデザインの  
青い服を着た十歳くらいの幼ない少女。

サイドテールにした緑色の髪が印象的な彼女の見解は、考えてみ  
れば、“なるほど”と思わせるだけの物があったのだ。

確かに、あの大怪鳥の行動を顧みると、鋼龍がばらまいたブレ  
ス 中でも“街”に被害を及ぼしそうな“流れ弾”を  
潰してくれている様に見えるかも知ない。

と言うか、寧ろ、そうでないと説明が付かない。

一度や二度であるなら“偶然”という事で片付けられる。

だが、それも二十、三十回と続けば、もはや“必然”以外の何物  
でもないだろう。



《 クワッ ……!!!! 》

そして、また皆の目の前で“流れ弾”が大怪鳥のプレスによって撃ち落とされた。

(これは もう認めざるを得ないかニヤ)

大怪鳥が“街”を庇っている事は、まず間違いない。

何故そこまでして街を気に懸けているのか、その理由はわからないが。

しかし、それならば、あの巨躯の何と頼もしいことか。

正直、街にある今の戦力では、あの異常な迄に強力な鋼龍の個体を“討伐”するなど不可能に等しく、“撃退”さえ困難を極めた事だろう。

鋼龍との戦いで命を落とす者が続出するものと覚悟していたのだが、しかし、“人死に”が出る前に大怪鳥がやって来てくれたのは、不幸中の幸いだったのかも知れない。

「リーダー！ 負傷した衛兵・狩人たち全員の応急処置及び、射撃部隊の補給が完了致しました。」

ギルドナイトの赤い制服に身を包み、眼鏡を掛けているセミロン

グの黒髪を持つ年若い女性がピシッと敬礼しながら、己の上司  
同じくギルドの赤服を着ているギルドの毛並みを持つアイ  
ルーに報告した。

「むっ、ご苦労ニヤ。次は、各部隊・避難施設を預かるリーダー  
達に向けて、連絡班を派遣せよ。内容は

そして彼(?)は、今後の活動方針を示すべく、  
己が最善と考える指示を出していくのだった。

\*\*\*\*\*

大怪鳥と鋼龍、激しい攻防を繰り返す二匹との  
間に保たれていた均衡が崩れたのは、余りに突然の事であった。

《クワッ！！！！》

大怪鳥の口腔から放たれた闇色の閃光が、偶然にも鋼龍の左翼膜  
のド真ん中を貫いたのだ。

《ギユガアッ！！？》

突如として片翼を撃ち抜かれた事により、空中でバランスを崩してしまった鋼龍。

そんな彼に、大怪鳥からの追撃が襲い掛かってきたのは、それから数瞬後の事であった。

《クワツ　！！！！》

もう幾度てなく聴かされてきた、大怪鳥の咆哮。

それと共に放たれたブレスは　　しかし、これまでの様なレーザー光線ではなく、紅蓮に燃え盛る巨大な“炎”の塊であった。

それは“あの日”、大怪鳥に出会う前まで無敗を誇っていた鋼龍に初黒星を叩き付けてみせた大怪鳥の一撃。

万物を灰塵に帰する、極大の豪火。

それが、決して遅くはない勢いを保ったまま鋼龍に迫っていき。

そして、鋼龍の横っ腹に寸分変わらず炸裂した。

つづく



【目撃情報その05：風纏い空翔る遙か古の鋼龍】

街の直ぐ側で繰り広げられた“奴”と鋼龍との戦いは、多分に世界でも有数の伝説として後の時代に語り継がれていくのだろうな。by. とある霸竜装備を脱いだ女傑

【目撃情報その05：風纏い空翔る遙か古の鋼龍】

とある街の正門付近の荒野で繰り広げられた、大型モンスター同士の熾烈な戦い クシャルダオラ ブレスの応酬から始まった“大怪鳥ドス イャンクックVS錆びた鋼龍”の戦いは、大怪鳥が放った特大の炎のブレスによつて終極を迎えようとしていた。

大怪鳥の炎は、錆びた鋼龍に着弾すると同時に大爆発を引き起こし、周囲一帯を纏めて焼き尽くしてみせた。

濛々と立ち上るキノコ雲。

撒き散らされた爆炎は、超高熱を以て大地を焦がし。

凄まじい衝撃波が、大量の粉塵を空高く巻き上げ。



意を突かれ一撃で昏倒させられた蒼白の長髪を持つ妙齡の女性ハンターが、さも“信じられない”といった様に呟いた。

救護班の治療を受け、それから全身包帯塗れの体を推して、先の攻防の一部始終を見守っていたが故に、今現在も目になっている光景が信じられなかった。

大怪鳥の炎のプレスによって、嘗ては爆発の余波だけで沈められていたあの鋼龍が、今回は直撃を受けて尚、五体満足の姿で余力を見せ付けたのだ。

あの鋼龍が以前より飛躍的に強力な個体へと進化している事は、奴の一撃を直に受けた自分が文字通り身を以て思い知らされているが、それでもあの錆びた鋼龍が、大怪鳥の一撃に耐えられるとは到底思えなかったのだ。

事実、大怪鳥が放った闇色のレーザー光線によって、鋼龍の片翼はまるで紙の様に容易く撃ち貫かれたのだ。

貫通力ならレーザー光線の方が上回るだろうが、総合的な“破壊力”は炎のプレスが圧倒するだろう。

ならば、その炎のプレスに耐えられる道理など無い筈である、最悪、肉片一つ残さず蒸発させられていてもおかしくは無かったのだ。

しかし、実際には全身を炙られた程度のダメージで済んでいる。

纏っていた“風の鎧”と呼ばれる膜幕状の強風によって幾分かダメージは緩和されていたのだろうが、その分を顧みても鋼龍のダ

メージが少な過ぎる。

一体、どんな手品を用いて耐え抜いたというのだろうか。

《

ツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

あれよあれよと思案する女性を余所に、錆びた鋼龍が動きを見せた。

再度響き渡る咆哮と共に、周囲の大气を自身へと収束していく。

高速で逆巻くソレは、やがて常人でも視認可能な密度にまで圧縮されていき、そして遂には、その凄まじい風圧を以て鋼龍自身の表皮をベリベリと引き剥がし始めた。

しかし、剥がれていく表皮　　錆び付いた甲殻の下から顔を覗かせたのは、赤い皮下組織ではなく。

眩い金属質の光沢を宿した、鋼色に輝く甲殻だった。

(　　“脱皮”した　ツ!!!?)

目撃例が無いとされている、鋼龍クシャルダオラの脱皮。

鋼龍従来之物とは余りにかけ離れた強引なカタチながらも、それ





（無謀だな。元より脱皮直前であったとは言え、自らの表皮を削り飛ばす程の高速・高密度の“風の鎧”を纏うなど “自殺行為”だ）

だが、それ故に悔れない。

己が命を顧みない“捨て身”の姿勢より繰り出される一撃は、逆に言えば自らの肉体でさえ破壊してしまう程に“強力過ぎる”ものなのだから。

だからこそ、その“強力な一撃”を、大怪鳥は見過ごす訳にはいかなかった。

大怪鳥の背後には、多くの人間たちが居るだろう“街”があるのだ。

鋼龍の攻撃が万一にも其方へ向かってしまわない様に、確実に迎え撃たなくてはならず、そして撃ち漏らしは許されない。

街を自分の攻撃の斜線軸上から外す為に、街を背後に庇う様な立ち位置を取らざるを得なかったのだが、それが、今は完璧に仇となっていた。

（　　だが、我に“力を溜める時間”を与えたのは失策であったな、鋼龍よ　！！）

鋼龍の片翼を貫いたレーザー光線も、全身を焦がした炎のプレス





思えば、あの巨大なイヤンクツクの姿をした“バケモノ”と自分が遭遇したのは、全くの偶然であったと、“クシャルダオラの特異個体”である彼の金色の眼を持つ鋼龍は記憶している。

初戦は、もはや“戦い”とすら呼べないくらい惨めな敗北を期した。

一体どこの世界に、イヤンクツクに一撃で倒されてしまうクシャルダオラが居るといえるのか？

相手の規格外な“強さ”もさることながら、それ以上に、無様に生き繋いでしまった自分と、自分を生かした相手に激しく憎悪した。

『相手が悪かった』と言ってしまえば、それまでなのだが  
しかし、それで納得出来るほど彼の鋼龍の矜持は安くなかったのだ。

それから彼は、負わされた体の傷を癒やしながら“力”を蓄えつつ、ひたすらに件のバケモノを探し続けた。

探して、探して、探し続けて。

けれども見付けられないまま月日は巡り、そしてとうとう自分の忍耐力が限界を迎え、溜まりに溜まったフラストレーションを解消するべく人間たちに八つ当たりをしていた、その最中。

“奴”<sup>バケモノ</sup>は自ら、その姿を自分の前に現した。

今回は八工でも払い除けるかの様に軽くあしらわれてしまったが、今回は違った。

此方に向けて、明確な“敵意”を題していたのだ。

何故、ああも激昂しているのか、その理由が最初は分からなかったものの、それは奴との交戦中に悟る事が出来た。

街を 人間たちを、“庇っていた”のだ。

それなら『どうしてモンスターのかせに人間などを庇いだてしているのか？』という疑問は残るが そんな事は鋼龍にとつて細事に過ぎない。

ただ、この期に及んで自分との戦いに集中しようとしないう大怪鳥の態度に、鋼龍は自分の中から湧き出してくる“何か得体の知れない黒い衝動”に視界全体が真っ赤に染まり。

次の瞬間には、我を失っていた。

その後、鋼龍が正気を取り戻したのは、大怪鳥のレーザー光線状のプレスによって己の片翼のど真ん中を撃ち抜かれ、更に追い打ちで“炎のプレス”を横っ腹に叩き込まれた直後の事であった。

そして、己の“死期”を悟った鋼龍クシャルダオラは、余力の全

てを賭けた“最後の―撃”を大怪鳥に見舞うべく。

その身に風を纏い、空を翔た。

\*\*\*\*\*

大怪鳥ドスイヤンクツクの嘴くちばしより放たれた“龍”属性のプレス  
迫り来る暴力の津波を、鋼龍クシャルダオラは、その身に  
纏った“風の鎧”を以て切り裂いてみせた。

が、しかし。

□ “届かなかった”、か □

それでも、鋼龍の“最後の―撃”は大怪鳥に届かず、その手前で  
止まる事となった。

別に、大怪鳥が何か手を出した訳ではない。

ただ、鋼龍自身に“限界”が来ただけだった。

己の限界を超えた強大な“力”の行使は、鋼龍自身の肉体を蝕み、  
内側から自壊させていたのだ。

付け加えて、鋼龍の横つ腹に着弾した大怪鳥の“炎のプレス”は、それまで鋼龍が幾重にも纏っていた“風の鎧”による防御を貫いた上で内臓に深刻なダメージを負わせてもいた。

これによつて、ただでさえそう長くはなかった鋼龍の“活動時間”が、大幅に削られてしまっていたのだ。

『 儂の、“負け”だな 』

自嘲気味に口角を上げながら、吐き捨てる様に呟く。

呟きながら、鋼龍は自分の直ぐ目の前を仰ぎ見た。

そこには、今も街を背に庇う様に仁王立ちしている大怪鳥が、その大きく開いた立派な嘴を此方に向けて構えていた。

大怪鳥の口腔から、圧倒的な暴力の“第二波”が、闇色のスパークをバチバチと撒き散らしながら顔を覗かせている。

『 ああ、それでいい、それが、勝者の務めだ 』

『 どうやら“今度こそ”は、しっかりと敗者にトドメを刺してくれそうだな、と。 』

そう最期に言い残して。



何か憑き物でも落ちた様な、そういった印象の穏やかな表情を浮かべながら。

金色に輝く双眸を持つ一匹の鋼龍は、クシャルダオラ大怪鳥より解き放たれた破滅の光に飲み込まれて。

そのまま、文字通り肉片一つ残すことなく、“消えて”逝った。

つづく

【目撃情報その06：開幕・それはきつと宿命的な出会い】

ホツホツホ、結局“あの戦い”は引き分けてしまいましたが、いずれ“奴”とは雌雄を決しておきたいものですね。あ。by・謎の老紳士

【目撃情報その06：開幕・それはきつと宿命的な出会い】

大怪鳥ドスイヤンクツクが、鋼龍クシャルダオラを討ち滅ぼした日から、凡そ一ヶ月後。

古龍襲撃により決して少なくはない損害を被った街が、漸く以前の活気を取り戻し始めた頃。

とあるギルドが管理している某・訓練所の広場に、ハンター志望の数十人にも及ぶ新たな訓練生たちが集い、それぞれがペアを組んで模擬戦を行っていた。

「ふむ」

そして、そんな彼ら訓練生たちを一望出来る見晴らしの良い位置

に、教導官と思われる女性　　鞣し革に金属製のプレートを張り付けた簡素なデザインの軽鎧に身を包んだ長身の麗人がひとり、腕を組んで凜然と立っていた。

腰辺りまで伸ばした蒼白の美髪と、磨き抜かれた大理石の様に白く滑らかな肌、切れ長の双眸に揺らめくディープブルーの瞳が印象的な、大人の女性。

“最強のギルドナイト”として勇名を馳せている彼女  
普段は“覇竜装備”を愛用している、“あの”女傑である。

「いや、あつはつはつ、みんな“若い”な」

年若い訓練生たちの顔ぶれを眺めながら、如何にも陽気そうに笑う女傑。

“若い”の部分に嫌に強調している様に感じるが、多分に気のせいだろう。

つい先日、　　回目の誕生日を迎えて、また一步“三十路”へのカウントダウンが成されてしまった事とかは、きつと関係無い筈である。

実年齢は兎も角、少なくとも“外見だけは”そこそこ若く見えるのだから、別に、気にする事はないだろうに。

「其処の者、少し黙れ」

「ごめんなさい。」

と、それはさて置き、つい先日、新たな訓練生たちの教導官に抜擢された彼女であるが、実のところ結構ノリノリで、この仕事を引き受けていたりする。

何事もそつ無くこなし、外面の印象から“氷”や“研ぎ澄まされた白刃”等を連想させられる何処か近寄り難い雰囲気を纏っている彼女であるが、  
実のところ相当な熱情家であり、どちらかと言えば寧ろ“世話好き・お人好し”に分類される人格の持ち主なのだ。

先輩である元・ハンターから『一緒に孤児院を運営してみないか？』と誘われた時は三日三晩本気で悩み抜いた物である。

まあ、その件は結局、頼りない後輩たちが日夜頑張っている万年人手不足のギルドに今暫く籍を置く事を選んだのだが。

しかし、ここ最近、上司から単独行動ばかり強いられていたせいで他者との触れ合いに飢えていた為、誰彼無しに構いたくてウズウズしていたのだ。

そんな彼女にとってみれば、今回受け持った仕事は、まさしく“渡りに船”だったろう。

故に、彼女は浮かれていたのだ。

「 教官殿、ギルドマスターから貴女宛てに“伝言”を承  
つてまいりましたニヤ、至急、応接室まで来てくれ」との事  
ですニヤ」

広場の入り口からトコトコ歩いて来たゴールドの  
毛並みを持つ一匹のイルーが自分の前に立ち、ピシッと敬礼しな  
がら、そんな報告をしてくる、その時まで。

\*\*\*\*\*

応接室までの道のりを足早に進みながら、ただそれだけで後方に  
靡く蒼白の長い髪を揺らして、彼女は思案する。

何故、自分に対して急な呼び出しが掛かったのか 　それ  
もギルドマスター直々に。

そして何故、自分なのか。

( 駄目だ、嫌な予感しかしない )

実を言うと、こういうパターンで呼び出しを食らった事が、過去  
に幾度かあったりするのだ。

今回は、新種と想われる超大型モンスターの調査 　後に

“ドスイヤンクック”と呼ばれる事となった、あの大怪鳥の目撃情報  
の真偽の確認だった。

その前は新天地のマッピングで、その更に前は小型の古龍種の捕  
獲。

何れも、一個人に任せるにしては、非情（誤字に非ず）に難易度  
の高い無理難題ばかりであった。

まあ、その無理難題を単独かつ短期間で達成してしまえるから  
こそ、彼女が頻繁に上司から呼び出される所以でもあるのだか。

しかし、それも無理からぬ事と言えよう。

何せ彼女は、本来なら“少く中隊”規模の人材を派遣しなければ  
いけない大仕事を、たった“一人”で片付けられるくらい優秀なの  
だ。

そんな人材が手元に居れば、誰だって活用したくなる物である。

その方が経費も浮くし。

「むむ？」

ふと前を見ると、応接室まで後もう少しといった所の十字路で、  
何やらオロオロしている小さな人影を見付けて、つい足を止めてし  
まった。

すわ“不審者”か、と注視してみるも、そんな事はなさそうだった。

簡素なデザインながらも見るからに質の良さそうな白妙のマントでスツポリ覆い隠した小柄な体躯。

性別までは判断しかねるが、目深に被ったフードから覗かせている顔の下半分は、いつそ異常とさえ思えるほど整っており、それだけで相当な美貌の持ち主である事が伺える。

（素性を隠して、ギルドに依頼を持ち込んできた“要人”といったところか）

相手が“止ん事無き御身分”の方である事は、容易に看破する事が出来た。

服装からして一般人のそれとは一線を画しているが、何よりも、その洗練された佇まいが常人とはかけ離れているのだ。

これが、所謂“かりすま”というヤツかと、心中で一人ごちる女傑。

“カリスマ”ではなく“かりすま”、これ重要。

「其処の方、高貴なる御身分とお見受け致しますが、一人この様な場所で如何なされたのですか？」

取り敢えず話し掛けてみる。

まあ 十字路でオロオロしていた辺り、多分に道に迷っているだけなのだろうが。

「あゝ、ギルドの方ですか？ すみません、実は道に迷ってしまいました」

どこか、のほほんとした印象のソプラノの声で、そう答える白妙の要人。

どうやら、案の定だったらしい。

「そうでしたか、目的地は何処ですか？ 僭越ながら、ご案内致しますよう」

「よろしいのですか？ それでは、お言葉に甘えて  
“ 応接室”まで、お願いしますね

言いながら、そのヒトは自らフードを下ろした。

そして。

「ッ」

その露わになった素顔を見て、思わず絶句してしまふ。



其処に在ったのは、人類が理想とする“美”という概念その物を具現したかの様な、一つの極みであった。

その顔立ちは、やはり中性的で、どちらかと言うと女性寄り

いや、女性というより“少女”と表現した方が適切か。

見る人によつては、少年にも見えるだろう。

大きな三つ編みに結わえた純白の長い髪 所謂“プラチナブロンド”と呼ばれるそれは、その一本いっぽんが繊細かつ如何にも滑らかそうで、まるで厳選された最高品質の真珠の様に輝いている。

瑞々しい肌は透き通る様に白く、小さく薄い唇は薔薇の様に紅い。

そして、大きくパツチリと開いた双眸には、この世のどんな宝石にも劣らない煌めきを宿した緋色の瞳が、その強かな意思を題していた。

「どうもはじめまして、わたしの名前は、アンフェルネス

“アンフェルネス”アルクル”メティエ”クリア”といいます」

『以後、お見知り置きを、キレイなお姉さんっ

』と、そう最後に付け加えて。

そのヒトは、屈託の無い笑みを浮かべるのだった。

\*\*\*\*\*

一方その頃、地平線の向こう側まで荒野が続く未開の大地にて。

昨今、世間様を騒がせている大怪鳥ドスイヤンクックは、かつて無い強敵を前に打ち震えていた。

“恐怖”、ではない。

それは、“歓喜”だった。

久しく忘れていた、“強敵”を前にした際にのみ感じられる臨場感。

この世に現存する大多数の生物に対する認識が既に“捕食対象”へと成り下がっていた大怪鳥にとって、“そいつ”は退屈な日々にメリハリを付ける最高の調味料。

否、“好敵手”に相応しい障害であると意識させられる様な“漢”だったのだ。

その漢は、色素が抜け落ちた白髪と立派な口髭を生やしており、黒縁の老眼鏡を掛けている。

身に纏うのは、清潔感溢れる真っ白なタキシード。

手に持つ得物は、たった一振りの黒いステッキ。

その黒いステッキを、徐に構え。

「  
我らはあ狩りの代理人、ファーストフードの布教先行  
者あ  
」

それから漢は、逆光に老眼鏡を鋭く輝かせながら、高らかに宣言していく。

「我らの使命はあ、我が狩りを邪魔する愚う者あを、その肉の最後の一片まあでも剥ぎ取ることあ  
」

もはや“生物”のカテゴリーから外して然るべき強大な威圧感を発しながら、続く言葉を怪物は紡いでいく。

そして。

「  
アメン  
amen” ツツ!!!!!!!!!!!!!!」

“最強”にして“最凶”の老ハンターが言い放った最後の一言を皮切りに。

一匹対一人による“戦争”が、誰に知られる事もなく始まったのだった。

UNU

【目撃情報その07：錬金術師と大人の事情】それと序でに世界最終戦争（ハルマ

ボクは嬉しくなると、つい犯っちゃうんだ b

y・謎の道化師

【目撃情報その07：錬金術師と大人の事情】それと序でに世界最  
終戦争【<sup>ゲドン</sup> <sup>ハルマ</sup>】

稀代の錬金術師“アンフェルネス”アルクル”メ  
テイエ”クリア”。

性別・実年齢ともに不詳の、説には数千年にも渡る悠久の時を  
生き続けているともいわれている、現存する“本物”の錬金術師の  
中に於いて最古参の一人に位置する大賢者。

現在、一般に流通している既存の錬金術及び、その劣化版である  
調査技術の基礎理論の根幹を組み上げた天才であり、昨今では新型  
の“ボウガン”や“竜撃砲”の新機構の設計も手掛けているらしい  
発明家でもある。

彼（彼女？）を“師”と仰ぐ学者・技術者は数知れず  
しかし、当の本人は三日と同じ場所に留まる事が無いとまで言われ

る程の重度の放浪癖持ちであり、その目撃情報は“古龍種以上”に少ないのだという。

そんな、知る人ぞ知る有名人が、今、とある街の某・ギルドの応接室にて会談していた。

「では、我がギルドが誇る最優にして最強のギルドナイトである此方の“ネイ”レンクスを、あなたの護衛に任命させて頂きます」

そう話を締め括るのは、このギルドのマスターを勤める、薄紫色を基調とした礼装に身を包んだ貴婦人。砂金を散りばめたかの様にキラキラと輝く金髪を肩辺りまで伸ばした、外見年齢・二十代前半ほどの大人の女性。

「ええ、わかりました。それでは“ネイさん”、これから暫くの間、よろしくお願いしますね」

対し、にこやかに言葉を返す、大きな三つ編みに結わえたプラチナブロンドが眩しい性別不詳の美人さん。錬金術師クリア。

「ハハハ、いえ、此方こそ」

そして、特徴的な蒼白の長髪を持つ女傑・ネイ。レンクスは、先の会談による決定に、ただ愛想笑いで応じることし

か出来なかった。

\*\*\*\*\*

「あれで良かったのでありますか、お嬢様？」

錬金術師クリアとネイレンクスが退室し、ひとり応接室に取り残されるカタチになったギルドマスターである金髪の貴婦人に、少女の物と思われる“声”が話し掛ける。

その姿は、決して狭くはないが広くもない応接室の何処にも見えない。

「あれ」というのは、“ネイ”のことかな？」

しかし、金髪の貴婦人は、“声”の主が姿を見せない事を別段気にした様子も無く、寧ろ、くだけた口調で、それが当然であるかの様に受け答える。

「はい、あの“ネイレンクス”は、このギルドにとって欠かせない“戦力”の一つであります。それを一個人の護衛任務に当てるのは、流石に如何なものかと」

「ん〜、でも、クリアさんには個人的に“借り”があるからね。こういうカタチでも贖目にしておかないと、此方の心象に悪影響が出ちゃうし」

飯にそうなったら、いざという時に此方の“お願いごと”を聞き入れて貰えなくなっちゃうからね　と、貴婦人は言う。

「ですが」　それにね？」　む

そして、まだ納得出来ていない様子の“声”に対し、割り込む様に付け足す。

「あの子は、ほら、なんていうか　“あれ”、だから」

但し、言葉を濁して。。

「　ああ、なるほど」

しかし、それだけで“得心がいった”という様に“声”は呟いた。

「しかし、“いいひと”が居ないのは、お嬢様も同じでは？」

だけに留まらず、“余計な一言”まで付け足しやがった。

笑顔のまま硬直する貴婦人。











「 はあああああッッ!!!!!!!!!!!!!!」

咆哮と共に、老紳士の筋肉が膨れ上がる。

大怪鳥の巨体が、若干ながらも浮き上がった。

気合いで強引に、拮抗していた力比べに終止符を打ったのだ。

《クエツ!!!!?》

これには流石に、大怪鳥も度肝を抜かれた。

大怪鳥ドスイヤンクツクの全高は24メートル強もあり、全長に至っては91メートルもあるのだ。

その総重量は、ぶっちゃけ“ガダム”より重い。

それを持ち上げてみせた老紳士は、もう完璧に人間を辞めている  
と言えよう、石仮面で人間を辞めた某・吸血鬼もビックリである。

「 ぶ る あ あ あ あ あッッ!!!!!!!!!!!!!!」

更に、持ち上げるだけに留まらず、老紳士は大怪鳥を極短距離ながらも投げつけてみせた。

《クワァッ!!!!!!!!!!》

投げつけられた大怪鳥は、その勢いを利用して後方に羽ばたき、老紳士から距離を取った。

戦いは仕切り直しとなり、沈黙が訪れる。

「くくくくくくくく　っ、まさか、この私と対等以上に渡り合える強う者が、まあだ、この世に居たとはなあ」

肩を震わせて、くつくつと笑う老紳士。

掛けた眼鏡が逆光を反射していて“目の色”までは伺えないものの、その口元は盛大な弧を描いていた。

「　　さあ、第二ラウンドと行こうか　！！　貴様を仕留めて、油でカラッと揚げて　「あはっ　　ぬうッ!？」」

《クエ　!??》

吠える老紳士に、誰かの“声”が割り込んできた。

大怪鳥と老紳士の視線が、ある一点な集中する。

二者の丁度ド真ん中に位置する荒れ果てた大地に、“そいつ”は一人佇んでいた。

赤と白からなる縞模様の服の上から着込んだ黄色いツナギと、赤く大きな靴、赤いアフロに、鼻の先と口の周りを真っ赤な鮮血色に



大怪鳥と老紳士に対し、ビシッと指差して、道化師は宣戦布告をした。

ここに、世界最大規模にして三つどもえの大戦争が繰り広げられる事となった。

つづく



【目撃情報その08：大先生VS大佐VS教祖様】

いやはや、驚かされましたよ、後から人伝に聞いて知ったんですが、“あれ”も奴の仕業だったんですね。by  
眼鏡でロン毛で若作りな匿名希望の中年男性

【目撃情報その08：大先生VS大佐VS教祖様】

地平線の向こう側まで焦土と化した未開の大地に  
て。

その三つどもえの“大戦争”は、未だ勢いを衰えさせる事なく続  
けられていた。

《クワッ！！！！》

「居合い・霧払い（ミストファイナー）”ッ！！！！”」

「自然に体が動いちゃうんだ」

三者三様、大暴れするバケモノ（笑）たち。

大怪鳥ドスイヤンクックが、その飛行能力を活かして、上空から炎のプレスと闇色のレーザー光線で地上を薙払い。

白いタキシード姿の老紳士が、仕込み刀である黒い杖をブンブン振り回しながら、もはや瞬間移動じみた速さで縦横無尽に駆け抜け。

赤いアフロヘアの道化師が、錬金術で錬成したハンバーガーやらポテトを音速の三倍くらいの速度で投擲しつつ、ちょこまかと逃げ回っている。

この辺り一帯には、もはや壊れる物さえ無くなってしまったというのに、それでも彼らは争う事を止めようとはしなかった。

「こっちにおいでよ、あ・そ・ぼっ」

「余裕かましてんじゃねええッ!!!!!!」

ドゴオオオオオンッ!!!!!!

「アラーーーーッ!!!!!!?」

道化師が老紳士に殴り飛ばされ、そのまま雲を突き抜けて虚空の彼方に消え去ったかと思えば。



ひとつ一つが同量の隕石の衝突に匹敵するハンバーガーの弾幕に、さしもの大怪鳥も少なからずダメージを負わされていく。

《クエエツ、エ、クツ  
クワアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアア

ツッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

が、大怪鳥が何時までも受け身に回っている筈もなく、その咆哮より発せられる衝撃波を以て、ハンバーガーの弾幕を遮断

否、弾幕ごと道化師を吹き飛ばしてみせた。

「アラーーーーーッ!!!!!!!!!!?」

衝撃波に煽られ、再び空高く打ち上げられる道化師。

が、今回ばかりは流石に雲を突き抜ける様な高さまで吹き飛ばされる事はなく、そのまま大怪鳥より数百メートル離れた地面にクルクル回転しながらシヨタッと着地。

「ジェノサイドプレイヤー磁重退碎怒無礼婆”ッ!!!!!!!!!!”」

ボッ!!!!!!!!!!

「アラーーーーーッ!!!!!!!!!!?」



「ぬっ！？」

「ほっ」

大怪鳥が“力”を溜めようとしている事に気付いた二人が、それを阻止しようとはほぼ同時に、一直線に駆け出す。

「ハンバーガー四個分くらいかなっ」

言いながら、道化師は自分の懐から“M”と印された特製の閃光玉と音爆弾を取り出した。

これらを用いて大怪鳥の気を逸らし、ほんの僅かでも“力”のチャージを阻害しようと考えたのだ。

が、しかし、それが“過ち”であったのだと、彼は直ぐさま思い知らされる事となる。

そう 彼は、老紳士の前で“やってはいけないこと”を、犯ってしまったのだ。

“キュピーン”という擬音を伴って、老紳士の眼鏡が瞬く。

同時に、大怪鳥の“力”のチャージが完了した。



響き渡る断末魔。

溢れかえる光の渦に、吹き荒ぶ闇色の衝撃波。

爆ぜる大地より撒き上がった大量の粉塵は空高く舞い上がり、程なくして濛々と立ち上るキノコ雲へと、そのカタチを変えていった。

こうして、人知れず行われた三つどもえの大戦争は、一応の閉幕と相成ったのだった。

\*\*\*\*\*

それは、バケモノ（笑）三匹が大暴れした日より約一週間後の事だった。

某日、ある筋から特別に承った任務を果たそうとしていた彼

深緑色の軍服らしき物を着込んだ眼鏡でロン毛で外見年齢二十代後半・実年齢三十代後半の中年男性は、その“惨状”を目の当たりにして呆然としていた。

「何だ、“これ”は？」

誰に問うでもないのに、思わずそう呟く。



先週まで、急な異常気象の影響で海が荒れに荒れて船が出せず、そのお陰で随分と足止めを喰ってしまっていたものの、それでも何とか“現地”まで辿り着いた訳であるが。

その変わり果てた景観を前にして、思わず息を飲む。

そこには、“何も無かった”。

今現在、彼が立つ場所から見渡す限りが平坦な焦土と化しており、草木どころか以前までは其処いらに点在していた大小様々な岩山も、当たり前の様に転がっていた石ころ一つ見当たらない。

そして、もう一つ気になる点が、自分の直ぐ足下にあった。

「一体、何があったら“こんな状態”になるんでしょうねえ」

自分の足下を靴の踵かかとで“コン、コン”と叩きながら言う。

彼の足下                      そこには、溶けて硝子状に固まった地面があった。

（この辺りの鉱物は“石灰岩”と“石英”が豊富でしたからねえ、それを“炎”で炙られたなら、溶けて硝子状に固まってしまうのは頷けますが、しかし                      ）

それなら、見渡す限りの景観全てを融解させられるだけの火力の  
“出どころ”は、一体何処なのか                      それが分からなかった。

（この辺りに“活火山”はありませんし、かと言って“古龍種”で  
も流石に此処までの火力が出せるとは到底思えませんし、本当に  
何があつたら、こんな有り様になるんでしょうねえ）

やれやれ、と溜め息を尽きながら、一人ごちる中年<sup>おじさん</sup>。

彼は、まだ知らない。

この“惨状”が、一匹のイヤンクツク(?)と、二人の人間(笑)  
による戦いの“副産物”でしかないという事を。

そして                      割と近い将来、自分が“奴ら”の戦いに巻き込  
まれてしまう事を。

つづく

【目撃情報その?…さいきょー】

”ねっ！　by・水色の髪の見習いハンター  
やっぱり、あのイヤンクックつたら“さいきょー”

【目撃情報その?…さいきょー】

それは、某・眼鏡でロン毛で若作りな匿名希望の  
中年男性が海に船を出す前の時系列にて起きた、余りにも一方的で  
短い闘争であった。

ある日、どこか遠くで火山でも噴火したかの様な凄まじい炸裂音  
が響き渡ってきた直後、“そいつ”は、その姿を現した。

》

ツツツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

天を裂かんばかりに轟く咆哮。

全長70メートルを越す巨体の割に頭部は小さく、その体の約半分を長い首と尾が占めている。

体型は竜脚類型の四足歩行で、発達した赤い甲殻を持ち、鼻先に一本の細く鋭い角を有する巨大龍。

その名も、“老山龍ラオシャンロン”。

その巨体故に歩行するだけで大地を揺るがし、徘徊する進路上にある物すべてを崩落させてしまう事から、時に“天災”とも称される超大型の怪物である。

「何だつて、こんな時期に老山龍がッ」

とある街の直ぐ側に突如として出現した老山龍を見て、そう言ったのは、一体どこの誰だつたらうか。

しかし彼の言う通り、この老山龍の襲来は、街に住まう誰もが予期していなかった非常事態であった。

つい先月、この街は“砦蟹”や“鋼龍”といった強力な大型モンスターによる襲撃を受けたばかりである。

それが一ヶ月程度で、またしても大型モンスターから襲撃されては堪ったものではない。

大型モンスターを討伐ないし撃退するには、人件費その他諸々、  
兎に角“お金”が掛かるのだ。

本当に勘弁して貰いたい、街の財政問題的な意味で。

《

ツツ！！！！！！！！！

！

しかも、相当興奮しているのか、従来の老山龍より遥かに高い凶  
暴性を発揮している、殊更に質たちが悪い。

動きこそ鈍重であるが、近付こつものなら、人間など、あっさり  
と虫けらの様に踏み潰されてしまっただろう。

故に、この老山龍に対する攻撃手段は、現時点に  
於いて専ら遠方からの砲撃・狙撃に限られていた。

「撃ち方、用意

」

ギルドナイトの赤い制服を纏った指揮官の青年の指示に従い、幾  
人も衛兵たちが各々に大砲やバリスタを構え、高台から老山龍に  
狙いを定める。

そして。



「ッ!? 足場が崩れるぞっ、総員退避——ッ!!!!!!!!!!」

大砲やバリスタで一方的に老山龍を狙い撃つ事が出来る高台に陣取っていた衛兵やハンターたちの一部隊に対し、指揮官が叫んだ

その直後。

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!!!!!!!!! と、地響きが鳴り、崖が末端部分から半ば迄もがゴッソリと崩落した。

》

ッッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

!」

まるで勝ち誇るかの様に、雄叫びを上げる老山龍。

実際、今の崩落に巻き込まれた大砲やバリスタの数は決して少なくはなく、開戦直後から間も無くして、たったの一撃で事実上の戦力を三割近く削られてしまった事を考えると相当な痛手である。

それでも、指揮官の退避命令が迅速だった為、人的被害が皆無だった点は不幸中の幸いと言えるかも知れないが。

「 マズいなッ」

老山龍の耐久力が想定していた物よりずっと高く、そして何よりもその進行速度が速いのだ。

このまま進行を許せば、あと数分もしない内に街まで到達してしまっただろう。

(くっ、 “あの人” が不在だからこそ、踏ん張らなければならないというのにッ)

思い浮かべるのは、つい先日、要人の長期護衛任務に就いた、蒼白の長い髪が印象的な最強のギルドナイト。

その美貌と人当たりの良い性格から、ギルドの若い男性職員たちほぼ全員の憧れの的であり、様々な要因によって誰も手が出せない高嶺の花。

『俺、今度デカイ手柄を立てたら、彼女に告白するんだ』。

むさ苦しい野郎だらけの酒の席で、そう豪語したのは何時の事だったろうか。

街の危機に不謹慎と思いつつ、手柄を立てるチャンスだと意気込んでいたのだが。

「 本当に、世界は何時だって “こんな筈じゃなかった事” ばかりだよ 」

以前、妻子持ちの先輩がボヤいていた台詞に、今更ながら同意す



る。

最悪、街が一夜にして壊滅しかねない状況なのだ。

もはや、手柄がどうか言っている場合ではない。

では、一体どうすれば今の危機的状況を打破する事が出来るのか  
そう思案していた最中。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!!!!!!!!!

と、文字通り大地を揺るがす様な 否、実際に揺るがす  
程の轟音が、老山龍を中心に周囲一帯に木霊した。

\*\*\*\*\*

その光景を目の当たりにしていた誰もが、泡を食っていた。

まあ、老山龍と自分たちとの間に位置する大地が目の前で“大  
爆発”したとあれば、誰だって狼狽するだろう。

先程まで、あれほど暴れていた筈の老山龍でさえ、今は沈黙して  
いるくらいなのだから。

「おい、何だ“あれ”はッ」

未だに濛々と立ち上る土煙  
を指差して、誰かが呟いた。

その中で蠢く“巨大な影”

そんな、大人たちの誰もが慌てふためいている中。

「　　ねえ、 “あれ” って、もしかして」

大砲の“砲弾”やバリスタの“矢”の運搬等の後方支援を請け負っていた見習いの衛兵やハンターたち、その一部隊に紛れていた幼い少女　　見習いハンターに支給される鞣し革の防具を着込んだ、サイドポニーにした鮮やかな緑色の髪を持つ少女が呟いた。

「うんっ、間違いない、 “あれは”」

対し、緑色の髪の少女と同じ防具を纏っている、水色の髪をセミショートにした少女が応える。

土煙の向こう側に映された“巨大な影”に見受けられる特徴から、その正体を少女二人は察していた。

それは、二人の少女がそれぞれ絶対絶命の危機に陥った際に颯爽（笑）と現れた、二人にとって命の恩人ならぬ“竜”とでも言うべき存在。



今の彼（？）が“激昂している”という事を、これでもかと言わんばかりに主張していた。

ついでに、よく観察してみると全身が煤けており、先刻まで相当激しい戦いを繰り広げていただろう事も伺えた。

因みに、これは完璧な余談であるが、今回、彼の大先生がこの場に居合わせたのは、某・老紳士との必殺技の撃ち合いの果てに引き起こされた大爆発によって“偶然”ここまで吹き飛ばされて来ただけである。

あくまでも、“偶然”である。

大事なことなので、二回表記させて頂きました。

《 ツ、

ッ！！！！！》

大怪鳥の咆哮に数瞬ほど身を竦ませていた老山龍が、硬直状態から解放されるや否や、早々に攻撃を仕掛けた。

強靱な顎から為る“噛み付き”だ、食い付かれれば喉笛どころか骨ごと持って行かれかねないだろう。

が、その攻撃が通る事は、ついぞなかった。

何故なら。

《クワアアツ！！！！》

巨槌の如く振るわれた大怪鳥の嘴くちばしによって、攻撃ごと叩きふせられる事となったからだ。

ドゴスツ！！！！ と、鈍い音が重々しく響き。

その次の瞬間には、ズドオオオオオンツ！！！！ という破砕音を轟かせて、老山龍の頭部が地面にめり込んでいた。

《ツ、 《クワアアツ！！》~~~~ツ！！？》

頭蓋をかち割られた様な衝撃に、堪らず呻き声を洩らす老山龍。

そこへ間髪入れずに、老山龍の頭を踏みつける大怪鳥、そして。

《クワツ！！！！》

キュバンツ！！！！ と響き渡る、大怪鳥特有のプレスによる甲高い発射音。

大怪鳥による“トドメ”の一撃が、老山龍に容赦なく叩き込まれた。

それは、大怪鳥が攻勢に出てから僅か数秒の出来事。

大怪鳥の嘴くちばしからゼロ距離で放たれた闇色のレーザー光線によって首を撃ち抜かれた老山龍は、断末魔の悲鳴を上げる間もなく、呆気なく絶命させられたのだった。

つづく

【目撃情報その10：大乱闘、フル パニック!?】

“奴”は相変わらず規格外だな、まあ、そのおかげで、あの崩竜装備のねーちゃんも助かったんだがよ。by.とある全身青タイトの槍使い

【目撃情報その10：大乱闘、フル パニック!?】

その日、青いボディーアーマーと背に担いだ“竜騎槍ゲイボルグG”と呼ばれる巨槍が印象的な彼は、突如として発生した極大の暴風雨やら局地的な地震 某・大怪鳥と某・老紳士による互いの最大火力のぶつけ合いによって誘発された異常気象・天変地異の影響により雪山にて大量発生した大型モンスター討伐部隊の助っ人として駆り出されていた。

そのモンスターの名を、“フルフル”という。

色素が無いブヨブヨした表皮に覆われた全長8メートル強の体軀に、皮膜状の翼と凶太い後肢を有し、暗所を住処とする故に目も耳も退化して無く、その代わりに嗅覚が発達した飛竜である。

因みに、今回大量発生したフルフルは何れも小さな個体ばかりで、その全高は一般的な成人男性より頭一つ分ほど小さいが、しかし。

《 〉、 〉ツ！！！！》

《 〉 ツ！！！？》

《 〉 〉〉〉ツ！！！！！》

《 〉 ツ、 ツ！！！！！》

一体何処から湧いて出て来るのか、兎に角“数”が多い。

一匹一匹の耐久力が小型の烏竜種より遥かに高く、しかも厄介な事に放電能力を持っており、強力な電撃のプレス攻撃まで放つてくる為、殊更に質たちが悪い。

しかし、この大量発生したフルフル達が成長し、そのまま餌を求めて下山して来よう物なら、周辺の生態系が一気に崩壊しかねないのだ。

まさか放置する訳にもいかず、だからこその“討伐部隊”であるのだが。

「 ちっ、次から次へと、オラアツ！！！！！」

《 〉 ツ！！！！！？》



ぼやきながらも、渾身の刺突をフルフルの急所  
“頭部”へ向けて放つ。

放たれた必殺の刺突は寸分違わずフルフルの頭部を刺し穿ち、見事一撃の下に絶命させてみせた。

今、この場にいる討伐部隊は、自分を含めてたったの“四人”しかない。

当初は、正規の部隊員と助っ人の狩人・傭兵等を合わせて五十人近くもいた討伐部隊であるが、雪山の中部に足を踏み入れた次の瞬間、数十匹もの群れを成したフルフルたちが放ったプレス攻撃の雨に晒され、瞬く間に振り返り討ちにあつてしまったのだ。

結構な数の重傷者を出してしまった為、部隊の態勢を整えるべく一時撤退を試みた訳であるが、此処で障害となるのがフルフルたちである。

奴らは今、雪山にいる獲物の殆どを狩り尽くしてしまったのか、相当腹を空かせているらしい。

これを抑え込むには、誰かが“囿役”しんがりとして部隊の殿を勤めなければならぬ。

その囿役を駆って出たのが、青いボディーマーを纏った彼を含む、“四人”の勇士達である。

まあ、尤も。



無数のフルフルに囲まれて尚、その手に構えた燃え盛る炎の双剣  
この日の為に特別に訓練所から借りてきたらしい　　を舞  
い踊るかの様に振るう、ショートボブにした水色の髪を持つ少女。

と、そんな彼女の致命的な隙をカバーしつつ、高  
所からヘビーボウガンで一方的に火炎弾をバラまいていくトリガー  
ハッピー　もとい、緑色の髪をサイドポニーにした少女。

両者の実力は既に、一流のベテランハンターのそれと比べても何  
ら見劣りしないだろう。

（つてか嬢ちゃんよ、フルフル相手に笑いながら“小さい”とか  
叫ぶのは、いい加減に止して欲しいんだが）

“フルフル”　　伝承ではソロモン72柱の魔神の内の一  
柱であり、雷を操り、男性器の象徴ともされている悪魔である。

“男性器の象徴”ともされている悪魔である。

要点なので、二回言いました。

さて、この悪魔フルフル自身は、鹿っぽい姿で描かれているのだ  
が　　彼の悪魔が名前の由来と思われる飛竜フルフルの外見  
はというと、まるで狙い澄ましたかの様に、野郎どもに付いてる  
“アレ”に良く似ているのだ。

自分も新米ハンターだった頃は、その外見から“フル　　（笑）

”等と称して、よくバカ笑いしていたのだが。

「キヤハハハハハハハハハハ、どいつもこいつも、ちっちゃくて、かわい〜いっ  
でもワタシの“大切な家族”に手を出す奴  
は、みんな 死 ン ジ ャ エ ー」

結構な美少女に、ああも『小さい、小さい』と連呼されると、  
こっ、何というか、男心にズキズキと痛い。

っっていうか何あの娘、マジでこわいんだけど。

「何か、帰りたくなってきたな」

多分あいつらだけで、この雪山にいる全てのフルフルを殲滅出来るだろう。

そう思つと、自分のアイデンティティを疑いたくなってくる。

「俺、何しに此処へ来たんだっけ？」

などと考え始めた、その矢先。

“奴”は、その咆哮と共にやって来た。

《

ツツツツ!!!

!!!!!!!

嫌に耳に響く特徴的な、しかし、これまでに耳にしてきた物とは桁違いに大音量の咆哮。

それは、今、自分たちが居る場所より遙か上の、空の彼方から轟いてきた。

\*\*\*\*\*

“そいつ”を初めて見た者は、誰もが先ず、こう思うことだろう。

“デカイ”と。

実際に、それくらい奴はデカかった。

あの巨体で空を飛べるといふ事実には驚きであるが、それ以上に、あの規格外の体格には驚嘆させられた。

「どつなつてやがるんだよ、この世界は」

隣を見れば、全身タイツみたいな無駄にボディーラインを強調す

る青いボディーアーマーに身を包んだランス使いの青年が、空の向こうから此方に向かって飛んでくる“奴”を見ながら硬直していた。更に、先程まであれほど暴れ回っていたフルフルたちが、我先に逃げ惑う様に何処かへ飛んで行っている。

おそらく、これからこの場で繰り広げられるだろう“戦い”に巻き込まれない様にと避難しているのだろう。

確かに、あの図体で暴れられようものなら、周囲に齎す被害は半端な物ではない事くらい桃毛獣コンガにだって分かる、巻き込まれたら、大抵の生物は確実に死ねるだろう。

彼らの判断は、とても正しい。

「あなた達は、今すぐ此処から離れなさい  
手は、私が勤めます！」 “あれ”の相

血の繋がらない けれども愛しい我が子たちと。

それと、あの討伐部隊のメンバーの中から真まこと先に自ら殿を勤めると打って出た勇敢な青年に避難するよう指示を出しながら。

私は一歩、前へ出た。

「おいおい、あのチビっ子どもを下げるのは分かるが、まさか俺に『ガキのお守りをしろ』って言うんじゃないやねえだろうな！？」

「あの巨体が相手では、此方の防御は意味を為さないでしょう、それは貴方の“盾”も例外ではない。故に、より機動力に優れている私が“あれ”の相手をするのが定石です」

この青年の実力は、討伐部隊の参加の中でも群を抜いている。

彼なら単独でも、あの巨大なフルフルに対抗出来るだろう。

しかし。

「貴方には、私の子供たちを安全圏まで誘導して欲しい  
お願い、出来ませんか？」

避難している最中、万一にも“流れ弾”があの子たちに向かっていった場合、彼が持つ“盾”なら或いは防げるかも知れないのだ。

いつも通り機動力を重視して“盾”を装備して来なかった自分の浅はかさが、今は非常に悔やまれる。

「ちつ、わかったよ                      ただし、あいつらをキャンプ場まで送り届けたら俺も直ぐ此処に引き返して来るからな、それまでくたばるんじゃないぞ？」

軽く舌打ちし、そっぽを向きながらも、何だかんだ言って彼は私の提案を了承してくれた。

『やさしい人だな』と、そう思った。

口調は粗野であるが、言葉の端々から彼が本気で私を心配してくれているだろう事が良く分かる。

何やら『上目づかいは反則』等と、ボソボソ独り言を呟いているのは、よくわからないが。

「っと、そう言えば、まだあんたの名を聞いてなかったな。何ていうんだ？」

踵かかとを返して子供たちの下へ向かおうとするも、彼は直ぐに此方へ向き直つて、そう聞いてきた。

そう言えば、彼は討伐部隊結成時に皆の前で盛大に名乗っていたが、此方の方はまだ名乗っていなかった事に、今更ながらも思い至る。

そんな当たり前の社交辞令さえ忘れていた自分の迂闊さと、そんな些細な事をこんな緊急時にわざわざ聞いてきた彼の意外な誠実さに、思わず苦笑した。

「申し訳ありません、そう言えば、まだ名乗っていませんでしたね」

被っていた兜を外して。

それから零れた亜麻色の それでいて若干のウェーブが掛かった





か、普通のフルフルと比較すると、ちょうど三倍ほどもある巨体である。

（まあ、あの“イヤンクック”を見た後じゃあ、かなり見劣りしますけどね）

思い浮かべるのは、何かと大恩ある大怪鳥。

巷では“ドスイヤンクック”と呼ばれているらしいあの巨大イヤンクックは、ここ最近の二度に渡って“街”を救った功績から昨今では“大先生”などと呼ばれ、多くの人々に親しまれているらしい。

「 受けた“恩”は、返さないかね」

あの巨大イヤンクックには、まだ“お礼”すら言っていないのだ。

せめて、それまでは生きていたい。

「 ううん、違うかな」

嘗て病に倒れ伏していた自分は、偶然とはいえ大怪鳥が持つてきた古龍種・霞龍の亡骸から剥ぎ取った素材の売上によって治療費を得て救われた。

折角拾った命なのだ、どうせならもつと“欲張りしたい”。

そう 今も孤児院で私たちの帰りを待っているだろう愛しい我が子たちが皆、自分の元から巣立っていく晴れ姿を見届ける、その日まで  
絶対に死ねない ！！

「その為にも、貴方には此処で倒れて頂く」

視野を狭めてしまう兜を投げ捨て、動きの妨げとなる鎧を脱ぎ捨てながら。

「 覚悟はいいか？ フルフルよ ツ！！！！！！」

己の相棒である、崩竜の素材を用いて作られた真っ白なガンランズ  
“崩銃槍パシカムルバス”を構えて。

あの巨大なフルフルに向かって、私は勢い良く駆け出していった。

\*\*\*\*\*

とある雪山の某所にて、青いボディーアーマーに身を包んだ青年は一人、必死の形相で走り続けていた。

新米ハンターである少女二人をキャンプ場まで送り届け、それが

らキャンプ場に待機していた討伐部隊の連中から無理矢理譲り受けてきた“秘薬”を懐にしまい込み、“強壮薬”を一気飲みして今に至る。

強壮薬の恩恵によって、暫くの間　　と言っても実際には5分にも満たない極短い間であるが　　は疲れ知らずの体を得たとはいえ、こつこつ彼が必死なのは“訳”があつた。

(　　)　　やっぱり“嫌な予感”がしやがるぜ、畜生が　　ツ)

これ迄に培ってきた“狩人ハンターの感”と“戦士の感”、そして“漢オトコの感”のそれら全てが、脳髓を抉り飛ばしでもするかのような警鐘を、今も苛烈に打ち鳴らし続けているのだ。

こつこつといった時は、決まって“ろくなこと”が起きやしない。

特に“女”関係の問題は破滅的で、その結末は苦い記憶ばかりが鮮烈に刻まれている。

(クソツ、もう結構な時間が過ぎてやがるな　　)

走りながら彼が思い浮かべるのは、“彼女”が別れ際に見せたあの微笑。

“あれ”は、嘗て自分が見てきた女達の何れと比べても何ら遜色ない、いい笑顔だった。

そして、“だからこそ”眩しくもあつた。

ああいった顔が出来る女は皆、絶対的に“いい女”なのだ、これこそ、生涯を共にする伴侶に欲しいと心から切望する程に。

だが、よりもよって“そういう”女に限り、皆、自分の前から消えていく。

まだ手に入れてすらいらないと言うのに　　しかし、“今度こそは手放したくなかった。”

(　あの嬢ちゃんたちとも“約束”しちまったからなあ)

ショートボブにした特徴的な水色の髪を持つ少女からは涙目で縋り付かれ、『絶対に助けて』と懇願された。

緑色の長い髪をサイドポニーにした黒い笑みを浮かべていた少女からは、『お母さんに何かあつたら殺つちやいます、それと、お母さんに“ナニか”したら“もぎます”からね』と“お話”された。

(あれ、二つ目の方、何かおかしくね?)

“何か”というより、確実におかしい、あれでは“お話”ではなく、どう考えても“脅迫”だろう。

しかも、あの目は間違いなく“本気”だった　瞳孔が全力全壊で全開していたし。

（ ） 　　「 って言うか、『もぎます』って一体何を“もぐ”つもりなんだあ!？」

『もちろん、“ナニ”をですよっ』

「うゝおゝおいッ!？」

ふと脳裏をよぎった可愛らしくも怖ろしい少女の声に戦慄し、思わず叫ぶ。

背筋に氷柱でも突き立てられたかのような悪寒が走り、冷や汗が一気に吹き出した。

「 　　ちっ、無事でいてくれよ、“アイラ”さんよッ!！」

件の“いい女”の安否を気遣いながら、少女たちとの“約束”と脅迫（ ）を胸に、青年はひた走る。

氷雪に覆われた山道は険しく、その先にある目的地はまだ遠い。

\*\*\*\*\*

《 》 ツ、 ツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

色素が無いブヨブヨした表皮に覆われた体躯を持つ醜悪な竜

全身26メートルという、従来のフルフルと比較して実に三倍もの巨体を誇るこの個体は、その口腔に集めた青白い稲光を咆哮と共に一気に解き放った。

無秩序にまき散らされる電撃の雨 バチバチと地面に降

り注ぐ“それ”は、触れたが最後、人体程度なら一瞬で消し炭にされてしまうだろう。

「 うあああああああああッ!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!」

そんな危険極まり無い死の雨を掻い潜りつつ、彼女 “  
アイラ”は“メヴァ”は亜麻色の長い髪を振り乱しながら、目の前の巨大フルフルへ渾身の一撃を叩き込むべく縦横無尽に駆け抜ける。

その手に構えるのは、彼女自身の背丈を裕に越す長大な銃槍<sup>ガンランス</sup>。

刺突に合わせて繰り出すのは、銃槍最大にして必殺の一撃  
“竜撃砲”。

その強烈な反動から、本来なら足を止めてからでなければ放つ事の出来ないこの一撃。

それをアイラは、突貫した勢いの一切を削ぐ事無く。

「はらわた  
腑を

」

そのまま、巨大フルフルの“腹”目掛けてガンランスの切っ先を思い切り突き立て。

「ぶちまけるッ！！！！」

全力で、叩き込んだ！！

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ッ！！！！！！！！！！

《

ツツ！！！！？

！！！！？》

山々に木霊する竜撃砲の炸裂音と、巨大フルフルの断末魔の様な怒号。

巨大フルフルの腹部で極大の爆炎が花を咲かせ、その衝撃が大地を揺るがした。

立ち込める粉塵の中から竜撃砲の反動によって後方へと吹き飛ばされ、その勢いを利用して一気に距離を取るアイラ。

それから、これまでに消耗した体力の回復に勤める。



「 はッ はあッ、はあッ、はあッ 」

乱れる呼吸を、アイラは肩を上下させて整える。

目の前では、先程の一撃で転倒したのだろう巨大フルフルが、腹から煙を立ち上らせながら仰向けに倒れて沈黙していた。

通常の個体が相手であれば、今の一撃で確実に仕留められた筈であるが。

「 五臓六腑、全てを吹き飛ばすつもりで叩き込んだのだがな 」

やはり相手は、規格外の巨体を持つ見た目通りの怪物モンスターだったらしい。

見れば、巨大フルフルは腹部の表皮を焼かれた程度のダメージしか受けていない様だ。

おそらくだが、あのブヨブヨした分厚い表皮と皮下脂肪で、竜撃砲の衝撃を吸収したのだろう。

「 バケモノめッ 」

吐き捨てる様に呟く。

渾身の刺突と竜撃砲 この二つの破壊力を強引に掛け合わせた今の自分にとつての最大火力とも言える必殺の一撃を以てしても、あの巨大フルフルにとつて致命打には至らなかつた。

もはや自分には、この怪物を倒す手段は無いと言つても過言ではない。

《 》  
ツ

のそりと身じろぎをし、それからゆっくりと体を起き上がらせる巨大フルフル。

吐き出す息は荒く、そして白い。

《

ツッ!!!!!!!!!!!!!!

次の瞬間、巨大フルフルは衝撃波を伴つた大音量の雄叫びを上げた。

どうやら厄介な事に、今の竜撃砲によつて受けたダメージで、かなり興奮しているらしい。

よく見ると、体表がうつすらと青白く発光している点から、帯電している事が分かる。

(今の奴に触れたら、その時点で“終わり”だな)

あの巨体に備わっている発電能力は絶大だ。

その威力は推して知るべし、多分に並みの大型モンスターくらいなら一撃で昏倒させられる威力があると思われる。

当然、人間が食らえば一発でアウトだ。

“竜撃砲”の反動で、此方の得物は暫く使い物にならない事を加味して考えると、一旦どこかに身を隠した方が良さそうだ。

そう思い至り、その考えを実行に移そうとした  
その次の瞬間。

》

ツツツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

あの巨大フルフルの“首”が、此方に向かって凄まじい勢いで信じられないくらい長く伸びてきた。

「　　ツ！！！!?」

声を上げる余裕すら無かった。

気付いた時には、既に自分の体が空高く舞っていたのだ。

食いつかれなかったのは、手に持っていたガンランスを、とっさ

に盾代わりに前方へ構えたからだろうか。

しかし、それで、あの頭部だけでもかなり大きい奴の攻撃を受け止められる筈もなく、そのまま打ち上げられてしまったのだ。

（我ながら、なんて呆気ない）

下を見れば、あの巨大フルフルが、その鋭利な牙が無秩序に並ぶ口を大きく開けて待ち構えていた。

重力に従って落ちてきたところを、そのまま捕食するつもりなのだろう。

「ごめんね、みんな」

今頃はキャンプ場に非難し終えたであろう娘二人と。

そして、集落の孤児院で今も自分の帰りを待っているだろう血の繋がらない愛し子たちの可愛らしい笑顔を思い浮かべて。

それから程なくして、私の意識はブラックアウトした。

意識が途絶える刹那に、割と直ぐ側から聞こえてきた『クワアアッ！！！！』という鳴き声に、何とも言えない親近感を覚えながら。

\*\*\*\*\*

青いボディーアーマーの青年は、その光景を目の当たりにしてから暫くの間、全身を硬直させて呆然としていた。

それまで“常識”という物に凝り固まっていた思考では、その余りにも予想の斜め上をすっ飛んで逝く急展開に付いていけなかったのだ。

先ず最初に彼が目にしたのは、あの巨大フルフルの首を勢い良く伸ばす攻撃によって空高く打ち上げられて宙を舞う、亜麻色の長い髪が印象的な女性 “アイラ・メヴァ” の姿。

そのまま自然落下していく彼女が、下で待ち構えている巨大フルフルの餌食になるだろう光景を、己はまじまじと見せ付けられるのか と、そう思った矢先に、“奴” が現れた。

鮮やかな桃色の甲殻に覆われた、全長100メートル近い体躯。

皮膜状の雄大な両翼に、頭部の大半を占める巨大な嘴<sup>くちばし</sup>。

そして、襟巻の様に広げられた特徴的な形をした耳。

そう、昨今、世間様を騒がせている噂の大怪鳥、“ドスイヤンクック”である。



雪山に響き渡る、大怪鳥の鳴き声。

それに呼応するかの様に、何か“闇色のオーラ”が大怪鳥の全身からジェット噴射の様に勢い良く吹き出し始めた。

「は？」

大怪鳥の体から立ち上る“闇色のオーラ”を見て、思わず目を丸くする。

何、“あれ”？

《クワアアアアアアツ！！！！！》

青年が呆然としていた、その最中、大怪鳥が叫びながら繰り出したのは、それはもう見事な“回し蹴り”だった。

その回し蹴りは、巨大フルフルの頭部をズドンツ！！！！と打ち抜き、そのまま、あの巨体を真横の方向に真っ直ぐ吹き飛ばしてみせた。

《　　ツ、　　ツ！！！！？》

《クワアアツ！！！！！！》

ズドンツ！！！！と、再び響き渡る打撃音。







遂に堪えかねた青年が、思わず叫んだ。

やめて大先生ッ、巨大フルフルのライフは、もうゼロよ（笑）！！

《　　クワアアアアアッ！！！！！！！！！！》

そんな彼の“慟哭（笑）”が聞き届けられたのだろうか。

大怪鳥によつて“フィニッシュ”とでも言わんばかりに繰り出された尻尾による如何にも強烈そうな鞭打が、バチイーンッ！！！！と巨大フルフルの横っ腹に叩き込まれ、悪夢の様な“みだれづき”が漸く終わりを迎えた。

放物線を描いて飛んでいき、そのまま岩壁に叩き付けられる巨大フルフル。

その体を見やれば、つい先程までは青白かった肌が、今では痣やら流血で全身が赤黒く染まっている、まるで、赤い体躯を持つ事で知られている“フルフル亜種”の様だ。

《　　ッ、　　ッ》

弱々しく唸りながら身じろぎする巨大フルフル、幸か不幸か、どうやら死んではいなかった様である。

尤も、素人目に見ても瀕死だろう事が伺い知れる悲惨な状態であるのだが。



その炸裂音は、巨大フルフルの断末魔さえ飲み込みながら山々に轟き、そして 火球の爆心地には、直径100メートル近いクレーターだけが残されていた。

こうして、大怪鳥対巨大フルフルによる“戦い”と称するには語弊があるだろう戦いは、“大怪鳥の完全勝利”という形で決着と相成ったのだった。

つづく

【目撃情報その11：天地乖離す開闢の鳥・前編】

この王である我われに仇あだ為した雑魚どもを掃討した功績として、お前を対等の“狩友”ともと認めよう！ by・某国の金ぴか王

【目撃情報その11：天地乖離す開闢の鳥・前編】

時刻は昼、場所は西部劇等にも出て来そうな片田舎の、ありふれた酒場にて。

「鬱ふさだぜ」

そのカウンター席で真つ昼間から安酒を呷りながら、無駄ムダにピチピチしたタイトの様な青いボディーマーランスを着込んだ槍ラン使いの青年が、力無く突っ伏うつぶしていた。

一方、彼の隣りの席では、全身を金ぴかの鎧よろいで着飾った金髪カミの青年がふんぞり返かえっており、その傍らには、彼の昼食である“麻婆力マハカレー”が半分ほど平ひららげられた状態で置おかれている。

「どうした駄犬、今日は何時にも増して幸が薄そうな顔をしているな  
ああ、さては、また“女”にでもふられたか？」

「ふられてねえッ、『お友だち』から始めましょう』って言われただけだ！！！！」

自分の隣りで縁起でもない事を宣った金ぴかに対し、青いのが必死の剣幕で抗議する。

「まあ、そう言われた奴に限って結局、“お友だち”止まりになるのが世の常よな」

が、それも金ぴかにより、あっさりと切って捨てられた。

「やっぱりテメエもッ、そう思うかよチクショーーーーッ！！！！」

両腕で頭を抱え体を仰け反らせて、溜まらず悲鳴を上げる青タイツ。

実際には、まだ“そうなる”とは決まっていないのだが、そういったパターンが通例となっているらしい彼にとっては、ただの仮定であっても致命的だったらしい。

某・弓兵の心は硝子らしいが、この男の心は“豆腐並み”の様だ。

力尽きてガクツとうなだれた彼は、自分が今に至るまでの事の顛末を、ぶつぶつと自分から語り始めた。

\*\*\*\*\*

「 という訳なんだな、これが 」

「 ふむ 」

作者の都合（笑）で、青タイツの話が何やら大分端折られた様であるが、まあ、それはさておき。

青いのが親切丁寧に長々と話した事情を要約すると 。

要点その1：惚れた女を絶対絶命の危機から救うべく、現場へと英雄<sup>ヒーロー</sup>気取りで駆け付けた が、結局あと一歩といったところで間に合わなかった。

要点その2： と思った矢先に、巷で噂の“大怪鳥”<sup>ドスライマンクック</sup>が颯爽と現れ、“見せ場”を相取りされてしまった。

要点その3：それでもめげずに後日、件の女性に対し“熱烈な求愛（君のハートにゲイボルク）”をするも、その結果は“保留”という名の粉碎玉砕大喝采。

「 何という“負け犬” ツ、情けなさ過ぎて目頭が熱く

なってくるではないかッ」

言いながら口元を手で押さえ、顔を背けてプルプル震える金ぴか。

目元にはうつすらと涙まで浮かばせており　　しかし、押

さえた口元から漏れるのは明らかな“嘲笑”だった。

「ぐうの音も出ねえよ、くそつたれッ」

うなだれながら言う青タイツ。

俯かせたその表情には、えもいわれぬ哀愁が漂っていた。

「あ、あのッ」

と、そこで、むさ苦しい野郎二人（と言っても二人とも相当な美男子であるのだが）の会話に、戸惑い気味に割って入る少年の幼い“声”が一つ。

「ん？」

その声の発信源　　野郎二人が座っているカウンター席より少し離れた位置に、金ぴかと青タイツの視線が集まる。

そこには、先ほど聴こえた声の印象通りの気弱そうな

若干長めの茶髪と、所謂“男の娘”と呼ばれる部類の可愛らしい顔



立ちを持つ、推定十歳前後の幼い少年が一人、おどおどしながら居心地悪そうに立っていた。

鞣し革のサンダルにベージュの短パン、長袖の白いシャツの上からフード付きのマントを羽織っており、腰には大きめのポーチが下げられている。

総合して例えるなら、そこいら辺にいる子供に対し無理矢理“旅人”の格好をさせた様な感のある装いをしていた。

「どうした雑種、この“王”である我われに何か用か？」

傍若無人な態度で少年に問う金ぴか。

「！ よかった、やっぱり、あなただっただんですね ッ」

自らを“王”と称する金ぴかの言葉に対し、ピクリと反応して、少年は『やっと見つけた』と眩きながら、どこか安堵した様に笑みを零しながら溜め息を吐いた。

そして。

「 おねがいです“王さま” ッ、ぼくたちを、たすけてください ッ！！」

その場で、小さな頭を深々と下げながら。

少年は、自分の直ぐ目の前にいる黄金の鎧を身に纏って余裕の姿勢を崩さない“王”に、そう懇願した。

\*\*\*\*\*

“ランポス”。

それは、細身の体躯に青い鱗に黒い縞模様が特徴的な、二足歩行をする肉食の鳥竜種であり、一般的に“小型”の部類に位置付けられているランポスである。が、しかし、それも他のモンスターと比較して見ればの話である。

ランポス自体の全長は5メートルを裕に超え、全高も2メートル近くある為、人間からしてみれば十分に大きいと言えるだろう。

このモンスターは、基本的に数匹ないし十数匹の“群れ”で行動し、餌は主に草食系モンスターの“肉”を好んで捕食し、時には飛竜種等の大型モンスターの“卵”を狙う事もあるという。

「そのランポスが“大量発生”して困っているとは、あの小僧から聞いていたがよ、“あれ”は流石に多すぎやしないか？」

「ぬ」

森丘の北東、その深部に位置する、地上70メートル余りの小高い岩山の上から望遠鏡片手に下界を見下ろしながら、青タイツもとい青い槍兵は顔をひきつらせていた。

彼の直ぐ隣りにいる金ぴかも、しかめっ面を隠そうともせずには唸っている。

彼らの視界の先　　前方約600メートル地点にある、凡そ1キロ平方メートルのただっ広い草原。

本来なら緑色の原っぱである筈のそれが、今では三割以上が“真っ青”に染まっているのだ。

「あの“青い部分”全部がランポスだって言うのかよ、マジで洒落になってねえぞ、おいッ」

ランポスが形成する群れは、多くても精々“50匹”程度である。

しかし、あの草原を我が物顔で占領しているランポスたちの総数は、ざっと見てもその十倍はいるだろうか。

付け加えて、あの場に群れの全てが集まっている訳ではないだろう事を踏まえて考えれば、実際には“あれ”の数割分の群れが後ろに控えている計算になる。

「あの数を二人だけで殺るのは、ちよっとどころか、かなり厳しいぞ」

ランポス一匹一匹は、並みのハンターでも一撃で仕留められる程度の雑魚であるが、“群れ”を成した奴らは時に、激昂した大型モンスターより質たちが悪いのだ。

如何に百戦錬磨の凄腕ハンターであれ、下手に群れの真っ只中に突貫しようものなら、蟻の大群に群がられた羽虫が如く、奴らランポスの餌食になりかねない。

「で、“王さま”さんは、どう打って出るんだ？」

「はっ、何を今更知れたことを」

挑発的な口調で話を振る青い槍兵。

対し、“王”は余裕の笑みを以て応える。

「奴らは雑魚の分際で、我が領地と其処に住まう民に仇為したのだ、その罪は万死どころか“京死”に値する。我が力を以て、悉く《クワツツ！！！！》してくれるわッ！！！！！」

金ぴか王の啖呵と、それ割り込んできた、聞き覚えが有り過ぎて困る“咆哮”。

直後、ごうごうと燃え盛る巨大な炎の塊が、遙か虚空の彼方より隕石の如く飛来し　ランポスの群れのド真ん中へと墜ちた。

その、次の瞬間。



【超・番外編：牙獣紳士列伝その惨々 “某・女傑” 誕生秘話】前編

とっても変なおじさんたちだったけど、キュツとして、ドッカーンっ！！ ってなって、すっごくおもしろかったんだよっ by 蒼白の髪をおさげにした活発そうな少女

【超・番外編：牙獣紳士武勇伝その惨々 “某・女傑” 誕生秘話】前編

その少女は、“余所者”であるという理由から、ずっと迫害されて生きてきた。

生来の虚弱<sup>ろく</sup>体質故に病気がちで碌<sup>ろく</sup>に外出も出来ず そもそも体の色素が薄いせいで長時間日光に当たっていると火傷してしまっ体質だった為に、彼女が自由に外を出歩ける時間帯は専ら日が沈んでからだった。

ある者は、そんな少女を“幽鬼”の様だと気味悪がって遠ざけ、時には正面から口汚い言葉で罵りまでした。

同年代の子供たちに混じって外で遊ぶ事も出来ず、それどころか周囲の心無い大人たちの批判に悪影響を受けたらしい子供たちの反

応は冷たく、彼らからは石を投げつけられた事さえある。

しかし、そんな不遇の扱いを受けて尚、少女から笑顔が失われることは無かったという。

何故なら彼女には、とても心強い“味方”が居たのだ。

（ うん、そろそろ“来る”ころかな ）

寢室のベッドの上で一人、窓から外の様子を窺ってみた。

道を行く人々の“影の形”から太陽の位置を把握し、今が丁度、昼頃だろう事を知る。

週に一度だけであるが、“彼”は何時も昼食時に自分の様子を見に来てくれるのだ。

コンコンコンツ、と部屋の扉をノックする音が三回、寢室に響く。

「 上がらせて貰うニヤ 」

相変わらずのぶつきらぼうな物言いに、思わず苦笑してしまう。

扉を開けて部屋に入ってきたのは、一匹のアイルーだった。

毛並みは白黒、目つきは鋭く、その為かアイルー特有の“愛らしさ”は形を潜<sup>なり</sup>めている。

旅人たちが好んで着用するフード付きのマントを羽織り、必要最低限の日用品や貴重品を詰め込んだポーチと使い古された短刀を腰元に下げたその姿は、如何にも“歴然の戦士”といった印象を醸し出していた。

彼の名は、“ゲン”。

“ゲンさん”の通称で広く親しまれ、かつては優秀な“オトモ兼キッチンアイルー”として多くの主人を支えてきた、今は“フリーの傭兵”として名を馳せているベテランの戦士である。

\*\*\*\*\*

「それじゃあ、またね、ゲンちゃん」

「ああ、またニヤ」

些細な日常会話を交えた二人きり（というより“一人と一匹”）での昼食を終え、彼 傭兵アイルーのゲンちゃんは、素っ気ない返事を残して帰っていった。

ゲンちゃんは、一般的なアイルーたちが皆そうしている様な語



尾に“ニャ”を付ける話し方を、以前まではしていなかった。

どうして、みんなと違う話し方をするの？ と聞けば、『自分には似合わないから』と彼は答えた。

(そんなことないと思うんだけどなあ)

自分が思った事を彼に直接伝えたら、ぷいと顔を背けられてしまった。

嫌われちゃったかな？ と、その時は不安になったけど

翌日から二人きりの時だけ、彼は語尾に“ニャ”を付ける様になったのだ。

最初の一週間くらいの間、ちょっとこちなさそうに喋っていたから、わたしの発言でゲンちゃんに無理をさせている様で罪悪感が芽生えた。

でも、それ以上に、わたしに向けてくれる彼なりの優しさが心地よかった。

ゲンちゃんは、口ではひねくれた言葉で返してくるけど、わたしにはすごく優しい。

わたしの両親が、ゲンちゃんのオトモ兼キッチンアイルーとしての“最後の主人”だったという縁で、私の事を気に掛けてくれるそうだけど。

（ ほんとに、“それだけ”なのかな ）

ゲンちゃんのわたしを見る目が、稀に悲痛な色を帯びる時がある。

それは、街に住む同年代の子供たちと比較すると、決して恵まれているとは言えない環境下にあるわたしへの“同情”とかなんかじやなくて。

なんていうか、こつ、よくわからないのだけど 『なにかを“怖れている”ようできて、それを寧ろ“求めている”ような感じ』がする と言えはいいのだろうか。

その“なにか”が、どういったモノなのかはわからないけど。

（ コワイよ、ゲンちゃん ）

それが、あまり“よくないモノ”なのだろうことは、なんとなくだけどわかるのだ。

そして、その“よくないモノ”が、いつかゲンちゃんを、自分の手が届かない何処か遠い場所へ連れ去ってしまうのではないかと思えて、酷く恐ろしかった。

「 神さま、おねがいです 」

だから、少女は祈った。

「 わたしは今以上の幸せなんていらなから、どうかゲ  
ンちゃんを守ってあげてください ッ」

それは、この弱肉強食の世界に於いてさえささやかな、或いは、  
とてつもなく我が儘な願いなのかも知れない。

けれども、未だ広い世界を知らないまま生きてき  
た少女にとって、嘘偽りない本心からの願いだった。

\*\*\*\*\*

所変わって、“街”の景観を一望できる某所の崖  
の上で。

そこには、二つの如何にも怪しい人影があつた。

「 いや、近頃の“よう”は過激だなあ、おい」

一方は、身長170センチ半ば程の引き締まった体躯に全身黒尽  
くめの忍装束を纏った、如何にも“忍者”といった風貌を持つ白髪  
の男。

男らしい太い眉に猛禽類を思わせる鋭い目つき、口元は黒いマス

クで覆われており、額当ての鉢金には“萌”の一文字が刻まれている。

「うむ、初めて“竜撃砲”なる物を受けたが、意外と痛かったぞ  
ちよつと気持ち良くもあつたが」

もう一方は、全高3メートル近い八頭身のマッスルボディを持つ桃毛獣コンガの、ような姿をした生物ナマモノ。

「何故か髪(?)型がアフロと化しており、付け加えて何やら全身煤けているが、それでも股間にはためく禪ふんどしの輝く様な“白さ”だけは微塵も損なわれていない辺りが、“彼”という存在の意味不明加減にさり気なく拍車を掛けている。

「今更な気もするが、竜撃砲食らって“痛い”で済ませられるお前さんの頑丈さが信じられんよ、いや本当に」

そういう彼自身はというと、某・幼女の“竜撃砲”が火を噴く直前で、自身の直ぐ側に居た桃毛獣(つばい姿をした生物)を“盾”にした為、全くの無傷であった。

「まあ、それはさておき、少しばかり寄り道こそしたものの、目的地である“街”に漸く到着した訳だが」

『次なるターゲット(よう、よ)の“当て”はあるのかね?』と、ピンク色のゴリラの姿をした新手の“UMA”

的なナニカが問う。

「くつくつくく、 “元・暗殺者”<sup>アサシン</sup>の情報網を侮って貰っちゃあ困るなあ、桃毛獣のとつつかくん」

対し、変態忍者は、自信満々に答えた。

「あの街に住む幼女の総数は、先月末の時点で“99柱”。その内、オーバースランク級の“美幼女”が3柱存在する。まあ、3柱の内1柱は、さつき遭遇した“新米ハンター”の少女（：【超・番外編：牙獣紳士列伝その弐】紳士浪漫珍道中）【参照】”なんだがな。因みに、彼女の名前は“アイラ”メヴァ（10歳）”という」

得意気に笑みを浮かべながら語る変態忍者。

「どうやら彼の“幼女の数え方”は、“人（：人類の数え方）”ではなく、“柱（：神様の数え方）”であるらしい。」

Q：幼女とは、何ですか？

A：ずばり“神”です！

「なるほど。で、残る2柱は、どういったSクラス美幼女なのかね？」

「一方は“虚弱体質のアルビノ（非・フルフル）少女”で、もう一

方は“カリスマスキル持ちの天才おぜうさま”だ。この2柱の共通点は、何れとも絶世の美少女で“天涯孤独の身”であるという事だな

「先生つ、その幼女たちは“お持ち帰り（保護）”していいですか？」

『バナナは“おやつ”に入りますか？』的なノリの軽さで、ゴリラが犯罪宣言をぶちかました。

「だれが“イヤンクック（先生）”かつ！ 残念ながら、両者とも既に善良な保護者のポジションの方がいるから、“お持ち帰り（誘拐）”してはいけません」

「イエス・ロリータ・ノートッチ”、遠くから愛でるだけに留めておくんですね、わかります」

それはそれで犯罪臭がしないでもないのは、気のせいと思いたい。

変態二匹の間で“お持ち帰り”のニュアンスが微妙（笑）にすれ違っている点は、取り敢えずスルーしておいた方が吉だろう。

「わかってるならそれでよし！ と、そんなわかりきったことはさておいて」

どっちから“攻略”しに逝く？

その言葉にした似非忍者の顔は、マスクで半分以上隠れていたにも関わらず、これ以上ないくらい変態くさかった。

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9155t/>

---

ドスイャンクック物語～伝説の大怪鳥( 連載版)

2011年10月19日20時18分発行